

空、ヘベル、アベル　～伝道の本を読む意義～	18
イスラエルからの発想：SIGNBOARD.....	21
13. 汝の立つ所こそ世界の中心なり。 (出典、タルムード・ブラホット篇8)	
.....	21
12. 不公平の現実.....	23
(11) 汝の家の扉を貧しい者のために閉ざすな。	24
(10) 隣人愛	25
(9) 快樂とは.....	26
(8) 快樂.....	27
(7) 預かった宝石は返すべきか。	28
(6) バアルシェムトブの死に方	30
(5) 人間と死.....	32
(4) 人間創造.....	33
(3) 両耳を通りにむけよ。　　(イーディッシュ語集)	34
(2) 「値段が下がったら、買え」	35
(1) 「商人のまえでは、まず他の商品を欲しそうな顔をして見せよ」	36
イスラエルからの発想：SIGNBOARD.....	37
ユダヤ人の生活あれこれ　　手島佑郎.....	37
アウム (オム) と阿吽、そしてアレフ　　手島 佑郎.....	37
ユダヤ教の自殺観　　手島 佑郎	39
ユダヤ人と食後の祈り　　手島 佑郎	40
「パールツ　アター　アドナーイ、　エロヘイヌー　メレツ・ハオラーム、	41
ユダヤ教の祝祷　　手島 佑郎	43
「ユダヤ人とヒゲ」	46
「ユダヤ人がみんな黒い服を着るわけではないが...」	49
『ユダヤ人と離婚』	50
「ユダヤ人はなぜ割礼をするのか」	52
「ユダヤ人の子女教育」	54
「過ぎ越しのまつり (ペサッハ)」	56
ユダヤ人の食事「コーシャ」	57
ユダヤ人とシャバット	60
ユダヤの秋まつり	62
ユダヤ人の光のまつり「ハヌカ」	63
ユダヤ人の結婚式	65
ユダヤ古典から現代への示唆　　手島佑郎	69
～ 偏見について ～	69

～ 発言者の責任 ～	74
[日本の国会審議]	74
[議論不毛の人々]	75
[皇室と民主制]	76
[私案：天皇の効用]	76
[「いわゆる知識人」の独善]	77
[軍備と平和]	77
[実学の条件]	78
[他人を誤らせない]	79
[アブタリオンの教え]	79
[学者と経営者]	80
～ 教える者の心得 ～	80
[知恵の社会]	80
[ひとりよがりの理解]	81
[知識だけの理解]	81
[ラビ・ヘシエルの指導方法]	82
[自分の問題・自分の経験・自分のことば]	83
[教える者の条件]	83
[デマの原理]	84
民主主義の創造的破壊	85
[民主主義の凋落]	85
[政治不信の原因]	85
[民主主義の問題]	86
[民主主義の実体]	87
[民主主義の課題]	87
[リーダーと政治]	88
[バルカパラの物語]	88
～ Jubilee思想の本質 ～	89
[最貧国への債権放棄700億ドル]	89
[Jubilee]	90
[Jubilee思想の限界]	90
[貧者救済の条件]	91
[自由とは未来への社会責任である]	92
～ 伸びる人の特徴 ～	93
[伸びる人と伸びない人]	93
[教師の課題]	94

[反対派の存在意義]	94
[無関心という問題]	95
[伸びる人の特徴]	96
[ラビ・マッティヤの知恵]	96
[今年のポイント]	97
盲人とたいまつ	97
ユダヤ教法廷と裁判の仕方	98
(タルムードの人事論)	100
何時からシェマーの祈りを夕方は唱えるのか。 (ベラホット篇1：1)	101
取引と天の助け	104
トーラーを学ぶ意義	105
[タルムード研究] 人間の尊厳	106
個人のトーラーの名誉は、個人のトーラー研究にまさって重みがある。	108
[タルムード研究] 悪霊払いの呪文	109
天の声が叫んだ、「わが秘密を人にあらわにしたものはだれか」 (メギラ篇3 a)	110
[サムエル・ウルマンの詩集より /6]	111
終着地	111
賛美と信仰のうた	113
試験済みの処方	114
塵より塵へ返る サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)	117
汝と我 サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)	119
人生途上の恋文	120
「 青 春 」 サムエル・ウルマン (訳・手島佑郎)	122
1945年初冬の思い出より ゆうろう	128
夏のおわり ゆうろう	129
幸福という川 ゆうろう	130
「歌3首」 ～ギルボア山のふもとにて～	131
「もし・・・」	132
「光のために」 作詩： てしま ゆうろう	134
「まりちゃんと妖精」	136
「わたしは歌う」 詩：てしま ゆうろう	137
「平和への歌 (シール レ・シャローム)」	138
「江の島詣で」 詩：てしま ゆうろう	140
「雨の湘南」 詩：てしま ゆうろう	141
最近の中東情勢について (2001/March/2)	142

特別解説 : パレスチナ紛争の先行き	144
中東和平崩壊! : ~ パレスチナの刑務所からのイスラムの闘士の釈放 ~	146
~ イスラエル野党党首シャロンの暴挙と流血事件 ~	148
ラビン暗殺の背景	150
イスラエル独立50年を迎えたが 手島佑郎	153
最近の中東情勢について (2001/March/2).....	156
特集: イスラエル&パレスチナの紛争とその背景.....	158
特別解説 : パレスチナ紛争の先行き	158
ラビン暗殺の背景.....	164
イスラエル独立50年を迎えたが 手島佑郎	167
西洋美術史~中世.....	170
オリエントの興亡.....	177
東地中海の岸辺に	177
シリア、パレスチナにはセム語族系諸民族が歴史の跡を刻んだ。ヘブライは紀元前15世紀、パレスチナ(カナーン)に定住し始めた。紀元前12世紀の“出エジプト”、10世紀の“ソロモンの栄華”など、民族の伝承と歴史は「旧約聖書」にその記憶をとどめている。北部のイスラエル王国は紀元前8世紀、アッシリア人の軍靴に踏みにじられたが、イェルサレムを都とする南部のユダ王国は、新バビロニア、ペルシアの攻勢に耐えて、民族の歴史を後代に残した。.....	177
ヘブライ人の勢力圏の北の地中海岸に、フェニキア人はシドン、ティルスなどの都市国家を経営した。地中海貿易に進出し、カルタゴを始め多くの植民市を作った。ジブラルタル海峡を抜けて北大西洋へ、インド洋へも航海したといわれる。ローマ人はかれらをポエニと呼んだ。カルタゴとローマの戦い“ポエニ戦争”の呼称の起こりである。.....	177
文明の形成.....	178
メソポタミアの夕映え.....	178
3, 鉄器文明へ	179
4, 世界帝国へ	179
5. ナイルの賜	180
福音書とユダヤ教.....	181
パレスチナ問題 Q&A	187
原因はなに	188
Q パレスチナ問題の原因は?	188
対立の経過は.....	188
Q パレスチナとイスラエルはどのように対立してきたのか?	188
和平交渉は	190
Q 和平交渉が始まったけれど...	190

現在の衝突は..... 191

Q 現在の衝突をどうみたらいいのか? 191

Embassy of ISRAEL, TOKYO
イスラエルという国

Search

Facts about ISRAEL

歴史

- ・聖書時代
- ・外国の占領下
- ・現代イスラエル
- ・イスラエルの略年史

国のしくみ

国土と人々

社会

保険と社会福祉

教育

ユダヤ民族誕生の地、それがエレツ・イスラエル(イスラエルの地)である。ユダヤ民族の長い歴史の中で、多くの重要な事件・事柄がこの地で展開した。最初の1000年間は聖書に記録されている。

その文化、宗教及び民族のアイデンティティは、その地で形成された。その社会は、民族離散の後もイスラエルの地で消滅することなく、数十世紀にわたって連綿として続いてきた。長い離散の時代、ユダヤ人は片時もエレツ・イスラエルを忘れたことはなく、そのきずなを断つこともなかった。1948年、イスラエル国の建国によって、2000年前に失われた民族の独立が回

● [科学技術](#)

● [経済](#)

● [文化](#)

● [世界とイスラエル](#)



復された。

聖書時代

族長の時代

ユダヤ民族の歴史は、約 4000 年前（紀元前 17 世紀）の族長アブラハムとその子イサク、孫のヤコブによってその幕が開かれた。創世記に書かれている彼らの遊牧生活の様子は、紀元前 2000 年～1500 年頃と思われるメソポタミアから発掘された文書に語られている。

旧約聖書には、アブラハムがどうしてカルデアのウルからカナンへ導かれ民族の祖先に選ばれ、唯一神の信仰者となったかが書かれている。国に飢饉が広がったとき、ヤコブ（イスラエル）と 12 人の息子は一族とともにエジプトに移り住んだ。しかし時代がくだって彼らの子孫はエジプト人の奴隷となり、強制労働に苦しむことになった。

出エジプトと定着

奴隷の身となって 400 年後、イスラエルの民はモーセに率いられて、自由をめざしエジプトを出た。

聖書によれば、モーセは民をエジプトから連れ出し、神が祖先に約束した土地エレット・イスラエルに彼らに戻すために、神から選ばれたという（紀元前 13 - 12 世紀）。イスラエルの民は、シナイ砂漠を 40 年間流浪し、その間、十戒などモーセの律法を授かり、一つの民族として結ばれた。出エジプトは

ユダヤ人の民族の記憶に忘れられない刻印を残し、自由と解放のシンボルとなった。

毎年、ユダヤ人は三大祝祭、ペサハ（過越しの祭り）、シャブオット（律法授与の祭り）、スコット（仮庵の祭り）を祝い、当時の出来事をしのんでいる。

それから 200 年間、イスラエル人はその土地のほとんどを征服し、それまでの遊牧生活を捨てて農民や職人となった。そして人々はある程度、経済的社会的に統合されていった。

比較的平和な時代が続くが、時には戦闘も起きた。戦争が起こると、人々は、「士師」と呼ばれる指導者の下に集結した。政治的軍事的な能力や信頼を集める能力のある人物が士師に登用されたが、士師は外敵と戦う必要がある時にだけ指導者として働いた。

その後、ペリシテ人（海岸平野に足場を持つ小アジアから移住した海洋民族）の脅威にさらされたが、この時イスラエルの部族組織が持つ本質的弱点が露わになった。人々は部族を統一し、民族を恒久的に治める支配者を求めるようになった。

君主政治

ユダヤの最初の王はサウル（紀元前 1020 年）で、部族組織がまだばらばらの時に王政を敷いた。後継者ダビデはこれを引き継ぎ、完全な君主政治を築きあげた。

ダビデ王（紀元前 1004 - 965 年）は、ペリシテ人を撃破するなど軍事遠征を

成功させ、近隣王国と友好同盟を結び、イスラエルをその地方の強力な勢力に作り上げた。

その結果、ダビデ王の威勢はエジプトや紅海の境界からユーフラテス川岸にまで及ぶようになった。国内でもダビデは新しい統治を始めた。エルサレムを首都に定め、イスラエルの12部族を一つの王国に統一し、エルサレムと君主政治を民族の支柱においた。

聖書の言い伝えでは、ダビデには多彩な才能が備わっていたようだ。彼の詩の才能、音楽の才能などは、「ダビデの作」と言われている詩篇の中にかがうことができる。

ソロモン王(紀元前965 - 930年)は、父ダビデ王が築いた国を継承し、その王国をより強大にするためにもつぱら努力した。近隣王国と条約を交わし、政略結婚を重ね、国内に平安を確立し、王国を当時の世界の列強国に並ぶ国に育てあげた。ソロモン王は外国との交易を広げ、銅の採鉱や金属精錬など大きな事業を進めて国の経済を発展させた。また、政略上、経済上重要な町の防備を堅め、新しい都市の建設も始めた。ソロモンの建築事業で冠たるものはエルサレムの王宮と神殿であろう。これらはユダヤ人の民族生活、宗教生活の中心となった。旧約聖書のなかの箴言と雅歌は、ソロモンの手によるものといわれている。



南北王国時代

ソロモンの完成した統一王国という支配体制は、一般民衆の不満から終わりに近づいた。人々はソロモン王の野心的事業のために重い租税と賦役を払わされていたのである。同時に、自分の出身部族を優待したことも他の部族を憤慨させ、君主政治と部族分離主義者との対立が次第に大きくなった。

ソロモンが亡くなると(紀元前930年)反乱が起こり、北方諸部族が分離し、国は北王国のイスラエルと南王国のユダに分裂した。

イスラエル王国はイスラエルの10部族の地域にサマリアを首都として、19代の王の下に200年以上の統治が続いた。一方、ユダ王国はユダとベンヤミンの2部族の地域にエルサレムを首都として、ダビデ直系の王によって400年間統治された。しかし、アッシリア帝国、バビロニア帝国が拡張を始め、先にイスラエル王国を、次にユダ王国をその支配下におさめてしまった。

イスラエル王国は紀元前722年アッシリアに滅ぼされ、民は追放されて忘れ去られた。その136年後、今度はバビロニアがユダ王国を征服し、神殿を破壊(紀元前586年)し、住民のほとんどをバビロニアに連れて行って捕囚にした。

第一離散時代

(紀元前 586-538 年)

第一次ユダヤ国家はバビロニアに征服され滅亡したが(最初の王国時代を第一神殿時代ともいう)、人々とイスラエルの地との絆は断ち切られることはなかった。

バビロンの川のほとりに座って、
人々はいつも祖国を想っていた。

「エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば、わが右の手を衰えさせて下さい。もしわたしがあなたを思い出さないならば、もしわたしがエルサレムをわが最高の喜びとしないならば、わが舌をあごにつかせてください」
(詩篇第 137 篇5～6節)

紀元前 586 年の第一神殿崩壊後に起こったバビロニア捕囚は、ユダヤ人の離散の始まりであった。

バビロニアにおいてユダヤ教は、特殊な思想体系として、国外での生活様式として非常な発展を始めた。ユダヤ人が離散の間も民族として生き残り、精神的な帰属意識を確認できたのはこのためであった。そして、一つの民族として結ばれた人々の未来を築くため、非常な勢いで浸透していったのである。預言者は、宗教的思想家であり、神から啓示を受けられる人であると認められたカリスマ的人物であった。

彼らは、王政時代からエルサレム

崩壊後の 100 年間まで(紀元前 586 年)、神の告知の叫びを上げた。宗教、モラル、政治に関して王の相談者であり、ある時は王の批判者ともなった。人々と神の間に立つ預言者は、正義が行われるべきだという堅い信念に動かされ、ユダヤの民族的倫理について説得力ある解説を述べた。

預言者たちの行いは、神の啓示を受けて書かれた詩や散文の著作に残っており、その多くは聖書におさめられている。

預言者たちの普遍的な不朽の呼びかけは、人間の根元的な価値判断から発せられたものである。「善を行うことをならい、公平を求め、しいたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ」(イザヤ書第 1 章 17 節)という預言者イザヤの言葉は現代社会への呼びかけでもある。

各時代のメノラー

黄金のメノラー(七枝の燭台)は、古代エルサレムのソロモンの神殿で礼拝用に用いられた。







それ以降メノラーは、ユダヤ人のシンボルとして世界中あらゆるところで用いられ、その形も微妙に変化しながら守られてきた。



【ロ
ー
マ・
ティ



【イ
スラ
エル
国家

	トス 凱旋 門の 浮き 彫り (紀 元一 世 紀)】		紋章 にあ るメ ノラ ー】
			
	【ハ スモ ン時 代の 貨幣 (紀 元前 1世 紀)】		【ロ ーマ 出土 の金 箔で 装飾 され たガ ラス 皿 (紀 元4 世 紀)】
			

[NEXT→](#)

[[Office information 大使館のご案内](#)] [[Online magazine オンラインマガジン](#)] [[Peace process 中東和平](#)]

[[Site map サイトマップ](#)] [[Search 検索](#)]

Information designed by [CYBER GRAPHICS.INC.](#)

from 2001 Visit in Jerusalem and Jordan

photo and copyright by Jacob Yuroh Teshima, 2001.

Jerusalem in the dawn 夜明けのエルサレム



Ramah, the home town of Prophet Samuel

預言者サムエルの故郷、ラマ (エルサレム北西部)



Western view (above) from Ramah

ラマから西方・地中海方向を望む



Eastern view toward Jerusalem 東方・エルサレム方向を望む



JORDAN

The deep valley of the Zarqa-Yabok river, Jordan

ヤボク川は今も人をよせつけない深い溪谷



Jacob the Patriarch crossed the Yabok River here.

聖書中の人物ヤコブはここマハナインでヤボク川を渡ったか？



Pella, the ancient Roman town

ヨルダン川北東の谷合の遺跡ペラのたたづまいは美しい



Yarmuk river, the border between Jordan, Israel and Syria

Umm Qayis, the ancient Gadara

豚が駆け下りたという崖の上の遺跡ガダラ、今日のウムケイース



Al Shamli, the ancient capital of Gilead

ギレアデ人バルジライの宮殿跡と伝えられるアルシャムリのイスラム教会堂



Beautiful and romatic....! Movenpick Hotel at the Dead Sea, Jordan.

こんな美しい楽園が死海のほとりにあった メヴェンピック・ホテル





Mt. Zion and the old city of Jerusalem in the early morning
早朝のシオンの丘とエルサレム旧市街

May peace prevail over Jerusalem and the entire Middle East!

[Return to the front page](#)

禁無断転載：写真撮影、手島佑郎

イスラエルからの発想：SIGNBOARD

「トーラー研究会」会報：トーラーの門より

[「トーラーの門」バックナンバー](#)

[トーラー研究会の案内](#)

[\[フロントページへ戻る\]](#)

空、ヘベル、アベル ～伝道の書を読む意義～

(伝道の書1章)

手島 佑郎

「空(くう)の空、ヘベル ハバリーム」伝道者は言う、「空の空、いっさいは空である。

何の余得が人にあるか、太陽の下で彼が労するすべての苦勞に。

世代は去り、世代は来る。地は永遠に変わらない」 (伝道の書1章2～3節私訳)

昨年7月から9ヵ月かけて「伝道の書」をトーラー研究会で読んだ。「雅歌」とならんで旧約聖書のなかの異色な書物の一つである。文面だけを読むと、この書物の作者は人生に対して虚無的で、厭世感にみちた人だという印象をぬぐえない。なぜ、このようにニヒルな内容の作品が聖書のなかに収録されたのか。わたしには永い間ずっと疑問であった。

じっさいにラビの註解を参照しつつ、伝道の書を読んでもみると、これまた文面の印象とちがって、人生への積極論を訴える書物であることが分かった。

そういえば、「雅歌」を読みはじめる前も、同様の疑問をいただいていた。なぜこのようにエロチックな作品が聖書に含まれているのか。その疑問は、ユダヤ教のラビたちの註釈を手がかりに雅歌を読み解くうちに解消した。ユダヤ人は、あのエロス表現を、全能者と人間の関係の象徴として読んでいたのである。それだけに内容が深く、考えさせる材料が沢山あった。雅歌の勉強はかんたんに読了できると思っていたのに、8ヵ月を要した。

ユダヤ人と日本人の相違のひとつは、反問するかしないかである。ユダヤ人は物事を額面だけで受け取らず、それが真実かどうか、他に考えられ得る観点はないかどうか問い直す。日本人はだいたい額面だけ見て、それで事を進めてしまう。

わたしは、自分もやはり日本人だなあとすることがある。というのは、こういう相違を観念では知っていても、いざとなると、わたしも物事の額面や現象の表面だけを見て判断してしまうことが多いからである。現に、さいしょ伝道の書の字面だけを読んでニヒルだと思ひ、雅歌の文面だけを読んでエロティックだと思っていた。疑問らしきものが浮上するのは、落ち着いて1～2度テキストを読み返してからである。ユダヤ思想研究30数年やっているが、おのれの疑問の鈍さをみると、まだまだ修業が足りないのに気付く。

伝道の書というのが、原文ではコーヘレットである。これは「召集者」の意味であって、伝道者の意味ではない。イスラム諸国では1日4度の祈禱の時刻に、町の中央の高い塔の上の拡声器から、「アッラー、アクバー！ アッラーは偉大なり。もの皆いそぎ礼拝に集まれ～！」と礼拝への召集の声がひびく。昔は直接、召集人が塔の上で礼拝時刻を叫んでいた。

ユダヤ教の社会でも、厳格に戒律厳守する原理主義者のあいだでは、今も礼拝時刻が近づくと寺男が商店街の中を「礼拝だぞ！」と叫びながら走り回る。

ということは、伝道の書は、宗教生活を第一にする者の立場から綴られた人生訓なのである。これは、単純にニヒリズムを主張する書物ではないのだ。

「空の空、へベル ハバリーム」と主人公は宣言する。へベルとは吐息のことだ。ハバリームはその複数形である。吐息のように儂い。人類最初の殺人犠牲者となったのはカインに殺されたアベルであるが、アベルのヘブライ語原文はへベルだ。彼の短命を吐息に例えたのである。

しかしラビたちは問い直す。本当に空(くう)なのか。

そういえば、ダビデは「人は息にひとしく、その一生は過ぎ行く影にひとしい」(詩篇144)と述べている。だが、影というのは、影の本体となる実体があってはじめて、影もまた存在するのではないか。吐息もまた吐き出す実体があつての結果ではないか。

そうだとすれば、「空の空」という表現は、人間世界の現象がいかに堅牢であり、栄華をきわめるようであっても、あるいは一時的瞬間的な出来事であるにせよ、じつは永遠なる実体の反映なのだという意味に変わってくる。

永遠と比べると、人間の営みはやがて消え行く影にすぎない。影にすぎないとはいえ、永遠を反映している点にこそ、人間の営みの価値がある。そうラビたちは教えている。

ラビたちの目には、伝道の書は厭世感にみちた書物とは映らない。真正面から人生と取り組むことの大切さを教える問題提起の本と映る。その鍵となる一節が、「何の余得が人にあるか、太陽の下で彼が労するすべての苦勞に？」という疑問文である。

日本的読み方をすれば、人は苦勞しても余得はないという回答になりそうである。しかし、ユダヤ人は疑問文を問い直し、第3の回答をみちびく。

もし苦勞しても余得がないというのであれば、心の欲するままに自分の道を歩めばいい。何をするのも人間の勝手だ。だが最後にその一生を計量し、審判を下すのは神である。そのことだけは承知しておけと。(参照、伝道の書 11:9)

一見、自由気ままなデカダン主義を提唱しているようだが、最後の審判だけは失念できない。

ユダヤ人にとっては世俗主義といえども、結局のところ神の支配から逃れられない。

それどころか、第4の回答にも気がつく。余得が期待できるから人は苦勞するのであるが、人の苦勞は神にどのような余得をもたらすだろうか。ラビたちは、反問する。

人間自身の利益のためだけに苦勞し、全宇宙、森羅万象をすべおさめている神に何の利益をももたらさないでいいのか。

反問して到達する結論が、またまた神と直面する結果になる。

どんなに時代が変わり、そこに住む人々の世代が交代しても、世界には不変のものがある。その一つが大地であると、コーヘレットは指摘する。人は神の掟(善悪規範とか倫理)をししば踏みにじるが、大地(自然)は神の掟に従い、神の指図に服してい

る。この点に大地の不変性のゆえんがある。それゆえコーヘレットは叫ぶ、人よ、大地のような生き方をしているかと。

大地のように己を低くして生きることが、永遠につながる秘訣なのだ。

西暦 2001 年も、はや半ばを過ぎた。いつしかミレニアムという言葉への感動をも忘れはじめている今日この頃である。いったい今年の前半は、充実した「実」のある日々であったのか。

もしコーヘレットが現代に姿を現わせば、我々に向かってそのように問いかけるであろう。

人生は空の空であると、うそぶいて汝は満足できるのか。もし充実し、手応えのある人生を送りたいのであれば、汝はどのように日々を過ごすべきか。

伝道の本(コーヘレット)を読むということは、このような問いかけに自分をさらしながら、

もう一度あらためて自己点検する機会なのである。

イスラエルからの発想：SIGNBOARD

新シリーズ： ユダヤの知恵 99 手島佑郎

[\[フロントページへ戻る\]](#)

13. 汝の立つ所こそ世界の中心なり。 (出典、タルムード・ブラホット篇 8)

パリのエトワール凱旋門のうえに立つと、真下の広場から放射状に道路が広がっているのが見える。ああ、ここが世界の中心なのだと思ってしまう。

事実、ナポレオンはじぶんの住む花の都パリを世界の中心だとした。そして、じぶんが中心だという考えは、おのれの意思を通して、周囲の人びとや、他民族を支配しようフランス帝国再建を考えた。これは自己中心主義のおそろしい点である。

たまには、じぶんは世界のはてに立っているのだと考えてみてはどうだろうか。

とくに都会の人は、じぶんの住んでいる町が世界の中心、国の中心だと思しやすい。だが、都会なら、何でも近くて、便利かというと、かならずしもそうでない。ちょっと買い物に出るだけで、片道一時間とか、一時間半とか、きちょうな時間をついやしてしまう。それでいて、何も目的のものを入手できずに、むざむざ空手でかえってくることも、けっこうある。

あんがい、都会こそへき地であり、世界のはてなのかもしれない。

いなかにおれば、それなりに自給自足して、たいして不便を感じない。不便を感じなければ、他人をうらやんだり、他人とあらそったりすることもない。

しかも、建物がなから、どこまでも、じぶんを中心に四方を見渡せる。

いやそればかりか、人があるところ、どこでも頭上にお天とうさまが照っている。夜になれば、山をあるこうと、野原をすすもうと、右にまがろうと、左にそれようと、どこまでも、お月さまが追っかけてくる。人間が中心でなければ、太陽や月がつきまとうはずがない。これは、人に自信を与える、いなかならではの体験である。

もしあなた都会に住んでいて、何をすることもお金と他人のサービスに依存し、なおかつ、ほんとうは自給自足できていないのであれば、あなたは、むしろ世界のへき地にいるのではないだろうか。できれば、いなかを訪れて、真の意味での世界の中心とはどういうところにあるか、よくよく考えなおしてみることだ。

人が立っているところは、どこであれ、その人には世界の中心のはずである。

12. 不公平の現実

「正しい人は悪人を、賢人は愚か者を、金持ちは貧乏人を、

それぞれの能力で隣人を助ける義務がある」（出典、ゾハル・第一巻 208）

世の中はけっして公平なものではない。不公平が現実である。

もし、みんな均質でみんな同じ機能であったら、これほどつまらない世界はないであろう。いかに美術館にすばらしい絵画がかかっているとはいえ、もしぜんぶ同じ絵であるとしたら、たちまち幻滅である。

むしろ、不公平であっても、人びとが、それぞれの個性と能力の長所を提供して、短所をおぎなうほうが、社会の有機的密度がたかくなるのではないか。

ミッドラシュのなかに、つぎのような小話がある。

ある婦人がラビ・ヨシにたずねた。

「なぜ神はかしこい者に知恵を与えて、なぜおろか者に知恵を与えないのですか」

「そうだね。たとえば、金持ちと貧乏人がお金を借りにきたとしよう。あなただったら、どちらに貸すかね」

「もちろん、金持ちに貸します」

「それはまた、どうしてだね」

「だって、先生、もし金持ちがそのお金を事業に投資して、しかも失敗しても、まだ他にも財産をもっているでしょうから、それを処分して借金を返せるでしょう」

ラビ・ヨシは、すかさず彼女に説明した。

「いやー、神様の場合もまったく同じだよ。もし知恵をかしこい者に与えれば、それをいろいろ活用して、もっと価値をたかめるだろう。だが、もしおろか者に知恵を与えても、きっと馬鹿なことにつかって知恵をなくすだろうからね」

たとえば、知識のない者に、いきなり高度のコンピュータを与えても、その活用方法がわからなくて投げ出すのと同じである。

まずは能力のある者に知識でも、財産でも、正義でも、それぞれ与えて、社会に役立つように活用してもらおう。かれらには、また、そうする社会的義務がある。

そして、他方では、能力のない人も、できる範囲のなかで、すこしずつ不得手なことを克服していくように努力する。これが、社会を改良の原理のはずである。

(11) 汝の家の扉を貧しい者のために閉ざすな。

(出典、デレック・エレッズタ)

ユダヤ人の社会ではごく自然におこなわれるが、日本の社会で、さいきん失われてしまったのが、喜捨(ツダカー)である。これはイスラム教のサダカ(慈善)とまったく同じである。じぶんの収入や財力のなかで余裕のある部分を、公共や福祉のために喜んで捨てる。それが慈善や喜捨の本質である。

いつのころからか、日本人は喜捨をおしむようになった。むかし、まだ貧しかったころには、もっとみんなが助け合っていたように思う。

ユダヤ人は、貧しいからといって、喜捨をしないわけではない。むしろ、「収入が少なければ、喜捨につとめよ」というくらいである。かれらは貧乏でも、収入がゆるす範囲で喜捨につとめる。だから、金持ちになっても、喜捨はやめない。

ニューヨークのブルックリンに、ハシディズムというユダヤ教の一派の指導者で、ラビ・モイシェ・ヘシェルという宗教家がいた。

あるとき、ラビは心臓病の手術のためにマウント・サイナイ病院に入院した。同室の患者もユダヤ人であった。かれはラビよりもさき入院していたにもかかわらず、手術をうけていなかった。ラビはたずねた。

「あなたは、どうしてまだ手術を受けないのですか」

「う～ん、じつは手術代をはらえるだけのお金がないものですから」

それを聞いて、ラビはしばらくして言った。

「そのお金は、わたしが払ってあげましょう。わたしより先に手術を受けなさい」

あらかじめ疾病保険に加入していないで、米国で入院すると、おそろしく高額の治療代の請求書がくる。たぶん、ラビ・モイシェ・ヘシェルは、同室のユダヤ人のために全額手術代をはらうことになったのであろう。かれは、じぶんの手術を見送って、同室の貧しいユダヤ人にさきに手術をうけさせた。

その後、じぶんが手術を受けるためのお金を工面するため、いったん退院しているあいだに、ラビは自宅でなくなった。

じぶんのいま持っている富のなかから弱者を助ける。それが喜捨の精神である。

(10) 隣 人 愛

汝の隣人を汝自身のごとく愛せよ。

(出典、旧約聖書「レビ記」19章 18節)

右のことばは、一般に、キリストのいましめとして知られている。これが出発点となって、キリスト教では、隣人愛の実践と社会奉仕の精神をおしえる。

しかし、これは、がらんらい旧約聖書のなかのユダヤ教のおしえである。ユダヤ人がこのことばの意味を考えるさいは、つぎの二つのことを問題にする。

第一は、他人を愛するまえに、じぶん自身をほんとうに愛しているかである。

とかく、だれでもじぶん自身を愛していると思っているようだが、たいていは甘やかしているだけなのではないか。もし、そうであれば、このことばの意味は、他人をも甘やかせということになる。

第二に、なぜ隣人を愛しなければならないか。それはどのように愛するかである。参考までに、前後の文章を引用してみよう。

「あなたは、兄弟を心で憎むな。あなたの同僚をよくよく諫めなさい。かれのために罪を負うな。復讐するな。あなたの同胞にうらみをもつな。あなた自身のようにあなたの隣人を愛せよ。」(レビ記 19 章 17～18 節)

つまり、ここで教えているポイントは、隣人にたいして自制心のある理性的行動をするようにしなさい

いであって、かならずしも隣人への奉仕ではない。

ラビ・アキバは言った、「聖書でもっとも重要な戒めは、汝自身のごとく汝の隣人を愛せよである。なぜならば、この戒めがあるおかげで、じぶんがはずかしめられたから、仕返ししようと人びとは言わなくなる」。

ラビ・タヌフマがさらにおぎなつて、一言くわえた。「もし、そういうことをすれば、神をはずかしめることにもなるからね。なぜなら、人は神のイメージに似せてつくられたのだから」と。

つまり、あなたも隣人も、神のイメージをやどす尊い存在なのだ。だから、たがいに尊敬しあっていかなければならない。そして、節度ある社会的行動をこころがける。それが、「汝自身のごとく汝の隣人を愛せよ」の原点の意味なのである。

(9) 快樂とは

本人の意に反してやって来た快樂は快樂でない。

(出典、タルムード・ペサヒーム篇二五)

祭りなどの行事は、世界中どこの国でも、ごちそうが出る機会でもある。ユダヤ人の社会でも、祭りはごちそうをたのしむ。とくに、春のペサッハ、冬のハヌカ、早春のプーリム、この三つの祭りでは、ごちそうの指定がうるさい。

ペサッハ(過ぎ越しの祭り)は、モーセがユダヤ人の先祖60万人をひきいてエジプトから脱出した記念の祭りである。別名、除酵祭といい、この祭りがつづく一週間のあ

いだ、いっさいイーストの入ったパンや食品はたべれない。ぱりぱりの特大クラッカーと、わさびやレタス、これが主食となる。エジプト脱出のさいの、あわただしい食事の記念である。ユダヤ人は三千年以上も、こういう粗食をごちそうに仕立ててきた。

どんなに粗末な食事でも、そこに感激があれば、最高の料理になる。他方、どんなに豪華な料理でも、それが強制されたものであると、これは苦痛となる。タルムードは、外部から強制された快樂を、だんご排除しようとする。

その第二の例が、じつはハヌカ(奉獻祭り)である。これは、紀元前164年に、ユダヤを支配していたセレウコス(セリュシ)の軍隊を撃破し、ユダヤ人が独立を勝ちとり、エルサレムの神殿を神に奉獻しなおした記念の祭りである。

この発端は、ギリシャ系王朝のセレウコスが、ユダヤ人に、ギリシャ式の全裸でスポーツ競技をさせたり、豚肉をくうという風習を強制したことへの反発であった。いかに、それがギリシャ人の好みであっても、ユダヤ人にとっては、はずかしめそのものだったのである。そういうことへの反感がつもりつもって、ユダヤ人の蜂起となったのである。この祭りでは、豚肉への反発で、牛乳とチーズ、それにパンケーキをたべて、食事の純潔を強調する。質素でも、じぶんたちの口にあう食物が、いちばんのごちそうである。

そして、プリム祭り、これは、ユダヤ人の絶滅を計画したペルシャの大臣ハマンの陰謀を未然にふせいた記念のまつりである。そこで、陰謀家の耳に注意せよというわけで、「ハマンの耳」とよぶ三角形の菓子を食べる。

何であれ食べ物は、それが楽しみかどうかは、まことに本人しだいである。

(8) 快 楽

少なめに食べ、控えめに着よ。しかし素敵な家に住め。

(出典、ミッドラシュ・ベレシートラバ 20)

アダムとイブが、エデンの楽園を追われて以来、人間の生活のなかに文明というものがはじまった。それは労働と食事と、衣服と家にはじまる。

楽園時代は、食事の心配はなかった。仕事は、いちおう、神から命じられて、楽園の管理をしていた。だが、ノルマがあるわけではなく、いたって気ままであった。

楽園を出て、エデンの園の東に住むことになったとき、さいしょに必要なになったのは衣服である。はだかで恥ずかしいというのも、衣服が必要な理由のひとつだった。もうひとつは、危険予防である。楽園には、およそ危険などというものはない。何もなかった。しかし、楽園の外は、無防備でいるわけにはいかなかった。

つぎに心配したのは、食糧の確保であった。野菜やくだものが豊富な夏は、それほど食糧の心配をする必要はないが、秋・冬となると、そうはいかない。そこに真剣に労働と取り組まなければならない事態がはじまった。

しかし、家をどうしたかについては、一言もふれていない。

中近東の夏は、戸外で寝たほうがずいぶん気持ちよい。テヘランなどでは、ほとんどの家がベランダに寝椅子をならべ、家族全員が、ずいぶん寝る。

きっと、アダム夫婦が楽園を出たときも、夏だったのであろう。雨も8か月以上ふらないから、野宿でまにあう、だから、家について心配しなかったのだろう。

しかし、ほんとうは家こそが、もっとも大切なものなのである。

その証拠に、アルファベットのABCの本来の意味をしらべると、A＝アレフ(子牛)、B＝ベイト(家)、C＝ギメル(らくだ)、D＝ダレット(戸)、E＝ヘーイ(両手を上げて追い払う姿)、F＝ヴァヴ(釘)、G＝ザイン(武器)である。家畜を飼って、家をたて、らくだも持って、戸をしめて、両手で敵を追い払い、釘をうちつけ、武器で守るという物語になるではないか。

勤勉に労働し、食事や衣服をひかえて、その倹約分で家畜(動産)と家(不動産)をりっぱにしていく。これが、文明をきずくための第一歩なのである。

(7) 預かった宝石は返すべきか。

(出典、ミッドラシュ・ミシュレイラバ 28)

人の死はつねに悲しい。わけても、愛する者をうしなつた家族の胸の内は、たとえよ
うのない空虚である。その心にぽっかり空いた穴をうめることは、まことにむずかしい。
うかつな慰めは、かえって逆効果になって、いっそう悲しみを増す。結局は、残された
遺族自身が、みずからの力で悲しみを克服するしか、ほんとうの解決はない。

そうは言うものの、身にしみて嬉しいのは、知人や友人たちの心あたたかい慰めで
ある。

ユダヤ人の社会では、人が亡くなると、一週間のあいだ、毎朝、毎夕、その遺族の
家を友人たちが訪れて、十人以上で追悼の祈りをささげる。食事の世話をはじめ、日
用の仕事もみんなで助けてくれる。せめて七日間は、遺族の心の整理がつくまで、と
っぷりと悲しみに浸ってもらおうという配慮である。

そういう気持もあるからだろうか、ユダヤ人の文献には、人の死の前後にかんする
記録が多い。数多くのエピソードのなかで、もっとも心をうつのは、ラビ・メーイルのけ
なげな妻のことばである。

* * :

ある安息日の午後、ラビ・メーイルが、シナゴークでいつものように聖書講義をして
いた。そのあいだに、かれの幼い二人のむすこが、家でとつぜん亡くなった。

妻は、むすこたちをベッドに寝かせ、それぞれの遺体のうえにシーツをかけた。彼女
は、聖なる安息日をけがさないために、悲しみをこらえ、平静をよそおっていた。暗く
なって、安息日もおわり、ラビ・メーイルが帰ってきた。

「むすこたちは、どこだい？」

「シナゴークに行きましたけど」

「そうかい。かれらをシナゴークでは見かけなかったけどね」

彼女は、それにかまわず、新しい週を迎えるためのワインを杯について、夫に祝禱
をと覚えてもらった。ラビ・メーイルはまたたずねた。

「それにしても、むすこたちはどこに行ったのだい？」

「どこかの家に行ったのでしょうか。じきに帰ってきますよ」

そういって、彼女は夕食のしたくをし、とりあえず夫とふたりで食事をすませた。夕食後、彼女は夫にたずねた。

「ねえ、質問があるんだけど、うかがっていい？」

「いいとも。どうぞ、たずねなさい」

「あのね、先日、ある人がきて預け物を置いていったのよ。そしたら、さっき来て、あれを返してと言ってきたの。ねえ、それは返すべきなの？」

「そりゃあ、預かり物は、もちろん返すべきだよ」

そこで、彼女は夫につげた。「もし、それがあなたのお考えに反することだったら、わたしは絶対に返さないわ」

そして、彼女は夫の腕をとって、二階の子供部屋につれていき、夫をベッドに近づかせ、静かにシーツをはいだ。ラビ・メーイルはむすこたちが死んでいるのを見た。そして、大声で泣きだした。

すると妻はいった。

「ねえ、あなたが、こんなに泣くのは、さっき言われたおことばに反するじゃありませんか。『預かった物はその預け主に返せ』って言われたばかりですよ。こどもたちは、神さまがわたしたちに預けたのではなかったのですか。聖書には『神あたえ、神とり去りたもう。神をほめたたえよ』と、教えてあるではありませんか」

* * *

この気丈夫な妻の名前は、ベルリヤーといった。タルムードのなかで珍しく名前が記録されている女性である。いちばん悲しかったのは、彼女自身であったはずだ。しかし、悲しみをこらえて、まず夫をはげまし、夫に心の整理の方法をしめそうとしたのであった。

(6) バアルシェムトブの死に方

死とは、わたしが一つの扉から出て行き、もう一つの扉の中に入ることだ。

～バアル・シェム・トブ～ (出典、『シブヘイ・バアル・シェム・トブ』)

17世紀の東欧のユダヤ人たちの生活は悲惨であった。

かれらは、たびたびロシアのコサック兵やフメルニツキーに襲撃されていた。その惨状は、ちょうど、1993年に、ボスニアのイスラム教徒住民がセルビアのキリスト教徒から包囲砲撃され、住宅をやかれ、村を追われる様子とよく似ていた。

18世紀になって、ようやく、そうした迫害の嵐がおさまったものの、ユダヤ人たちの生活は、以前にもまして貧しくなり、心のなかは、以前にもまして荒んでいた。そのとき、東欧のポドリヤのメズボズの村に、心やさしいひとりの教師が現れた。ラビ・イスラエル・ベンエリエゼル、通称、バアル・シェム・トブであった。

かれは、生活につかれきった人びとの心に、励ましのことばを語りかけた。

「友らよ、きみたちの魂のなかに神の火花が宿っている。いな、万物のなかにも神の火花が閉じ込められている。きみたちは、その火花を天にかえず聖なる任務をになっている。それには、まず、きみたちが心をもやすのだ」と。

かれは、しだいに大勢のユダヤ人を教化し、やがて東欧全体のユダヤ人の心に希望の火をもやすハシディズム運動へと発展していった。

かれは 1760 年の春、過ぎ越しの祭りのあとで健康を害した。それから7週間、それでも、どうやら五旬節(シャブオット)の祭り近くまで、なんとか体調を維持していた。

五旬節の前夜は、いつものように徹夜でトーラーの勉強会をし、かれは人びとのために講義をした。だが、朝になると、弟子たちをあつめ、臨終の準備を指示し、かれのために祈禱をささげてくれと命じた。そして、「あと二時間の余裕だ」といった。

しばらくして、かれは弟子たちにいった、「わたしはじぶんのことを心配しない。わたしは、じぶんがこの扉を出て、すぐに次の扉にはいることを、はっきりと知っているのだから」と。

さらにしばらく、弟子たちと語りあったあと、また祈禱文をとなえるよう命じて、じぶんの上にシーツをかけてくれと頼んだ。そして、いつもの礼拝のときと同じように、はげしく身体を揺り動かして祈りつつ、やがて静かに息をひきとった。

かれにとっては、死はほんとうに隣室にうつるような出来事だった。

(5) 人間と死

死は、富める者の恐怖、貧しい者の願望。

(『セフェル・ハシヤアシュイム』7)

一般的に、ユダヤ人の自殺率は低い。1865年のオーストリアの資料では、人口10万人あたりのプロテスタント・キリスト教徒の自殺率が100に対して、カトリック教徒74、ユダヤ人33であった。

第2次大戦中にアウシュビッツ収容所などで、死と隣あわせですごしたユダヤ人たちのなかでも、自殺した人はひじょうにわずかであったという。ほとんどの人は、ガス室で殺される最後のさいごまで、生きる可能性にのぞみをつないだ。

なぜかといえば、人にいのちを与えるのも、人からいのちを奪うのも、それは神が決定的ことである。神がゆるさなければ、人はじぶん勝手に死ぬわけにいかないと、ユダヤ教では考えるからである。死にたくてもじぶん勝手には死ねない。そこにユダヤ人の葛藤がある。

そして、この葛藤の原型は、旧約聖書の「ヨブ記」の主人公ヨブに見られる。ヨブは、事業の破産と、みずからの病気になやむ。「ヨブ記」には、かれが苦しみのあまり、めんめんと死を切望するようすが描写されている。

「墓に下れば、悪人も暴れることをやめ、疲れた者も休息を得る。捕虜もいっしょに安らいでいる。追い使う者の声を聞かない。奴隷も、その主人から解放される。なにゆえ、神は心の苦しむ者にいのちを与えているのか。このような人が死をのぞんでも、死はあたえられない」(ヨブ記3章)

反面、これはヨブが金持ちで順調だったときには、考えてもみないことであった。仕事が順調にいと、死にかんしてなど、考えてもみたくない。商売が儲かっているのに、事業なかばで、じぶんが先にいくなつて、まっぴらごめんだ。たぶん、そういう気持ちで、死ぬことを恐れたであろう。

早かれ遅かれ、いずれ死はわたしたちに訪れる。そのとき、どう死と対処するか。これは、いまから各自が考えておかなければならない課題である。

(4) 人間創造

天地創造のさいに、蚊は人よりもまえに創造された。

(タルムード・サンヘドリン篇 38)

人類は万物の霊長だという。だが、だからといって、人類が、世界をわがもの顔に支配してよいわけではない。ユダヤ教の伝説によれば、神が人間を創造しようと思ったとき、まず天使たちに相談した。天使たちはたずねた。

「人間って、どんなもので、どんなことをするのですか」神は人間がどんなものか説明した。人間はこれこれ、しかじかで、いろいろ良いこともするが、仲間を殺したり、生き物をいじめたり、自然をはかいしたりなど、悪いこともする。

3分の1の天使は反対した。しかし3分の2の天使が賛成したので、神は人間の創造にふみきった。ただし、人間が創造されたのは天地創造の最後の6日目であった。

その理由のひとつは、もし天地創造のさいしょに人間を創造していれば、あとになって、「わたしは天地創造のはじめから、神のパートナーで、この世界も半分はじぶんが作ったのだ」と、いばったりするかもしれない。

そこで神は天地創造の4日目に、空をとぶ鳥と、水のなかをおよぐ魚をつくった。6日目に、地上のあらゆる生き物を創造した。もし人間が、じぶんは万物の霊長だといって、威張るようなことがあれば、ほかの生物たちが、「そんなにいばるな。わたしたちのほうが人間よりもさきに創造されたのだぞ」と、人間を牽制できるようにした。

その証拠に、神は、人間を創造したさいに、かれに「すべての生き物を治めよ(レドゥー)」と命じている。「レドゥー」というヘブライ語のことばのもともとの意味は、「下れ」である。

人は、ほかの生物や自然にたいして、頭ごしに命令し、支配する権限はあたえられていない。人はつねに相手の立場まで下りて他者を治めなければならない。

(3) 両耳を通りにむけよ。 (イーディッシュ語集)

ユダヤ人のなぞなぞに、「なぜ耳は二つ、目は二つ、そして口は一つか」というのがある。

この答えを知人たちに求めると、たいていは、耳が二つないと音が立体的に聞こえないし、目が二つないと物の位置が正確に把握できないからである。口は声を出すだけだから一つあれば足りると説明する。

それは、もっともな答えであり、科学的にも正しいように思える。しかしなら、このなぞなぞが求めている答えは、もちろん、そういうものではない。

正解は、口でしゃべる前に、物事を耳で二倍よく聞き、目で二倍よく観察せよというために、耳と目が二つずつあるというのである。

これは、いい仕事をするうえで、ぜったいに必要なころえである。

一例を紹介しよう。米国に、ポール・コーポレーションという、産業用フィルター製造の会社がある。同社は、一九七四年から十年間で売上高が六倍、利益高が十五倍というめざましい成長をとげた。そこまで同社を発展させたのは、アブラハム・クラスノフ現会長である。

クラスノフ会長は経理畑の出身で、技術屋ではない。同社の経営が左前になったときに、会社再建のために社長として株主から送り込まれた。しかし、彼は経費削減を唱えるよりも、まず産業の動向をよく観察し、人々の話によく耳を傾けた。そして短期間のうちに、油圧オイル用と化学薬品用のフィルターしかつくっていなかった同社を、ハイテク用フィルターのトップ・メーカーに返信させたのである。

クラスノフ会長はいう。

「ビジネスで成功するためには、通りに耳をかたむけることです。つまり、人の話に耳をかたむけることです。お客や社員、社外の専門家など、あらゆる人の話をよく聞いているうちに、技術革新の動向や、市場のニーズがわかってきます。また、じっさいに、ユーザーの仕事やさまざまな製品を見て、どこで、どんな問題をかかえているかを観察して、お客の問題に答えられるようにすることです。それがビジネスに成功するための秘訣です」

多くの人は、ついつい、じぶんがしゃべることに夢中になって、他人から学んだり、物事を観察したりすることを忘れてしまっている。そのため、世間の動きが目にとまらず、せっかくのビジネス・チャンスを逸してしまうのである。

(2) 「値段が下がったら、買え」

(タルムード・ベラホット篇 63)

タルムードはユダヤ教の律法集である。その主な目的は、宗教上の規則や戒律についての研究であるが、それを出発点として、実生活のさまざまな事件や問題を解決していこうとする。

経済活動にたいするタルムードの関心の原点は、愛の精神と公平の実践とが出发点となっている。

だから、「値段が下がったら、買え」という一方で、市場の安定価格の維持ということに商人が配慮するように指導している。

たとえば、ラビ・アツバ・バルアツバの事例である。かれは、じぶんの畑でとれた農産物の初物を、真っ先にあえて安い値段で市場で売った。ふつうは、初物を高値で売るのが常識である。しかし、ラビ・アツバ・バルアツバが初物を安値で売れば、最盛期になって、おなじ作物を出荷する他の農夫は、それよりも高い値段をつけることはしない。これは、消費者の利益を考えた行為である。

ところが、そのむすこのサムエルは、初物が市場で高値をつけるのを待ってから、おもむろに自分の畑の初物を最安値で市場にならべた。(バババトラ篇 90)。

タルムードは、父アツバの行為は正しいが、むすこサムエルのとった行為は、市場を混乱させるといって非難している。たしかに消費者に安く提供することは大切だ。だが、いったん需要と供給のバランスが確定したものを、とつぜんの安値提供で混乱させると、すでに高値で買った消費者に不公平感をいだかせるし、他の売手にもパニックをきたすからである。

タルムードは、商人は、いったん商品にある値段をつけたら、たとえチャンスがあっても、それ以上に値上げしてはならないと命じている(キドゥシン篇 30)。

また一方では、消費者にたいして、買う意志がないのに、「これはいくらですか」と商人にたずねてはならないとも戒めている。売手は、つねに商品が売れることを望んで、精一杯の努力をしている。だから、かれにむなしい期待をもたせるようなことをお客は言うてはならないのである。

売手も、買手も、誠意をもって交渉する。これがビジネスの基本である。

(1) 「商人のまえでは、まず他の商品を欲しそうな顔をして見せよ」

(出典、ミッドラシュ・テヒリーム 12)

* * * * *

古代のギリシャやローマの市民は、経済活動や実業にはげむことを、いやしいものと蔑み、実務は奴隷にゆだねていた。とくにアリストテレスは商業を軽蔑した。

その影響もあって、ヨーロッパで、経済活動が日のあたる場所を得るようになったのは、産業改革以後のことである。

これと対照的に、ユダヤ人の社会では、実務をこなせることが、社会人としての尊敬の第一歩であった。たとえ学問にすぐれていても、実務知識は不可欠だった。

つぎの、ラビ・ヨナタンの物語は、そのへんの問題を考えさせる。

あるとき、かれはレンズ豆を買おうと思って、いなかの親戚にその値段を問い合わせた。すると、自分の町ではこれこれの値段で売っていると書き送ってきた。ずいぶん割安の値段だったので、すこし遠かったが、その町まで買い出しに行った。

町に着くと、あいにく親戚は留守だったので、ラビ・ヨナタンはひとりで市場に行った。いろいろの店をみてから、ある商店に入った。すると主人はいった。

「レンズ豆はいま品薄で値段が高いのです。小麦なら安いのですがね」

しかたなく、かれは言われるままに高い値段で豆を買った。あとで、親戚をもういちど訪ねて、その話をした。すると親戚は、ヨナタンに忠告した。

「あんたは商売の経験がないね。豆を欲しくても、まず他の商品を欲しそうな顔をして見せるものだよ。そうすれば商人は豆なら安くできるというのに」

これを値切りの秘訣と解釈するか、もっと応用範囲をひろげて、交渉の技術と解釈するかは、読者次第である。

ちなみに、ゾハルという別のユダヤ教の本では、交渉の仕方をつぎのように教えている。「人に資金援助を頼むときは、まず他の話題について話せ。あなたの要求を、とうとつに切りだしてはいけない」。

タルムードに、わざわざ、こういうエピソードが伝えられているというのは、商売や取引の秘訣も、学問を考えるうえでひじょうに参考になるからである。

イスラエルからの発想：SIGNBOARD

ユダヤ人の生活あれこれ

手島佑郎

[\[フロントページへ戻る\]](#)

アウム（オム）と阿吽、そしてアレフ

手島 佑郎

1月18日、オウム真理教が教団名を「アレフ」と変更したことで、オウムとアレフと関係があるかと、いくつかのマスコミから問い合わせがあった。テレビ朝日が東京から拙宅まで車を飛ばして来て、小生の意見をたずね、インタビューの模様をカメラに収めて、直ぐにあわただしく東京へ帰っていった。

その夜、10時のニュースステーションの冒頭でオウムの改名が取り上げられ、小生のスナップがいきなり番組の冒頭に出ていた。番組の中では、小生の発言のごく一部分だけしか電波に乗せられていなかった。

以下、小生がインタビューで語ったことを明らかにしておく。

オウムとアレフと関係があるか。結論から言えば、この二つの語に直接の関係はない。

もし関係があるとすれば、それぞれが象徴している内容である。そもそもオウムというのは、サンスクリット語で a.u.m という3つの聖なる音の集合体で、オム、オームとも発音する。

ヒンズー教では、「ア・ウ・ム」の3音で宇宙を構成している3つの要素(破壊、創造、維持)を三位一体で表現するものとして尊んでいる。そして、これが宇宙の根本原理(ブラフマン)を意味する神秘語オムとなった。

アウムが転じた仏教用語が、「阿吽(あうん)」である。仏教では、この2文字が万物のはじまりと究極とを象徴すると考える。ちなみに、仁王像や狛犬像の一方が口をひらいているのは、阿のシンボルで、口をとじているのは吽を表わしている。阿吽のなかでとりわけ重要なのは、「阿」である。阿は万有の太初、理念の本体と考えられている。始まりがあるから、究極もくるのである。

オウム真理教の信者は、自分たちが世界の根本原理であり、自分たちが世界の理念であり、自分たちが世界でもっとも優れた存在、阿吽の「阿」、つまりエースであると考えている。

そこで、サンスクリットの「ア」字に代る別の文字体系の第1文字として、アルファベットの元祖であるヘブライ語のA、「アレフ 焉 v を、いわば裏紋として、いままでも各種の下部組織の名称として使用してきた。

今回の教団名称改変で、裏紋「アレフ」を表紋「オウム」にすげ替えたというのが、改名の真相なのであろう。

但し、ヘブライ語の「アレフ」がたんなる「A」だけなのかといえ、そうではない。

通常、ヘブライ語辞書には、「アレフ: アルファベット第1文字 / 1 / 千(エレフ)」と記されている。ヘブライ語では母音を表記せず、子音だけで綴るから、読み方

を変えれば「1」が「1000」にもなる。だが、アルフォ・シェル・オーラムといえば、宇宙の第一人者、つまり神の代名詞となる。アレフは、第一のもの、無上のものをも意味する。ときには主人をも意味する。ユダヤ神秘主義では、天地の根元を表わす文字だと考えられている。

数学では、ふつう abc,....を使う。記号が足りなくなると $\alpha \beta \gamma$ とギリシャ文字を使う。それでも不足するとロシア文字を使う。(だから、コンピュータの辞書にはギリシャ文字もロシア文字も内蔵している)それでも不足するとヘブライ語の文字を使う。数学でアレフ数といえば、無限な数列集合をさす。

ヘブライ語のアレフは、1、第一のもの、無上のもの、無限、根元など、じつに多義な意味をもつ言葉なのである。

オウム真理教が、そこまで理解してアレフを採用するようになったとは、筆者には思えない。古いオウムのイメージを払拭するためにアレフと改名しただけである。それは日本をジャポネと呼び変えるのと同じ行為にすぎない。

ユダヤ教の自殺観

手島 佑郎

人は絶望に瀕すると、しばしば自殺を企てる。動物と人間との大きな差のひとつは、人間は自殺をし得るという点である。

動物の世界では、スタンピード現象といって集団自殺行為に走ることがある。例えば、バッファローが群れをなして断崖から谷底に駆け下りたり、イルカが集団で入江の浅瀬に乗り上げるという行為である。もっかのところ、これは群れのリーダーの判断ミスとか、群れ固有のもつ生態制御機能狂いであって、絶望が動機ではないと推察される。

その点で思い出されるのは、ヘレニズム期に、エジプトのアレキサンドリアで活躍したユダヤ人の哲学者フィロンのことば、「絶望するものは人に非ず」である。

このことばでフィロンが取り上げたかったのは、人間の尊厳である。ユダヤ教によれば、他の動物の生は、神の天地創造の行為の一環として、おのずと付与されたものである。だが、人間の生は神が特別に直接与えたのであって、そこに、人間が他の動物とちがって独自の尊厳を持っている所以がある。

したがって、神から与えられた生を否定するような行為は、例えば自殺は、神への反逆である。それゆえ、ユダヤ人は極力自殺を回避する。

19世紀北欧の統計では、プロテスタントの自殺率100に対して、ユダヤ人は社会的差別を受けていたにも拘らず、自殺率は28～33である。絶望せず、自殺をしない、これはユダヤ人の行動原理のひとつである。

さはありながら、ユダヤ人が全面的に肯定する自殺が一つだけある。それは殉教(キドウシュ・ハシエム)である。

キドウシュ・ハシエムは神への信仰の表明であると同時に、ユダヤ民族の歴史の証人となる行為である。そこには個人の死が犬死に終わらず、民族の建設と宗教の高揚に貢献できるとの確信が土台となっている。それは、個人の死を通して、生命を与えた神の存在と、生命を超える尊厳のあることを宣言する行為なのである。その点において、キドウシュ・ハシエムは、死の価値を逆転させるのである。

ユダヤ人と食後の祈り

手島 佑郎

汝は食らいて 飽腹し、汝の神エホバに 感謝すべし。

よき地をなんじに賜いしことのゆえに。 (申命記8章10節)

キリスト教徒は食前に感謝の祈りをささげる。カトリックではどのように祈るのか私は知らないが、プロテスタントでは各自が短いことばで感謝をのべ、祈りとする。

仏教の禅宗では、食前に「展鉢の偈」をとなえ、お釈迦様が使われたような食器で食事できることを感謝する。さらに、食事をするにふさわしい修行をしているか反省の「五観の偈」をとなえる。食後には「施餓鬼の偈」をとなえ、餓鬼・畜生を供養すると同時に、仏弟子として衆生済度をちかい感謝する。

ユダヤ教では、食前にも食後にも感謝の祈りをささげる。ユダヤ人が食後に祈りをささげる習慣は、冒頭に引用した聖書の掟(申命記8章10節)にさかのぼる。

食後の祈りはかなり長い。全文となえると、2～3分はかかる。さいしょは食事についての感謝ではじまる。

「バールッフ アター アドナーイ、 エロヘイヌー メレッフ・ハオラーム、

ほむべきかな なんじ主よ、我らの神 世界の王よ、豊かさと麗しさと愛と憐みとをもちて全世界を養いたまう御方よ。汝はすべてのひとにパンを与う。その愛は永遠なり。汝の大いなる豊かさによりて、つねに我らは欠くることなし。とことわに汝の大いなる御名のゆえに、我らに食物を欠くることなからしめたまえ。汝は凡てを養い支えたまう神なり。すべてを恵み、その創造せし森羅万象すべてに食物を備えたまう御方なり。ほむべきかな なんじ主よ、すべてを養いたまう御方よ」

みんなで晚餐をした後などは、食卓につらなる全員がこの祈りを祈る。というよりも、いっせいに合唱する。それは感謝のみならず、勇気と希望をわかすメロディーである。

ユダヤ教の食後の祈りは、食事への感謝だけでは終わらない。ユダヤ人は機会あるごとに民族の歴史を回想し、神のドラマを追懐する。食事の席でも、神が民族の歴史を救済してくれることを祈るのである。

「我らの神よ、汝の民イスラエルを、汝の都エルサレムを、汝の栄光の住処シオンを、汝のメシア・ダビデ家の王統を、汝の御名を呼びし聖なる宮を憐みたまえ」

歴史の救済と同等に重要なことは、自分たち自身の存続である。天はみずから助ける者を助くというが、個人の自助努力では何ともしがたい社会環境というものもある。これについては、神の見えざる助けを祈らざるを得ない。

「我らの神よ、我らの父よ、我らを牧し、養い、支え、あがない、我らを解き放ちたまえ。我らの神よ、我らをもろもろの患難よりすみやかに解き放ちたまえ」と。

ユダヤ教は貧しい人々への喜捨・慈善の大切さを教える。だが、個人としては他人の助けにすぎらず、どこまでも独立自尊であるべきだ。そこでユダヤ人は、

「願わくば、我らを物乞せしめることなかれ。ひとからの贈り物にも、貸付けにもすることなからしめたまえ。汝の満ちみつる手を乞わしめよ」

と祈る。

神の満ちあふれる手から恵みを乞うといっても、じっさいに神が物を提供するわけではない。どこまでも自分で自分の道を開かなければならない。

そのための第一歩は、他人に物乞いしたり、借金を申し込まないぞと自分で決心することだ。他人の慈悲にすがって生きようなどとする甘えを排除することだ。

借金はひとを奴隷におとしいれ、物乞いはひとを怠惰にする。食事のたびに、おのれの経済的物的独立を再確認、再決心する。万一、困窮することがあっても、どこかに道は見い出せる。

その確信が、ユダヤ人をして2000年余の流浪を乗り切らしめた。ひとが自滅するのは、この確信、どこかに道は見出せるという確信を失うときである。

どこかに道が見出せるということは、どこかに仕事の活路が開かれるという確信である。もっと単純に言えば、明日のパンは何とかなる。そのうちに生計のめども立つという確信である。

食後の祈禱はつづく。

「聖徒らよ、神をかしこめ。神を畏む者らには欠くることなし。若き獅子は乏しく飢えらるとも、神を求める者は全て良き物に欠くることなし。……幸いなるかな、神によりたのみ、神をそのよりどころとする者よ。義人が捨てられ、その子孫が食糧を物乞いし歩くを見しことなし。

アドナイ、オーズ レアモー イテン。アドナイ、イエバレツフ エツト アモー バシャローム。神よ、力をその民に与うべし。神よ、平安のうちにその民を祝福すべし」

この最後の一句でユダヤ教の食後の祈りは終わる。

人が生存できるのは腕力によってではない。神の恵みによってである。

弱肉強食の世界とはいえ、強者がつねに生き残るわけではない。あの栄華を誇ったバビロニアも、エジプトも、ローマも滅んで今はない。ひとりユダヤ民族だけ流浪を越えて生き残った。それはなぜか、神を杖とし、神を資産としたからではないか。

逆説的だが、人間的保証がなかったことが、彼らユダヤ人の存続を可能にした。

ユダヤ人の生き方は、行く先を知らずに出発した父祖アブラハムに象徴されている。行く先が分からずとも、まず出発し、出発しながら考える。さて、次をどうするか。

歩きながら考え、考えながら歩き、しだいに自分がやりたいことを実現していく。

米国ユダヤ人の心理学者アブラハム・マズローの「欲求の5段階」説によれば、ひとの欲求は・生存の欲求、・安全の欲求、・社会的帰属の欲求、・自我の欲求、・自己実現の欲求と段階を追って上昇していく。だが、これは、はじめに第5段階の欲求があるのではない。まず第1段階から充足していくものなのである。

いまの飽食の国ニッポンの若者は、就職にあたって、はじめから自分の理想や主張が実現できる企業を探そうとする。リストラの対象になった中高年者は、これまでと同等かそれに近い条件の職をさがそうとする。いずれも本末転倒がすぎる。まずはどん底の仕事から始めて、それでパンを稼いでみることだ。生存のためのパンを自力で獲得できる者が、自己の欲求なり理想なりへ向かって前進できるのである。

どん底から這い上がってパンを手にした者は、パンの有難さを感謝することを忘れない。その感謝が明日への勇気と仕事への情熱を湧かせる。食後の感謝をもっと大切にしたいものである。

ユダヤ教の祝祷

手島 佑郎

バルツフ(称うべきかな) アター(汝) アドナイ(わが主よ)、

エロヘイヌー(われらの神) メレツフ ハオーラム(全宇宙の王よ)、

ハモツィ レヘム(パンを取り出す者よ) ミン ハアーレツ(大地から)。

[パンをくちにする前のユダヤ教の祝祷]

ユダヤ思想を学んできて、わたくしに最も大きな収穫となったのは数々の祝祷である。生活のおりおりに、わたくしはユダヤ教の祝祷をとる。

ユダヤ教では、祈禱と賛美、祝祷を区別する。

祈禱(テフィラー)というのは、身をよじるほどに苦悶し、心をふりしぼっての嘆願である。西暦2世紀のこと、すでに国が滅んでしまっただけでなく、パレスチナに住むユダヤ人の生活は年々困窮の度を増していた。その頃、国民の信望を一身に担ってユダヤ人の地位回復のために奔走していたのが、ラビ・アキバである。かれは礼拝堂にはいると、長時間にわたって祈りつづけ、身をよじらせて人々のために執りなし祈っていた。堂内の端から端まで、のたうちまわっていた。

賛美(ハレル)は、神のわざや能力全般についての称賛である。旧約聖書の詩篇146編以下の賛美集などその好例である。儀式の最後に、しめくりとして神の全能ぶりを並べたて、いわば総括的に称賛する。ただし、賛美は神にむかって発言するものではなく、むしろ人々にむかって神の偉業を物語る行為である。

祝祷を、ヘブライ語ではブラッハー(碾・)という。祝祷というから、祝祭にさいしての祈禱、祝いの行事のなかでの人間から神への願い事だ、と思いがちである。ブラッハーは願いではなく、むしろ人間から神への感謝である。英語では blessing と訳す。さまざまの出来事に遭遇したさいに、それぞれの出来事の背後で祝福を用意していただく神への感謝である。

パンを食べる時は、神がパンを作り出してくださったことに感謝する。

「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、ハモーツイ レヘム、ミン ハアーレツ。 称うべきかな、汝 わが主 われらの神 世界の王よ、パンを地より取り出したもう御方よ」。

ワインをのむ時は、神がワインを作ってくださったことに感謝する。「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、ボーレー プリー ハガーフェン。 称うべきかな、汝 わが主 われらの神 世界の王よ、葡萄の実を創造なさる御方よ」と。

ユダヤ教の祝祷がもつ内面的世界へとわたくしの目を開いてくださったのは、恩師、ラビ・アブラハム・ヘシエル先生であった。ある時、先生はわたくしを自宅に招き入れ、

一杯のワインを進めてくださった。わたくしが「レハイム！ 乾杯！」といってワインを飲もうとすると、先生はにわかには厳しく咎められた。

「ブラッハーを唱えなさい。ブラッハーに込められたユダヤ人の心情とユダヤ教の信仰とを感じとらないで、どれだけ書物でユダヤ教を理解しても、それは表面的理解だ。イエスやペテロ、パウロといったキリスト教の創始者たちもブラッハーを唱えていたはずだ。かれらの心をくみとるためにも、ブラッハーを軽んじてはいけない。ブラッハーを唱えることに慣れなさい」

先生がわたくしを厳しくたしなめられたのは、後にも先にもこれだけであった。

わたくしは姿勢を正し、「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、ボーレー プリー ハガーフェン」とワインのブラッハーを唱えた。すると先生はにこやかに「アーメン」と唱和し、ついで「レハイム！ 君のために乾杯！」とねぎらってくださいました。



(ラビ・アブラハム・ジョシュア・ヘシェル教授)

ユダヤ教の祝祷は、日常の出来事への個別的感謝である。その背後に見えざる神の手が働いていることへの感謝の表明である。

かれらは山、川、野など自然の驚異にせっては、「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、オーセ マアセー ベレシート。称うべきかな、汝わが主 われらの神 世界の王よ、天地創造のわざをなさる御方よ」と神を称える。

美しい樹木や美人を見たときも、「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、シェカコー ロー ベオーラモー。称うべきかな、汝わが主 われらの神 世界の王よ、かくも美しいものを彼のために世界に備えし御方よ」という。そこには美の根源は神にあり、人や物にあるのではないとの認識がしめされている。

祝禱は吉報を耳にしたときにも唱える。「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、ハトーブ、ヴェハメィティーブ。称うべきかな、汝 わが主 われらの神 世界の王よ、善をおこない 最善になさる御方よ」

人間の努力が幸運をまねくとしても、幸運を仕上げるのは人間ではない。その背後に、幸運を用意して下さった神に感謝する。それがユダヤ人としての務めではないか。

そればかりか、凶報がとどいた時でさえもブラッハーを唱える。「バルッフ、アター、アドナイ、エロヘイヌー、メレッフ ハオーラム、ダッヤン ハエメット。称うべきかな、汝 わが主 われらの神 世界の王よ、真実をさばく裁判官よ」

何が真実であり、何が悪であるか。それは最終的に神の審判にゆだねるしかない。当面は不幸な出来事に見舞われるとしても、神が真実をさばく裁判官であるかぎり、いずれその損得勘定の帳尻を神が合わせてくださるであろう。悪い報告を聞いたからといって、中途半端に嘆いたり悲しんだりするよりも、神にその結末をゆだね、我々は日々の仕事に励もう。

こういって、ユダヤ人は人生の喜び、悲しみ、驚きのたびに、その背後に神の働きがあることを感じてきた。そして日々の生活の端々にまでも神の見えざる手が働いていることを認め、まず神に感謝してきた。愚痴るまえに、神への感謝。嘆くまえに、神への感謝を唱えてきた。それによって彼等は心を取り直し、元気を奮い起こしてきた。民族離散と不幸の連続の歴史をユダヤ人が乗り越えて来られたもうひとつの秘密は、日々のブラッハーだったのである。

「ユダヤ人とヒゲ」

現在ではヒゲをはやしていないユダヤ人のほうが一般的である。ヒゲをはやしているのは、ユダヤ教の伝統を重んじる一部の人々になってきている。

ちなみに、髭というのはクチヒゲであり、髯はホオヒゲ、鬚はアゴヒゲと漢字ではヒゲの区別をしている。ユダヤ人でヒゲをはやしているひとは、その全部をふくむヒゲである。

ヒゲを生やしているのはユダヤ人にかぎらない。アラブ・イスラム世界からインドにかけて、さまざまな民族がヒゲをはやしている。

今日ではアラブ人の多くがヒゲをはやしている。だが、ひとくちでアラブ人といっても、古代の中東ではエジプト人とメソポタミア人とでは別人種であった。

3000～4000年前のオリエントの彫刻や絵画をみるとわかるように、古代エジプト人はヒゲのないつるんとした顔で、人種的にはハム民族で属していた。こんにちその容貌をうかがい知ろうとおもうならば、民族的同系のエチオピア人の風貌を思いうかべるといい。

他方、メソポタミアのアッシリア人やバビロニア人は濃厚なヒゲ面のセム人種であった。古来、セム系の男たちはみんなヒゲをのばしている。

ユダヤ人はその祖先がもともとメソポタミア出身のセム人種である。そういうセム人種の男のたしなみとして、ユダヤ人の間でもヒゲをたくわえる習慣が形成された。

エジプト王 セティ 2 世	アッシリア王 チグラトピレセル 3 世	ユダヤ教会堂で 礼拝中のユダヤ人

じつは、ユダヤ人たちが戒律の原典とあおぐ聖書には、どこにも「ヒゲをのばせ」という命令はない。

ヒゲにかんする唯一の命令は「もみあげの毛を切るな」(旧約聖書レビ記 19 章 27 節、21 章 5 節)である。

なぜモミアゲを切ってはいけないと命じているのか。おそらく周囲の他民族と自分たちとを区別するためであったと推測される。

古代のユダヤ社会では、ヒゲを他人からそられることは最大の屈辱と侮辱であった。他方、親しいものの不幸に接して同情と哀悼の意をあらわすために、自分から頭をまるめ、ヒゲをそっていた。

中世になって、ユダヤ神秘主義(カバラー)がさかんになると、ヒゲには神から流出する神秘的なパワーがやどっていると考えられるようになり、それとともにヒゲをトリミングすることさえ控える風潮がでてきた。

カバラーでは、神の無限の力はまず英知(ホフマー)として頭に流入する。その頭からはえている毛髪とヒゲは神秘力がそのまま放射する器官であると信じられていたからである。

そのカバラーの神秘的な教えと実践を大衆化したユダヤ教運動のひとつがハシディズムとよばれる一派である。よく写真などでみかけるあのヒゲをはやして、黒い服に身をつつんでいる人々である。かれらのヒゲはまさに神秘主義信仰によるものなのである。

ハシディズムはポーランド、ウクライナを中心に東欧にひろがっていた。

第2次大戦でナチス・ドイツによって死の強制収容所に連行されたユダヤ人にはハシディズムの人々が多かった。だから、収容所でヒゲをそられ、頭もまるめられてしまうことは、屈辱とあわせて神への多大な冒流行為だと、かれらは受け止めた。

オーストリアのハプスブルグ家皇后マリア・テレサのように、ユダヤ人を一般のキリスト教徒市民と区別するために、ユダヤ人はヒゲをはやすべしと布告した例もある。

フランス革命以後、ヨーロッパ各国でユダヤ人にも市民権が認められ、一般のキリスト教徒市民のあいだにまじって商工業に従事できるようになると、ユダヤ人はまずヒゲをそりおとし、近代化の第一歩とした。現代のユダヤ人の国イスラエルでも、いまやヒゲをはやしているのは少数派となっている。

Jacob Y. Teshima, all the copy right reserved, 1998.

「ユダヤ人がみんな黒い服を着るわけではないが…」

ユダヤ人と聞いて、黒い帽子に黒い服を着て、髭を生やしている姿を思い浮かべる人が多い。すべてのユダヤ人があの服装をしているわけではない。

あの服装は、ユダヤ教の正統派のなかのハシディズム派に属する人々の男性の服装である。ふだんの平服でも一見してユダヤ人だとわかる独特の格好をしているのは、現代では、いまやハシディズム派の人々だけである。

同じ正統派でも正装した場合の服装は、ドイツ系ユダヤ人、英国系ユダヤ人、イラク系ユダヤ人、イエーメン系ユダヤ人等々出身地によってちがう。基本的には、それぞれの出身地の民族衣装である。日常の平服の場合は、ことさらにユダヤ人と非ユダヤ人との区別を識別できる服装はない。

ユダヤ人に共通の服装があるとすれば、シナゴーク(ユダヤ教会堂)内での礼拝時の姿だけである。その延長線上で、ユダヤ教の戒律遵守に熱心な男たちが頭にかぶっている丸く小さい頭蓋(キツパー)である。

シナゴークおよび神聖な場所では、男は帽子をかぶるか、キツパーをかぶるかして神への恭順の意を表わす。イスラム圏のユダヤ人はトルコ帽やターバンをかぶっている場合もある。ユダヤ教の施設に立ち入るさいは、外国人にも着帽が求められる。

礼拝に臨むとき、ユダヤ教徒の男はタリートとよぶ祈禱用ショールを服の上から肩にまとう。タリートの四隅には糸で編んだツイツイートという房が結んである。ツイツイートの着用はモーゼ以来のユダヤ教の掟である。戒律に熱心なハシディズム派の人はふだんでもシャツの下に貫頭衣スタイルでタリートを着用している。祈禱用のタリートは全身を包めるほど大きい布である。

シナゴークに入ると、まずタリートを羽織り、つぎにテフィリンという経札がはいった小箱を腕と額に皮ひもで縛りつける。箱のなかには、神の戒めを行住坐臥いずれのときも日夜忘れるなという文面の聖書のことば(出エジプト記13章1～10節、13章11～16節、申命記6章4～9節、11章13～21節)が書き記されている。最初に腕につけ、つぎに額につける。そしてタリートで改めて全身をつつみこむ。

シナゴークを出るときは、またふだんの服装にもどる。厳格な正統派の家庭の女性は、結婚すると断髪してしまう例が多い。長い髪をして他の男に言い寄られないためである。そのためか正統派のユダヤ人が住む町には女性用かつら屋が必ずある。未

婚の女性は夏は二の腕をだしてもいいが、既婚婦人はかならず袖のあるブラウスを着用している。

ハシディズム派の人々ハ黒いコート、黒い帽子、なかにはラッコの毛皮でつくった帽子(シュトライメル)をまとっている。あれは18世紀後半から19世紀前半にかけてハシディズムが東欧ではじまった当時の、東欧社会全般の流行のスタイルであった。それをハシディズムの指導者たちが競って取り入れ、ハシディズム運動の進取性の象徴としていた。だが、いつしかハシディズムが宗教運動として権威主義化し保守化するに及んで、今では時代遅れの過去の服装の代表となってしまった。

ちなみに、ユダヤ教のリベラル化を標榜するユダヤ教改革派は、一般に礼拝のときでさえ帽子をかぶらず、タリートやテフィリンを着用しない。かれらの生活習慣は多分にキリスト教を模倣しており、外見だけではユダヤ人だと判断できない面が多い。

背広やネクタイの着用をあまりしないイスラエルでは、祝祭日に男は白いシャツを着用し、祝意を表現している。

女性の服装について、伝統を固持するユダヤ教正統派の既婚女性は肩を露出しない。髪もばっさり切って、ほとんど丸坊主である。だから外出するときはスカーフで頭をつつむか、もしくはカツラを着用する。そのためか、世界でもっともカツラの生産技術の水準が高いのもユダヤ人のカツラ屋である。

未婚女性は半袖でもかまわないし、髪をのばしている。

『ユダヤ人と離婚』

西洋では6月は結婚式のシーズンである。さいきん日本でも6月に挙式するカップルが増えている。だが、すべての結婚が最後まで幸福にまっとうできるとはかぎらない。そこで、今日はユダヤにおける離婚手続きの一端をご紹介します。

離婚は、人生にとって悲劇である。タルムードは離婚について「若き日以来の伴侶を離別する者のために神の祭壇さえも涙をながす」と述べている。ユダヤ教は結婚を神聖な行為として推奨し、人が独身で一生を過ごすことを評価しない。

ではユダヤ教はカトリック教のように離婚を認めないのかというと、そうではない。

夫婦二人に一体となろうとする愛が冷めれば、結婚の絆が切れてしまうのも止むを得ない現実であると、ユダヤ教は離婚を肯定する。旧約聖書の律法篇の申命記には「人が妻をめとり、その夫となり、恥ずべき行状を彼女に見出し、彼女を気に入らなくなった時は、離縁状を書いて彼女の手にわたし、家を去らせよ」(24章1節)と、明確に離婚を規定している。

ただし、以上の見解だと、夫の一方的な好き嫌いによって妻が離縁されてしまいかねない。そこでドイツのラビ・ゲルショム・ベン・ユード(1028没、マインツ)の判例により「妻の同意なしに彼女を離縁してはならない」と現在になっている。

今日ユダヤ人の離婚は、ユダヤ法がユダヤ人の国法であるイスラエルを除けば、彼等が居住する国の法律による離婚とユダヤ法による離婚の二重の手続を必要とする。離婚を国法にしたがって手続しなれば、離婚した者たちの戸籍や納税、社会福祉等にかかわる処置として必要である。他方、ユダヤ法による離婚手続をしておかないと、宗教法上で再婚も独立も認められないからである。

ユダヤの離婚は「ゲット(離縁状)」の作成と受領によって完了する。ユダヤ法では、ゲットを夫からもらっておかないと妻は再婚できない規定になっている。たとえ民法上の離婚手続は終わっていても、ゲットがないと、妻の再婚は姦通とみなされ、新しい男との間に生まれてくる子供は私生児となる。

夫婦の間で離婚の意思がかたまると、ユダヤ人はユダヤ教法廷、 Beit-Dinへ離婚を申し出る。ここでは、ラビが裁判官役をする。

まず夫はラビの前に立ち、妻を離婚したいと申し出る。

すると、ラビは、離婚が本人の自由意思にもとづくものかどうか、他人に教唆されて離婚しようとしていないかどうか、以前に離婚を表明したことや、過去にも離縁状を書いたことがなかったかどうかを夫に尋ねる。今回の離婚意思が自分の純正な行為であることを夫が誓う。必要とあれば、同様に妻にも離婚の意思の確認をする。

つぎに、ラビのそばに待ち受けている書記にゲットを作成してくれるように頼む。ゲットの文言は12行にわたって記す。

ゲットができ上がると、夫は2人の証人に署名してもらう。それを持って、夫と書記と証人はラビに提出する。ラビは、書記にそれが依頼人の目の前で作成された本物のゲットであるかどうかを確かめる。証人にも署名に間違いがないかどうかを確かめる。

さらに再度、夫にむかって離縁状が彼の自由意思で作成されたものかどうか、他に別な離縁状が存在しないかどうかを確認する。

以上の確認が済んだあとで、ようやく今度は妻がラビの前に呼ばれ、彼女の自由意思でゲットを受け取るのかが確認される。さらに立会人のなかに離婚に反対する者がいないかどうか確認する。

妻は両手からいっさいの指輪や装飾品をはずし、両手のひらを上にむける。彼女の両手のうえに夫がゲットを落とし、「これぞ汝のゲットなり。これによりて汝は今よりのち離縁されたり。いずれの男の妻となるべし」と宣言する。

妻はゲットを取り、これを上にかざして数歩あるき、確かに離縁状を自分が受領したことをデモンストレートする。

そして妻はゲットをラビに差し出し、ラビはその四隅を切り落とし、ゲットを他人が改竄できなくしてしまう。それをベイト・ディンのファイルに収める。最後にラビは離婚が成立した夫婦にペトウール(離婚証明書)を発行する。これで離婚手続きが一切終了する。

「ユダヤ人はなぜ割礼をするのか」

民族の長い離散と流浪の歴史にもかかわらず、ユダヤ人は周囲の異民族と同化せず、自分たちのアイデンティティを失わなかった。その最大の理由は、彼等が割礼を守ってきたことにある。

割礼は、ペニスの先端の包皮の切除である。医学的にはたんなる包茎手術と何ら変わらない。割礼の風習はユダヤ人に限ったことではない。イスラム教徒も割礼をする。そもそも割礼は先史時代から人類のいろいろな部族に伝わっている。それも、呪術宗教上の理由というよりも、もともとは衛生上の理由から始まったと考えられる。

とくに注目すべきことは、古代エジプト人も割礼をしていた点である。アテネのギリシャ国立博物館に、ギリシャ人とエジプト人との戦闘の図が描かれている壺が所蔵されている。それには、エジプト人の割礼したペニスをことさらに誇張して、ギリシャ人の慎ましやかな包茎のそれと対比している。ユダヤ人の祖先は割礼の習慣をエジプト人から学んだのではないかと推測される。

ユダヤ人にとって割礼が意味することは、第1に「神との契約のしるし」である。その起源は、ユダヤ人の父祖アブラハムにまで遡る。神がアブラハムとその子々孫々を祝福するという約束と、それに対してユダヤ人が神への信仰を守る誓いのしるしとして、割礼をするようになった(創世記17章1～14節)。

第2に、割礼によってユダヤ人はユダヤ教社会のメンバーであるとの承認を受ける。しかも、ユダヤ人が割礼をするのは、聖書の掟で「男児の誕生8日目」と定められている。

ユダヤ人の暦では、1日は前日の夕方から始まる。したがって、男児の誕生が月曜日の昼間であるならば、翌週の月曜日に割礼式(ブリート・ミラー)を執行する。もし月曜日の夜に生まれると、これは事実上火曜日の一部であるから、割礼は翌週の火曜日となる。

割礼の儀式は、赤児が健康であるかぎり、かならず生後8日目に執行する。仕事をしないシャバット(安息日)であっても、丸一日断食をするヨム・キプール(大贖罪日)であっても、割礼式は実行されなければならない。

割礼の前夜は、父親らは徹夜して聖典の勉強をする。家の中にランプを灯し、悪魔が赤児をおそわないようにする。たいてい割礼式は昼前に行われる。式場には預言者エリヤの椅子が用意され、赤児はいったんその椅子に置かれ、エリヤの徳にあずかることを願う。つぎに名付け親が赤児を抱き、モヘル(割礼師)が祝祷をとなえて、赤児の包皮を切り取る。

かくして、ユダヤ人の男の赤ん坊は、生まれて1週間後には早くもユダヤ人社会の成員となり、将来ユダヤ社会の責任を負うことを期待され、またそのように運命付けられるわけである。

同じアブラハムを父祖と仰ぐイスラム教徒も割礼する。だが、彼等の割礼の時期は4～5歳から12歳前後までなど地域によって一定していない。他方、キリスト教徒は割礼をしない。しかし、ユダヤ人は早々に割礼してしまう点で、周囲の他民族と幼児のころから自分たちを区別してきた。これによって、よきにつけあしきにつけ、自分たちのアイデンティティを維持できてきたのである。

アラブ社会では女性に対しても割礼を行い、陰核の一部を切り取る風習がいまもある。ユダヤ人の中では女子は割礼しない。それは、聖書の創世記17章10節に「汝らの子孫のすべての男は割礼をすべし」と明記してあり、女子を対象とするとは記していないからである。

余談になるが、ユダヤ人社会でも最近では男女平等を主張する風潮が高まっており、男子の割礼式に相当する儀式が女子にも必要ではないかという意見が一部のユダヤ人のあいだに出はじめている。しかし、この意見がユダヤ人社会で広く受け入れられるかどうかは疑問である。

「ユダヤ人の子女教育」

ユダヤ人の子女教育は3000年の伝統がある。それを端的に示しているのが、聖書の「汝らの子らに繰り返し教えよ」(申命記6章7節)との命令である。

一般にユダヤ教を「律法」の宗教というが、それは神の教えを学ぼうとする宗教の意味であって、戒律に縛られることを目的とする宗教ではない。学問することこそユダヤ教の醍醐味だといっても過言でない。

ちなみに、学問を意味する「ミシュナ」ということばの原義は、「反復」である。しつこく繰り返すうちには、いつしか了解し合点する。タルムードの賢哲ヒレルのことばではないが、「100回反復しても101回反復することには及ばない」のである。

タルムードは「父親は息子に律法を教え、仕事を教え、それに水泳も教えよ」と命じている。この場合、律法とは、モーゼの十戒とそれに付随する聖書、ならびに判例や解釈の仕方についての学問全般をさしている。しかし、学問だけができて、社会生活への適応力を欠くようではいけない。だから実務を身に付けさせることも父親の義務だとしている。水泳で象徴していることは危機管理である。万一の場合、適切な対応や処置がとれるように訓練しておくこと、これも父親の義務だとユダヤ人は考える。

といっても、学問と実務と危機管理の三つを同時に教えることができる親はそう滅多にいない。そこでユダヤ社会で古くから発達してきたのが、学校や家庭教師である。父親は子供を学校に通わせ、できれば、さらに家庭教師をつけてタルムードを学ばせてきた。

この伝統は今日でも生きている。例えば、アインシュタインの父はロシアからドイツに留学していた医学生タルマイを毎週食事に招いて、ひきかえに自然科学の面白さを息子に教えてくれるように頼んでいた。私の知人の大学教授は、自分の専門がタルムード学であるにもかかわらず、自分で息子にタルムードを教えることはしない。わざ

わが子を家庭教師として雇って、かれに息子を教えさせていた。考えてみると、父親から直接教わるよりも、第三者から教わるほうが抵抗なく受け入れることができる。そういう配慮もあるのだ。

ユダヤ人は子供が3～4歳になると、アルファベットを覚えさせ、5歳でヘデルという寺子屋に通わしていた。今日ではそれが保育園、幼稚園、小学校に置き換わっている。ユダヤ教の戒律や伝統にそれほど熱心でない家庭でも、米国のユダヤ人家庭では、たいてい子供が小学4年位になると、午後のユダヤ教補習学校に通わせてヘブライ語を覚えさせる。バル・ミツヴァの準備ためにも、ある程度のヘブライ語の知識は不可欠だからである。

宗教的伝統を厳格に守る家庭では、男の子が15歳になるとイシーバーとよばれるタルムード学校に通わす。だがこちらは、あくまでも学問に才能がある子のためであって、全員必須ではない。普通の家庭では、高校以後は、各自の才能と興味が赴くままに能力を伸ばすことに重点がおかれる。

別の観点からみると、ユダヤ人は学校と家庭とシナゴークという3つの場所でユダヤ人としての教育を身につけるともいえる。学校では歴史や意義について学び、家ではユダヤ人の伝統の行事や作法をおぼえ、礼拝では共同体の団結と歴史の重みを感じ取る。

教育の責任はもちろん父親だけが担うものではない。ユダヤの家庭では母親の存在も大きい。毎週の安息日をはじめ、すべての家庭行事の準備は母親が担当するからである。母親の後ろ姿をみて、ユダヤの子供たちは伝統を覚えていく。

ユダヤ人の1年は、毎週々々、聖書の学ぶ箇所がちがっても、毎年々々それを繰り返す。行事と学習することも繰り返される。しかも毎日々々、早朝の祈り、パンの祈り、ワインの祈り、食後の祈り、午後の祈り、深夜の祈り…と、様々の祈禱文が繰り返して朗読される。伝統が身につくわけである。

もっとも、ユダヤ人の国イスラエルでは、伝統をまもって子供たちにユダヤ教的な伝統教育をほどこす家庭は、全体の3割程度しかない。その点では、海外のユダヤ人家庭のほうが、イスラエルのユダヤ人家庭よりもユダヤの伝統を教えることに熱心だといえる。

「過ぎ越しのまつり（ペサツハ）」

ユダヤ人の最大の祝節は「ペサツハ(過ぎ越し節)」の祭りである。ユダヤ暦ニサン月15日から1週間おこなわれる。ユダヤ暦は前日の夜から当日の夕方までを1日と数えるので、じっさいはニサン月14日の夜から22日の夕方までとなる。今年1998年のペサツハは太陽暦4月10日夜から17日迄である。

ペサツハには、2つの祭りの面がある。ひとつは、「ハッグ・ハアビヴ(春のまつり)」ともいわれるように、麦の収穫や冬の間に生まれた子羊など家畜の繁殖を感謝する農業のまつりであった。

他方「ハッグ・ハマツォット(イーストなしのパンのまつり)」ともいわれ、この祭りの前日から祭りが終わるまでの8日間「マツア」とよばれる小麦だけの大きいクラッカーを、パンのかわりに毎食くちにする。これにはイースト(麴)も塩もはっていない。前1280年頃エジプトの奴隷だったユダヤ人の祖先60万が、カナンをめざして脱出したさいに、イーストを入れてパンを発酵させて焼くだけの余裕がなかったという故事にちなんでいる。

そこで、ペサツハの意義は、もっぱらユダヤ人の自由解放とユダヤ民族誕生記念のまつりという面が強調される。

ペサツハの準備は、前日に家中を探索して、イーストが入った食品が残っていないかどうか調べることから始める。イーストが入っている食品はすべて燃やしてしまう。一片でもイースト入りの食物が家の中にあってはといけない。イーストに触れたことのある食器や台所用品は完璧に清めないかぎり使用できない。そこで、簡略な方法として、ストーブや冷蔵庫、流し台などはすべてアルミフویلで覆ってしまう。そして、すべての食品がペサツハ適合食品でないといけない。ワインも「Good for Passover」と認定されたものでないと飲めない。

まつりの最初の晚餐はセイデル(順序)とよばれ、エジプト脱出にまつわる伝説や教訓を一冊にまとめた「ハガダー」という聖典にしるされた儀式の順序にしたがって、ハガダーを家族全員で朗読しながら晚餐をすすめる。

ハガダーには次のような記述がある。

「我らはエジプトにてファラオの奴隷なりき。されど、我らの神アドナイは強き手を差し伸べ我らを救えり。…いつの代にも、人はエジプトから脱出してたばかりの者のごとく

己を見るべし。我らを奴隷から自由へ解き放ち、悲哀から歓喜へ、暗黒から大いなる光へと導き出せし神に感謝すべし」

晩餐では、祖先のくるしみを忘れないために、マツアのほかに、まず苦い野菜、塩水、西洋わさび、日干し煉瓦をねった泥に模したナッツの練物(ハロセット)などを食べる。その後で、ローストチキンやビーフなどのご馳走がでる。

晩餐の順序を簡単に紹介しよう。・ワインを杯について神に感謝する。・手を洗う。・野菜を塩水に浸して食べる。・主人の前に覆ってある3枚のマツアの真ん中の一枚を割り、半分を隠す。隠した半分をアフニコメンという。・エジプト脱出の物語を話す。2杯目のワインを飲む。・食前の手を洗い、手洗いの祈禱をとなえる。・マツアの覆いを外し、感謝祈禱をささげてこれを食べる。・西洋わさびを食べる。ハロセットに混ぜて辛味を和らげてもいい。・3枚目のマツアを取って、これにわさびを挟んで食べる。賢人ヒレルが考案したのでヒレル・サンドイッチともいう。・食事に移る。・子供にアフニコメンを探させ、ご褒美をあげる。残りのアフニコメンを皆でデザート代わりに食べる。・食後の感謝祈禱を全員でとなえ、3杯目のワインを飲む。・賛美の歌ハレルをうたい、4杯目のワインを飲む。特別に用意しておいた預言者エリヤのための杯にワインをそそぎ、家の扉をあけ、エリヤを招き入れる仕草をする。・「来年はエルサレムで」と誓いあう。以上ですべてのセイデルの儀式が終了する。

簡略化しないで全部のハガダーを読むと、終了が夜半になることが多い。

イスラエル以外の国ではセイデルを2晩続けて行うことになっている。それは、暦の管理が発達していなかった古代には、暦の管理がうまくいかないために外国にいるとセイデルを祝い損ねる可能性があったからである。だから日本や米国のユダヤ人は、今年は4月10日の夜と11日の夜の2晩つづけてセイデルの食事をする。

ユダヤ人の食事「コーシャ」

ユダヤ人は食事に関するユダヤ教の掟「カシュルート(食餌規定)」に即した食物でないとくちにしない場合が多い。戒律にうるさくないユダヤ人については、我々日本人同様に遇しても差し支えない。それでも、エビ、カニ、ブタ等を食べない者が少なくない。

カシュルートに適合した食品はコーシャ(適正食品)とよばれる。食べてよい食物は次のとおりである。

●野菜類、果物類はすべて食べてよい。

●肉類は、牛、山羊、羊、鹿は食べてよい。豚、馬、らくだ、兎、犬、猫、猿、狼、熊、ライオン、豹などもろもろの獣の肉は食べてはいけない。

●鳥肉では、にわとり、あひる、がちょう、七面鳥、鳩は食べてよい。それ以外の野鳥は食べてはいけない。

●爬虫類、両生類、昆虫も食べてはいけない。ただし、イナゴはいい。

●魚類では、ウロコとヒレがある魚は食べてよい。イワシ、アジ、サバ、カツオ、コイ、フナ、マス、アユ、マグロ、カツオ、タラ、タイ、ヒラメ、カレイ、ハマチ、ブリ、ボラなど問題ない。

しかしウナギ、ナマズ、アナゴ、タチウオなど、ウロコがはっきりしない魚は食べてはいけない。クジラ、サメも食べてはいけない。

●貝類、エビ、カニ、タコ、イカ、カタツムリはいっさい食べてはいけない。

以上の食肉規定は、聖書の「レビ記」11章に詳しく記されている。食べてよい家畜、鳥、魚は「清い生き物」とされ、食べてはいけない生き物は「汚れた生き物」とされている。西暦70年にエルサレムの神殿がローマ軍によって滅ぼされる迄は、清い生き物を神への生贄として神殿で捧げていた。汚れた生き物は生贄に捧げてはならなかった。

なぜ、こういう厳格な掟が生じたのかといえば、周囲の異教徒からユダヤ人が自分たちを区別するためであった。レビ記20章26節の神託には「お前たちをわたしの民にするために諸国民から区別するため」に、生贄の動物に清浄と汚れの区別を設けたと言っている。

つまり、食べてはいけない食物は、ユダヤ教誕生時の古代オリエント社会において、周囲のエジプト人、カナン人、ペリシテ人らの好物とする食物であったと推定される。異教徒と食物を共にしないことによって、周囲の異民族の祭礼でも食卓を共にせず、ユダヤ人はユダヤ教徒としてのアイデンティティを保ったのである。

食事に関するカシュルートの規定は、これだけに終わらない。肉類に関しては鳥肉もふくめて調理法にも細かい宗教上の規定がある。

肉は、まずシヨヘット(屠殺人)がユダヤ教の戒律にのっとり家畜を一撃で安楽死させ、なおかつ完全に血抜きをしたものでなければ食べてはいけない。血には生命が宿っており、血がついたまま食べることは、その生き物を創造した神への冒瀆だと聖書で教えているからである(創世記9章3～4節など)。

ということは、牛肉や羊肉であればどれでもいいということではない。ユダヤ人にとっては、コーシャの肉屋から購入してきた肉でなければ、調理さえ許されない。

肉を買ってくると、1時間半ほど真水につけ、そのあと塩で血をさらに抜く。もしくはオーブンで焼上げて血を完全に取り除く。とくに肝臓は塩で血抜きをした後、さらに焼上げ、血液分を完全に滴らせてから調理する。

だから、ユダヤ料理で肉はシチュー状で提供されることが多い。焼肉にもつばら鳥肉が使われるのは、血が少ないからである。

これらの規定に加えて、乳製品と肉料理とは同時にテーブルに出さない。

それは「子山羊をその母の乳で煮てはならない」という聖書の掟(出エジプト記23章19節など)による。ミルクは生命を与えるシンボルであり、肉は死体の一部であるから、生と死を一緒にしないという思想がその背後にある。

したがって、肉料理のコースの後で、コーヒーが出てミルクやアイスクリームは出ない。当然のことながら、戒律にうるさいユダヤ人はチーズ・バーガーなど乳製品と肉とがパックになっている食物は絶対に口にしない。牛肉と豚肉をミックスした合い挽肉は、もってのほかである。ユダヤ人街にも中華料理店はあるが、そこでは豚・エビ・カニなどを用いない料理が工夫されている。

こういう厳格に乳製品と肉とを一緒に出さない習慣から、ユダヤ人の間ではイミテーション・クリーム、イミテーション・アイスクリームなどの開発が進んできた。

ふつう、朝食では野菜、ミルク、チーズ、卵が出る。昼は魚や肉料理が出る。肉を食べたら、少なくとも3時間以上経過しないと乳製品をとらない。

さらに毎年春先に到来する過ぎ越しの祭りのさいには、イーストが入っている食品をいっさい食べない。そこで、厳格なユダヤ教徒の家庭では、食事につかう食器や台所さえも、乳製品用、肉用、過ぎ越し祭り用と3セット用意している。

米国やイスラエルからの輸入ワインや保存食品でラベルの隅に丸印の中にKやUの文字が印刷されている食品は、コーシャである。過ぎ越しの祭り用の食品には「Good for Passover」と明記されている。

ユダヤ人とシャバット

ユダヤ人の国イスラエルを訪れた日本人が最初にめんくらうのは「安息日、シャバット」である。シャバットは毎週土曜日、いや正確には、金曜日の日没から翌土曜日の日没明けまでの1夜1昼つづく休息の時間である。

安息日には労働しない。すべての店が閉まり、人々は生活の労苦をわすれて、神聖な気持ちでこの時間を過ごす。ニッポンのお正月の3が日もそうだ。労働をわすれて、いっさいの労苦から解放される。それが伝統的なニッポンのお正月であった。(もっとも、最近では日本でも正月営業がだんだん当り前になってきている)。お正月がすぎると、すべてが新しいスタートをはじめ。ユダヤ人は、シャバットが終わると、またドツと労働と生産への新スタートを再開する。いわばユダヤ人は毎週お正月を迎えるような生活をずっと続けてきたのである。

ユダヤ人にしてみれば、この安息日の習慣は3000年以上の伝統である。それは、彼等がモーゼの指揮下にエジプトを集団脱出し、ユダヤ民族として誕生した紀元前1280年頃からの伝統である。モーゼの十戒には安息日には仕事をするなど厳命している。これは、我々が現在採用している日曜休日制度より1500年以上も歴史が古い。ユダヤ人のシャバットは、徹底した休日である。金曜日の夕方から翌土曜日の夜まで、一切の労働が禁止される。

そのもう一つの理由は、天地創造の神話にまでさかのぼる。聖書の創世記1章の物語によれば、天地創造の七日目に神が労働をやめて休息した記念として、神の民であるユダヤ人もいっさいの労働を休むようにと厳重に命じられている。

安息日には交通機関は動かない。商店はすべて閉まっている。家で庭の手入れをしたり、造作修理するのもいけない。火を点火してもいけない。だから煙草を吸ってもいけないし、料理も作ってもいけない。家族の食事は、金曜日の夕方の日没以前までにすべて調理しておく。ガスやオーブンは種火を残しておき、それを大きくして料理を温めなおすのは差し支えない。点火してはいけないことの延長で、電灯のスイッチの切り替えもいけない。電灯の明暗を調節することは差し支えない。

ホテルのエレベータは、たいてい2フロアごとに自動的に止まるようにスイッチを切り替える。食事は予約客だけに用意し、代金の授受はしない。

金曜の夕闇が立ちこめる前に、主婦はいつさいの食事の準備を終えておく。主人や息子たちは近くのシナゴークでシャバットを迎える礼拝を済ませる。主婦は晚餐の準備が整うと、ロウソクを2本ともし、安息日の到来を家で宣言する。ユダヤの暦は夜にはじまり翌日の日没でおわる。

金曜日の夜、つまりシャバットの夜は家族でゆっくり食事をたのしみ、ときには親しい知人や友人を晚餐に招待する。シャバットは休日とはいえ、神への尊敬と感謝をこめて、洗濯したてのさっぱりした衣服を着ることが礼儀である。

土曜日の朝はゆっくり朝寝して、9時半か10時近くになって近くのシナゴークへ礼拝に行く。祈禱用ショール以外に荷物はいつさい持たない。雨がふっても傘をさしてはいけない。

礼拝から帰ると、食事をして、軽く昼寝をした後で聖典の勉強をする。かのロスチャイルド財閥の創始者、マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドは、安息日の午後、フランクフルトのラビと一緒にタルムードや聖典の研究をすることを最大の楽しみとしていた。

土曜日の夕方、日没2時間ほど前にシナゴークでは午後の祈禱「ミヌハー」が捧げられはじめる。日没が近くなると礼拝はそのまま夕の祈禱「マアリーブ」につづく。太陽が没し、あたりがすっかり暗くなると、1本の台に2本の芯をおりこんだ特別のロウソクに点火し、聖なる安息日と別れ、労働の1週間を迎えるけじめの儀式「ハブダラー（分離）」を行う。シナゴークでも家庭でも、一切の灯りを消して、ハブダラーのロウソクだけが煌々と創造の光が闇のなかに浮かびあがる。そして新しい週の到来を祝うワインをのみ、飲み干すと同時に、ロウソクを消して、家中の灯りをつける。光の再来のなかに新しい生産と建設の週がはじまる。そしてメシア待望の祈りをこめて、メシアの到来に先駆けて世界に戻ってくると信じられている「エリヤの歌」を歌う。

この後、人々は待ちかねていたかのように、どっと町に繰り出す。そのエネルギーが、翌朝の日曜日からはじまる労働と生産の原動力へと再度つながっていく。

ただし、ユダヤ人の国イスラエルでも、アラブ人町として発展したハイファ、リベラルなシオニストの町として発展したテルアビブなどは、シャバットの掟を否定して宗教的規制を拒否している部分もある。

ちなみに現在、世界の多くの地域で採用されている日曜日休日制度は、西暦321年にキリスト教のローマで採用されて以来のことである。ユダヤ教とキリスト教の伝統から枝わかれしたイスラム教の世界では、土曜日、日曜日ではなく、金曜日が休日である。したがって、3大宗教の聖地・エルサレムでは、金曜日にイスラム地区が商店を閉め、土曜日にユダヤ人地区の営業が停止し、日曜日にキリスト教の店が扉をとざしている。

ユダヤの秋まつり

ユダヤ人は1997年10月2日にユダヤ暦5758年の新年を迎えた。

5758年というのは、アダムの誕生から数えての年月であるという。ユダヤ暦は独自の陰暦なので、今年の新年は10月2日だが、去年は9月14日であった。

参考までにユダヤの秋のまつりをここに紹介しよう。

●「ローシュ・ハシャナー(新年)」、ユダヤ暦ティシュレイ月1日(今年は10月2日)で、ユダヤ暦の新年が始まる。太陽暦の9月～10月頃の新月の日である。角笛を吹いて、新年の到来を告げる。ユダヤの新年は喜ばしい雰囲気ではなく、むしろ重苦しい雰囲気で始まる。10日後のヨム・キプールに、過去1年間に犯した罪の審判が神から下されることになっているからである。新年からヨム・キプールまでの10日間をヤミム・ノライーム(恐怖の日々)ともいう。元日の午後や2日の午後は川や海辺に出てタシュリツフという罪を払う儀式をする。

●「ヨム・キプール(大贖罪日)」、ティシュレイ月10日(今年は10月11日)。その前日、生きた雌鶏を頭の上にふりかざして罪を払う。古代のスケープ・ゴートの名残である。そして償いのために、ないがしかのお金をツェダカー(喜捨)に投じる。

ツェダカーは貧しい人々の救済につかわれる。ユダヤ社会ではシャバットでもペサッハでも、結婚式、葬式でも、行事のたびにないがしかのツェダカーをすることが常識である。家々にもツェダカ・ボックスがある。いろいろな集会にはツェダカーを求めて、寄付集め人が入れ替わり立ち替わり現われる。

ヨム・キプールには前日の夕方から完全に24時間以上断食し、神のまえに罪の許しを乞う。この日ばかりは、日頃不信心なユダヤ人でも、神妙にシナゴーク礼拝に出頭する。

ヨム・キプールの午後、男はミクヴェ(沐浴場)へ行き、身を清め、白いガウンに身をつつんで夕方の礼拝に臨む。

日没前に歌われる「コール・ニドレ」の懺悔の祈りをもって、沈痛な雰囲気の日であったヨム・キプールが終わる。

ヨム・キプールが終わると「ゲマル・ハティマー・トヴァー(神から良き署名を生命の書にもらえますように)」と挨拶し合う。その後、大宴会をして無事にヨム・キプールが終了したことを祝う。

●「スーコット(仮庵節)」、ティシュレイ月15～22日(今年は10月15日～21日)。秋の収穫を祝う一方で、シナイの砂漠を流浪した祖先をしのんで仮小屋ですごす。天井が透けて星空が見える小屋でなければいけない。小屋の中は果物や農産物でかざり、そこで少なくとも3度の食事をとる。祭りの初日には、神の祝福のシンボルとして棕櫚の新芽と、柳とミルトスの小枝を束にして振りかざし、それにシトロンの実をかかえて礼拝に臨む。スーコットの8日目に雨乞いの祈りをする。

●「スィムハット・トーラー(トーラーの喜び)」、スーコットの翌日(今年は10月23日)。1年間かけて毎週読んできたトーラー(旧約聖書の冒頭のモーゼ五書)の読了記念の祝い。トーラーの巻き物を抱えて皆で踊る。次の安息日から、また聖書の冒頭の創世記に戻って、毎週定められたトーラーの箇所を読み始める。

ユダヤ人の光のまつり「ハヌカ」

ユダヤ人の冬のまつり、ハヌカは光りのまつりである。このまつりは8日間もつづき、その間ずっと8枝のランプをともす。つまり8本の枝がある燭台である。枝ごとにランプ油をいれた壺の燭台もあれば、ろうそくを8本ともす燭台もある。ただし、種火用の枝がもう1本あるから、じっさいは合計9本である。

この8本のランプをともす役は、もっぱら幼い子供らの役目である。点火役とはいえ、この時ばかりは、幼児が公然と火遊びができるわけである。正式には最初8本のろう

そくに火をつけて、毎晩1本ずつ減らしていくのだそうだが、たいていの家庭では8本全部つけている。

このまつりの起源は、西暦前165年に、ユダヤ人の英雄ユーダ・マカビーがギリシャ帝国の圧政をしりぞけて、ユダヤ人の独立を獲得した戦勝記念にまでさかのぼる。

当時ユダヤを直接支配していたのは、ギリシャ帝国の一部であったシリアのセレウコス王朝で、かれらはユダヤ人に豚を食え、裸でスポーツ競技をしろ、割礼禁止など、ユダヤ教の戒律に反する行為を強要していた。エルサレムの神殿には、ギリシャの神々の偶像さえ祭られていた。その屈辱に耐えかねて、ユダヤ教の祭司の家系出身であったユーダ・マカビーが、ギリシャ軍への反乱をくわだて、みごとに敵を駆逐してしまった。

凱旋したマカビーはエルサレム神殿を清め、再度ユダヤの神に神殿を献げ直した。だから、この祭りを「宮清めのまつり」ともいう。ハヌカというのは、ヘブライ語で「奉納」の意味である。

伝説によれば、そのさい神殿のランプに1日分だけの油をそそいだのに、8日間もランプが灯り続けるという奇蹟が起きた。この故事にちなんで、ハヌカの期間中は、8つのランプを灯すようになった。暗闇に8本ものろうそくがゆらめく贅沢な光りのまつりである。

この祭りの間、子供たちは4面のこまを回して、こまのどの面が出るか賭けて遊んだり、お祝いに、ポテトをつぶして団子状にして油で揚げたお菓子、ラトケスをたべる。

今年(1997年)のハヌカは12月23日夜から31日の夕方までである。ユダヤ暦では毎年キスレヴ月25日からテヴェット月2日までとなっている。

ところで、この「キスレヴ月25日」に注目してほしい。何かに似ていませんか？ そうです、クリスマスです。クリスマスは太陽暦の12月25日ですね。クリスマスの起源については、キリスト教が伝わる以前にローマで行われていた冬至を記念する祭りの名残ではないかと言われてたりしています。そうかもしれません。しかし私は、ユダヤ人であったイエス・キリストが、ユダヤの祭りのキスレヴ月25日に生まれたと考えるほうが、より真実に近いような気がします。というのは、上に述べたように、この日はハヌカの初日です。

イエスがユダヤの独立記念日に生まれたとすることによって、彼がユダヤ民族をローマの支配から救い、再び民族独立の吉報をもたらすメシア(救国主)であることを象徴

しようとしたのではなかったでしょうか。一般にはメシアは世界全体の救世主だと考えられていますが、もともとユダヤ人にとってはメシア(ヘブライ語ではマシアッハ)は、ユダヤ民族を歴史の悲運から救う救国主の意味です。しかし、彼はローマ軍の総督ピラトからローマへの反逆者だとして十字架刑に処せられてしまい、彼がくわだてた民族独立回復の事業も挫折してしまうのです。そして、彼の死後、その政治的革命運動は、宗教的福音運動に変化して、やがて世界的普遍性をもつキリスト教という宗教体になっていったのです。

光りのまつりハヌカにこそクリスマスの原型がある。皆様はいかがお考えですか？

ユダヤ人の結婚式

最近では、恋愛結婚がユダヤ人のあいだでも普通であるが、伝統的なユダヤ教の家庭では、今日でも仲人が親に良縁をもちこみ、双方の親が合意して縁談をまとめてしまう。筆者が幾度も参加したユダヤ人の伝統的な結婚式の模様をここに綴ってみよう。

[結婚式前の過ごし方]

縁談がまとまると、花婿は結婚式の直前のシャバット(土曜日)のシナゴーク(ユダヤ教会堂)礼拝で、その週の聖書の朗読箇所を朗読し、かつその箇所について説教をのべる。花婿がユダヤ教徒として立派な見識をもっていることを人々に示し、結婚をむかえるにふさわしいことを承認してもらうわけである。

伝統的には、結婚式前の一週間は花婿と花嫁は別々に過ごし、お互い顔を会わない。

結婚式は火曜日に挙式されることが多い。というのは、天地創造のさい、第3日目(火曜日)の夕方、神はその日の創造活動をふりかえって「これはうまくいった」と2度も発言したからである。火曜日は物事がダブルにうまくいった日であるという縁起をかつぐわけである。

祝いを妬んで悪霊がとりつくといけないので、結婚式の前日は花嫁も花婿もそれぞれ友人や家族にともなわれて一日を過ごす。一瞬でも一人では過ごさない。

[結婚式当日は断食から]

結婚式の当日、花婿も花嫁も朝から断食し、いままでにおかした過失、あるいは知らないでおかした罪を神のまえに懺悔し、それまでの生活と決別する。兩人とも式が終了するまでいっさい食物を口にしない。しかも結婚式が執行されるのは、たいてい夕方であり、それも夜空に星が輝きはじめてからが望ましいとされている。断食を徹底させるためである。

伝統に厳格な結婚式では、式場は男子の部屋と女子の部屋が別々である。入口さえも別々に区別し、最初から最後まで異性の部屋に足をふみ入れない。

[結婚契約書]

男子の部屋では、花婿側の仲人が結婚契約書を作成準備する。やがて花婿が到着し、結婚契約書の中身を確認する。つぎに花嫁側の仲人とラビが到着し、結婚契約書に記載されている条件が満足できる内容かどうか点検する。満足できる条件だと確認されると、花婿、ならびに双方の仲人とラビが証人として契約書にサインする。

その上で、さらに花婿が契約書通りに花嫁にたいする義務を履行するかどうかの誓約を、皆の前でさせる。花婿はラビがさしだしたハンカチの一方の端をにぎりながら、契約の履行を宣言する。これでようやく結婚契約が発効する。

その間、白いドレスの花嫁は、別室で母親や親戚友人の女にかこまれ、ずっと飾り椅子にすわって待っている。

契約が成立すると、花婿は介添人にともなわれて花嫁の部屋へと行進する。花嫁はあわててベールで顔をかくす。花婿は花嫁のまえまで進みでて彼女のベールをもちあげ、花嫁の顔をのぞきこむ。

かつてユダヤ人の祖先ヤコブが婚礼のさいに花嫁の顔を確認しないまま結婚し、翌朝になって花嫁が意中の人ラケルではなく、その姉レアであったという故事にちなんで、ユダヤ人は結婚式の直前に花嫁の顔を確認するようになった。確めた後、花婿はうしろすざりのまま花嫁の部屋から退出する。

[結婚式はフツパーの下で]

つぎはようやく結婚式である。結婚式は「フツパー(覆い)」とよばれる天蓋の下で執行される。約2メートル四方の布の四隅を高さ2～3メートルの柱でささえたものがフツパーである。

元来フツパーは戸外に立てるものだ。フツパーの4本の支柱は花婿の友人たちに支えてもらうのが望ましい。天の星の数ほど子孫が生まれますようにという願いから、フツパーを戸外に仮設する。最近では屋内ホールにフツパーを設置する例もある。

フツパーが立てられると、フツパーにむかって左側に男たちが、右側に女たちが集まる。まず花婿を先頭に、その両側をまもるようにして、松明をかざした介添え人の列が入場してくる。第一の介添え人は父親または既婚の兄弟、もしくは伯父たちである。それに続いて男の親戚や親友が列をなす。暗闇にうかぶ松明の光は儀式を神秘で神聖なものへと演出する。行列はフツパーへとむかう。

花婿は白いキツテル(ガウン)をまとってくるか、フツパーに登段してからキツテルをまとう。純白のタリート(祈禱用ショール)でもいい。

続いて花嫁の列も松明をかざした母親や姉妹、女の親戚や友人のともなわれて行進してくる。花嫁の顔は白いベールにおおわれたままでの入場である。

花嫁はフツパーに到着すると、純白のベールで顔をおおったまま、首を前方にふりふり、身をかがめながら花婿のまわりを7周する。花婿の心の7層の奥にまで入っていくことの象徴である。

二人が正面をむいて並んだところで、長老がフツパーの下に招かれ、結婚を祝福して

「祝福されよかし、汝、われらの神、主よ、宇宙の王よ。われらをその戒めよって聖別し、不倫を禁じ、婚約を固め、フツパーのもとで婚姻と聖なる結婚を許したもう御方よ。アーメン。祝福されよかし、汝、主よ、フツパーと聖なる結婚によってその民イスラエルを聖別される御方よ、アーメン」と唱える。

参会者一同もアーメンと唱和する。長老はワインが入った盃をとり、祝禱をとなえてワインを一口のみ、花婿と花嫁にも同じ盃からそのまま飲ませる。

つぎに2人の証人を前に、花婿が花嫁の右手の人さし指に指輪をはめ「みよ、汝はモーセとイスラエルの掟により、この指輪にて我がために聖別されたり」と宣言し、この一瞬で結婚が成立する。

花嫁はようやくベールをひらき、その美しい顔をあらわす。

花婿は花嫁にむかって結婚契約書をよみあげ、契約書を彼女にわたす。そこで参列者のなかから権威あるラビや長老が7人よばれ、結婚を祝福する7つの祝祷を順番に唱える。

その後、白布につつまれたガラスコップが花婿の足もとに置かれ、花嫁が見ている前で、花婿はそれを踏みくだく。砕かれたガラスが二度と元通りにならない如く、二人が二度と独身に戻らないようにとの願いをこめるのである。

以上で式は終了し、二人は参会者から祝福の声をうけながら「イフッド」に向かう。イフッドというのは「合一」を意味する。花婿と花嫁は証人二人に見守られて個室に入り、ここではじめてカップルになるのである。

イフッドの間、招待客らは男女それぞれ別の大広間で祝宴をはじめます。

ちなみに伝統に熱心でないユダヤ人の結婚式では、イフッドは二人だけの接吻と、その後で、家族との記念写真撮影のための時間にむけられている。

[深夜までつづく披露宴]

ユダヤ教の結婚披露宴はべつだんスピーチや挨拶があるわけではない。テーブルごとに飲み、食い、しゃべり、食事に花がさく。たいていはホールの片隅に楽団をやとって、ユダヤ人の好きなフォークメロディを演奏して、会場の雰囲気盛り上げていく。

30分から一時間もするとイフッドを済ました新郎新婦が宴会場に現れる。

さっそくエネルギッシュなフォークダンスが始まる。花婿と花嫁をそれぞれ椅子に座らせたまま、花婿を男友達が、花嫁を女友達が椅子ごと担ぎ上げて、男女別々に、別々の会場で大輪舞をくりひろげる。

踊り疲れては、テーブルに戻って休憩する。食事をたべては、また踊りと、ひたすら輪舞と休憩が交錯する。休憩の合間をぬって、男は新郎に、女は花嫁にそれぞれ個人的にお祝いを述べる。

夜半にいたって、ようやく披露宴の食事のための感謝祈禱を全員でとなえる。さらに7人の賓客が結婚の祝祷を朗詠して、ようやく宴会が終了する。新郎新婦が挨拶して、ついに披露宴が果てる。

念のために申し添えておくと、イスラエルでは結婚式も離婚手続きもすべて正統派のラビたちが独占している。そのため、改革派や保守派のラビの認証による結婚も離婚も有効とは認めれていない。

イスラエルからの発想: SIGNBOARD

ユダヤ古典から現代への示唆

手

島佑郎

[\[フロントページへ戻る\]](#)

～ 偏見について ～

詐欺禁止法が売買に適用される如く、詐欺禁止法は発言にも適用される。「これは幾らするのか」と買いたくないのに、言うてはならない。改悛した者にむかって、「おまえの以前の仕業を覚えておけ」と言うてはならない。改宗者の子にむかって、「おまえの祖先の為したことを覚えておけ」と言うてはならない。（ミシュナ「ババ・メツィア篇」4:10）

[右利き至上主義のニッポン]

筆者は左利きである。そのために学校時代はずっと偏見にさらされてきた。「ぎっちゃんちゃん」と罵倒される。ギッチョであること自体、それはカタワだとみなされてきた。ギッチョが書く文字は、とかく左上がり、つまり右下がりになりやすい。そのため、習字ではいつも大幅に手直しを命じられた。

そもそも文字の筆順や運筆は、すべて右利きを前提に定められている。だから、右利きの筆順を守ろうとすると、鉛筆も筆も押さなければならない。これだけでも、ギッチョにとって文字を書く作業はハンディキャップがある。

英語では身体障害者のことを、handicapped (ハンディキャップド) というが、ギッチョはまさしくハンディキャップなのである。

ハシと茶碗、バットとラケット、自転車、歯ブラシ、タオル、石鹸、安全カミソリ、洗面器などをのぞけば、生活のほとんどの道具は右利き用の道具ばかりである。小刀、包丁、ハサミ、ノコギリの刃も右利き用だ。左利きにはすごく使いづらい。

ソロバンにいたっては、左右両手のどちらでもよさそうだが、位取りの位置は右利き用である。右手で算盤珠をはじこうにも、右手の指がうごかない。

小学校4年のとき、熊本でYMCAの珠算教室に通いはじめた。左手で逆に位取りをしようすると、教師から叱られる。逆に位取りしても、本人が正しい計算結果を出せるなら、それでよいのではないか……。だが教師は、珠算は右手ではじくべきもので、左手でやってはならないと大声でぼくを叱った。

右利き社会のシステムが、すべて正常であり、これに順応しない者は異端児だとしてダメ印を押してしまう。せっかく意欲をもって習いはじめた珠算であったが、逆位取りを認めない教師のもとで、いやになってしまった。それでソロバンは途中でやめるしかなかった。

[左利きに寛容な欧米]

21歳のときにイスラエルに留学し、ヘブライ語をまなんだ。ヘブライ語は、アラビア語とおなじく、右から左に書く。だから、いっけんすると左利きに有利なように見える。しかし、このヘブライ語も筆順は右利き用の筆順なのである。だから、ギッチョにはすごく書きづらい。

左利きのユダヤ人学生たちは、ノートをほとんど直角にずらし、上から下へ縦書きにして講義を書き取っていた。後でノートを正常な位置にもどすと、右から左への横書きになっている。これには少なからずおどろいた。ぼくも真似してみたが、うまくいかなかった。最初から縦書きで運筆をおぼえないと、そう簡単にこの芸はできないのであった。

イスラエルで有難かったのは、教室の左端の列はギッチョ用の座席がならんでいたことだ。椅子の左肘にテーブルがついていて、ギッチョ者がらくに筆記できるよう配慮されていた。

米国でも教室の左端は、原則として、ギッチョ用の座席が用意されていた。英国では10人に1人が左利きだという。欧米の社会には、人種偏見、宗教偏見など、さまざまの偏見がある。だが、少なくともギッチョにたいする偏見だけは、それほど無い。

あのレオナルド・ダ・ヴィンチは左利きで、かれの手紙はすべて右から左に逆文字で書かれてあり、友人たちは鏡に写してその手紙を読んだという。そういう寛容さは、日本人社会にはまだまだ無い。

テレビのニュースなどで、著名人が左手で署名している姿を見かける。ブッシュ前大統領、クリントン大統領、チャールズ皇太子……。

さいきん日本では右脳開発の必要性をさかんに力説している。野球の左腕投手というのは珍重されるが、それ以外の分野で、日本人でギッチョの著名人には、なかなかお目にかからない。せいぜい東京都知事・石原慎太郎氏であろうか。それでも彼が公然と左利きを公衆の面前にさらしているわけではない。

[人間とは偏見の存在である]

人間とは、偏見の存在である。偏見のない人間はいない、といっても過言でない。

偏見には、他人や物事を偏見で見ることと、他人から偏見で見られることの両面がある。

自分は物事を偏見で見ない、と公言するひとがいる。だが、その彼が物事を判断するさいの基準となるその価値観はそのひと自身の考え方や物の見方である。

自由主義者は自己の考える自由という概念から、自由の権利を主張する。

国粹主義者は国粹主義の価値観で国威発揚を叫ぶ。

共産主義者は、共産主義の理念のもとに社会現象を批判する。

庶民と自認するひとは、庶民感情なるもので世間を取り沙汰する。

だれもが自分の考えで、自分以外の物事を判断している。

だれもが自分の考えを放棄するわけではない。ひとはみな自分の考えというメガネを持っている。

そのメガネは、かれ独自の物差しであり、かれ独自の視点であるから、これが偏見でないはずはない。

[自己防衛の価値観]

なるほど、情報を受け取ったり、外界の現象を観察したりする瞬間までは、ひとは外部からの刺激にたいしてニュートラルである。

しかし、外部からの刺激や情報を判断しはじめるや否や、自分の価値基準で物事を評価し、自分の好ましい方向へと決断をくだす。

その点で、偏見とは自己防衛のための価値基準といってもよい。

ただし、これを偏見と呼ぶか呼ばないかは、相手側から見てその価値観が鋭く対立し、なおかつ相手にとって受容できない不快な価値観であるかどうかによる。

人は、自分が承認できない価値観で自分を評価されると、それは偏見で自分をみられたからだと考える。ここにも、見られた側の自己防衛の意識がはたらく。

[偏見で見る側と見られる側]

そういうわけで、偏見が問題になるのは、偏見で見られた側が、偏見者に対して強力な反発をしめすことから始まる。

見る側には偏見で見ている意識がなくても、見られている側は、そこに異種の判断が働いていると感じ取る。異種の判断が働いていると感じるだけでなく、自分が差別されていると思うのである。

[多数派の偏見]

では、偏見で見る側には責任がないのかといえば、そうではない。偏見で見る側に責任がある。

偏見で見ているながら、ほとんどの偏見者は、自分を取り立てて偏見で見ているわけではない、と偏見の事実を否定する。自分はまともな視点から見ているのであって、自分には問題はない。もし問題があるとすれば、相手側の態度や行為に問題があり、改めるべきは相手側である。そう偏見者は主張する。その典型的な例が、西欧社会の対ユダヤ人への偏見、日本社会における対部落民への偏見などである。

社会の大多数をしめるグループの人々の目から見ると、少数派の人々の行為は容認しがたいものと映る。ときには、少数派の存在そのものが不快に映るのである。多数派にとっては少数派の行為も存在も目障りなのである。全員が同じ価値観を共有し、同じ意見で、同じ行動をすることが、多数派にとっては快い。それが偏見の源流である。

そのためであろうか、偏見は、しばしば多数派から少数派にむかって、あるいは強者から弱者にむかって発せられる。健常者から非健常者への偏見や差別もその一例である。

[偏見のない社会を作るには]

偏見を解消してもらうためには、偏見で見られている者が泣き寝入りしてはならない。部落解放や身体障害者の差別撤廃をはじめ、偏見をうけている被害者が、社会に向かって偏見打破を叫ぶ必要がある。

しかし、それ以上に大切なことは、世の中の主流になっている健常者や多数派に、偏見以前に、きちんとした倫理観を身につけてもらうことである。

タルムードは言う。たとえ、いったん罪を犯した過去がある者であっても、「(その罪を)改悛した者にむかって、『おまえの以前の仕業を覚えておけ』と言ってはならない」と。また、かつてはユダヤ教でない外国人としてユダヤ人をいじめた異民族出身の者であっても、「(その父がすでにユダヤ教に改宗した)改宗者の子にむかって、『おまえの祖先の為したことを覚えておけ』と言ってはならない」と。

ましてや、罪のない身体障害者や、部落出身者、外国人などを偏見の目で見てはならない。

[タルムードの経済社会原則]

ここで重要なことは、タルムードでは、偏見の問題が公正取引の議論の一環として取り上げられている点である。社会福祉とか貧民救済といったテーマのなかで取り上げられているわけではない。

「詐取禁止法が売買に適用される如く、詐取禁止法は発言にも適用される。買いたくないのに、『これは幾らするのか』と言ってはならない」に続いて、偏見の問題が取り上げられている。

経済の健全な発展のためには、健全な発言の維持にも努めなければならないというわけである。

売り手と買い手がお互いに騙しあうような関係、雇い主と雇い人とが相互不信で協力しない関係、市民と外国人とが歴史の古傷を暴露しあう関係。それでは経済は発展しないのである。

半信半疑でだましあう関係を、経済行為から排除するだけでなく、日常の社会生活全般からも排除しなければならない。経済の繁栄は、社会の底辺から上部までの相互信頼が出来てはじめて、実現するのである。

～ 発言者の責任 ～

アブタリオンいわく、「賢者たちよ、汝らの発言に注意せよ。さもなくば流刑のせめを負い、悪しき水のところに流さるべし。しかして汝らの後に来る弟子らはそれを飲んで死すべし。さらに、天の名も冒瀆されるに至らん」 (タルムード、ミシュナ「アボット篇」1:11)

[日本の国会審議]

日本の国会というのは、議論が尽くされたかに見えるが、じっさいは最初から賛成論と反対論があっただけで、しかも平行線のまま終始するにすぎない。水かけ論にさえなっていない。水かけ論というのは、もともと日照りのとき、農民が自分の田に水を引こうとして主張しあったことに由来している。そのさい、A男はなぜ自分の田に優先的に水をひくべきかA論を主張し、B夫はB論を主張したわけで、少なくとも議論としてのA案、B案があった。

たとえば、昨年のこと、国旗・国歌法の成立をめぐって国会の議論である。結局のところ、単純に国旗国歌法案賛成と反対という議論があっただけだ。あれでは、実際には「+A案」と「-A案」があったにすぎない。反対派は-A案に終始するのではなく、新しい角度からB案を提示すべきであった。たとえば国歌法案に関して、メロディーはそのまま、歌詞を改訂する。歌詞を公募する。全面的に新しい歌詞と新しいメロディーの国歌案をいくつか国民のまえに提案し、検討させる。せめて、そういう試みをすべきで

あった。賛成派は、君が代の君は天皇をさすが、今後は、国民がお互いにキミと呼びあって尊敬して相互のイヤサカを祈りあう意味で歌ってほしい、と説明してもよかったのではないか。

[議論不毛の人々]

一般に日本のインテリの議論の貧弱さは、目を覆うばかりである。たとえば、現代思想の権威者の某先生いわく、「日の丸、君が代が法律化された。これは問題だ。軍国主義に復帰しかねない。そもそも天皇制を残したことはマッカーサーのまちがいであった。ベルギーの王室のように開かれた王室ならばいいが、日本の天皇は国民から離れすぎている。それに皇族には皇族籍離脱の自由さえもない。それに天皇は大嘗祭の儀式によって天照大神の子と化すわけで、いまだに現身神であり、これは天皇の人間宣言を反故にしている。我々は日本の良心として天皇制に断固反対しなければならない」

この発言の中で議論を尽くしていない点は次の通りである。

疑問・： 日の丸、君が代が法制化されたから軍国主義に戻る可能性があるという根拠は何か。国旗や国家を別のものに改めれば軍国主義に復帰しないと保証できるものなのか。

疑問・： 天皇制を残したことはまちがいであったというが、天皇制を廃止すれば日本はどのような国になっていたであろうか。

疑問・： ベルギーの王室のように開かれた王室ならばいいがというのであれば、必ずしも天皇の存在に反対しないというのか。開かれた皇室になるようにするために、国民は何をなすべきか。

疑問・： 皇族には皇籍離脱の自由が本当はないのか。

疑問・： 大嘗祭という儀式を経たからといって、本当に天皇は神になるのか。しかも、あなたは天皇を神だと信じるのか。それに、天皇は自分が天皇という地位にあるから己は神だと自覚しているのだろうか。

疑問・： 天皇制に反対することが日本の良心なのであるだろうか。

[皇室と民主制]

上記議論の拙速さを裏付ける一例は・である。皇室の基本をさだめた「皇室典範」によれば、第11条では、「やむを得ない特別の事由があるときは、皇室会議の議により」皇太子、皇太孫以外の皇族が、皇族の身分を離脱することを認めている。一時期、三笠宮家の次男殿下が皇籍離脱をしないと漏らしていたが、結局、離脱しなかった。やむを得ない事由ではなかったのであろう。

一部の人々は、日の丸が戦争のシンボルであるかのようについて。だが、国旗をかかげないで戦争をする国があるだろうか。戦争に負けたからといって国旗を変えた国もあるだろうか。天皇制だから軍国主義につながるというのも短絡的だ。鎌倉時代の武士団や戦国時代の大名は、天皇とは無関係に武装していた。あの時代も天皇は存在していたのだ。

天皇などいない民主国であれば戦争をしない国になるというわけでもない。20世紀に最多の戦争をしたのは民主主義のお手本の国・アメリカ合衆国である。第2次世界大戦以来8回出兵している。

[私案：天皇の効用]

天皇は大嘗祭という「儀式」によって、天照大神の子となり、正式に天皇となるという。それは天皇の即位の儀式である。それがわが国の天皇の伝統なのである。だからといって、国家が国民に現人神として天皇を崇拝せよと強要するわけではない。そうであれば、ことさらに大嘗祭に反対する理由はない。

筆者は、天皇制に反対はしない。かといって、天皇崇拝もしない。だが、もっかのところ日本に天皇という制度は必要であると思う。

なぜならば、権力の亡者どもが勲章までも欲しがっているからである。もし権力も権威も彼等のほしいままにまかせるなら、どんなに暴走するかしれない。その点で、権威の源として、政治に関与しない天皇が存在することは、権力におごる者らの専横にある程度は歯止めをかける効用があるのではないか。全国の覇者となった信長、秀吉、家康といえども、天皇を超えて暴走することはなかった。

天皇を悪用しはじめたのは、明治新政府や第1次大戦後の軍部だったのではない。天皇の名を借りて、自分の利益を守ろうとした。それは、たぶん、会社を守るためといって粉飾決算を謀った連中と同じやからである。天皇制を悪用させないシステム

を築くことのほうが、天皇制を廃止するよりも、ずっと大切なのではないだろうか。そのへんの議論をきちんとすると、案外、開かれた皇室の在り方への知恵も出てくる。

[「いわゆる知識人」の独善]

日本の知識人にしばしば見られる弊害のひとつは、自分こそは日本の良心だと自負していることである。それも画一的に戦争反対、再軍備反対、天皇制反対、日の丸・君が代反対、原子力反対...と、ともかく反対さえ唱えれば、それが良心の証であるかのように自負している。

安易な反対の弊害の典型が、美濃部東京都知事が反対した羽田空港拡張である。そのため成田という途方もない負担を、国民も旅行者も背負いこまねばならなくなった。彼が首都迂回高速道路建設に同意しなかったために、すべての車がいったん都心に入らなければ首都圏を通過できなくなった。ひとりの知性人が何事も国の計画に反対したために、その後の東京の交通渋滞はいっそうひどくなった。

なぜこういうワンパターン的な反対論を日本の知識人はくりひろげるのか。

筆者の考えでは、それは、彼等が実務を経験していないからである。福沢諭吉のことばを借りて言えば、彼等が実学をしていないからである。明治のはるか以前から、論語の素読にはじまって、単純に受け売りすればそれが学問であるかのような風潮が、学者の間に伝統として形成されてきたからである。

だれかの意見と眼鏡を借りて、その意見を焼き直して物を言い、その眼鏡を通して物を見ることが、日本の学者の伝統なのである。そこには、なぜ自分はその眼鏡を借りて物を見るのかという自己批判が欠如している。戦時中は大政翼賛会を賛美していたのに、戦後、自己批判もせずにはやく左翼に転向し、まるで昔から民主主義者であったかのように振る舞った丸山真男など、その典型である。

[軍備と平和]

断わっておくが、筆者も戦争反対である。なにもむやみに戦争などしないにこしたことはない。ましてや原爆戦争などもってのほかである。

だが、軍備なしで戦争が防げるのかということについては疑問をもつ。または、世界中の国々から軍備廃絶すれば、戦争はなくなるという意見に対しても疑問をもつ。なぜならば、人間の心から怒りや敵意を排除できないかぎり、地上から争いを廃絶する

ことはできない。それに、たとえ武器を廃棄しても、使い方によっては果物ナイフ1本だって凶器に変えられる。

それよりも、国民皆兵で軍備を維持し、それでいて永世中立をめざすスイスのような生き方のほうが、じっさいにはより現実的な平和維持の手段ではないだろうか。

だが、そうなってくると、問われるのは国民一人々々のモラルである。平和への決意である。武器不使用の規律である。

スイスでは、各家庭で軍隊用の銃を保管している。これは、武器をみだりに国民同士で使わないことを徹底しているからこそ実現できていることである。こういうモラルが今の日本国民にあるだろうか。

平和は武器を持たないことから始まるのではなく、武器を持っても使わないことから始まるのである。

[実学の条件]

実学と虚学のちがいはどこに生じるのか。察するに、それは実務経験の有無だけによって左右されるものではない。実務経験だけならば、世間一般の人々は、それぞれの分野で日々、農業な、工業、商業といった実務活動をつづけている。それだけでは、いまだ学問の領域にはならない。

実務が実学にレベルアップするためには、次の2つの条件が全うされねばならない。

第1に、経験を客観的に観察し直し、体系的に整理することである。すなわち理論化することである。

理論というと、とかく難しく聞こえるかもしれない。だが、理論化はそんなに難しい作業ではない。理論というのを英語では theory という。ご承知のように、これはギリシヤ語の theoria(観照)ということばに由来している。

まずは自分が経験した事柄を、よいことも、わるいことも、裏も表も、知り得るかぎりの事実と現象を書き出してみることである。その上で、現象を順序立てて、原因結果にも注目しながら関連つけ、全体を整理してみることである。つまり体系化である。整理したら、それらの結果どのような意味が得られるかまとめてみる。これが理論化にほかならない。

中途半端な理論は、たいてい理論化の第一歩「よいことも、わるいことも、裏も表も、知り得るかぎりの事実と現象を洗い出す」作業を手抜きしている。そのため論理のつながりも悪くなり、中途半端になる。

[他人を誤らせない]

理論が整ったからといって、それがすぐに学問として役立つわけではない。理論が役立つかどうか判明するためには、実際にテストされ、実証に耐えていなければならない。理屈のすじが通っていることと、それが実用可能であることとは別だからである。

そこに第2の条件として、他人を誤らせないかどうかの点検が必要になってくる。いかにも体系立っているようで、それでいて人々を反社会的行動にみちびいたオウム真理教などは、この点でひっかかる。

聖書やタルムードなど、ユダヤ人の膨大な発言が今日まで残ってきた理由は、それらが人々を誤らせない発言であるかどうか吟味され、淘汰され、選別されてきた内容だからである。

[アブタリオンの教え]

西暦前50年頃のユダヤを代表する学哲アブタリオンの教えは、そのことを端的に示している。「賢者たちよ、汝らの発言に注意せよ。さもなくば流刑のせめを負い、悪しき水のところに流さるべし。しかして汝らの後に来る弟子らはそれを飲んで死すべし。さらに、天の名も冒流されるに至らん」

学者や知識人たちは自分の発言によくよく注意しなければならない。間違った発言をすると、君たち自身も弟子たちも間違った方向へ進むぞ。それはさながら国を失い、異国に流されることと同じだ。その結果、君たち自身も誤った考えを飲むようになろう。そればかりか、君の弟子たちも誤った考えの水を丸飲みして身を滅ぼすことになる。さらには、そんな学問をしても無益だとか、彼等の先生が間違っていたとか、学問自体への信頼も傷つけることになる。

自分の世代だけに通用する学問であってはいけない。せめて弟子たちにも役立つ学問、それも周囲の人々から見て、有益だと評価される学問でなければいけない。そうアブタリオンは教えた。

学者が自己陶醉に浸ったのでは、これは出来ない。とかく学者や知識人は、自分が教えようとする事柄に自ら陶醉しやすい。それではいけない。周囲の人々から見て、その発言内容に妥当性が認められるか。それも、自分のシンパの特定の見方からだけで見るとはならず、広く第三者の視点からも批判を仰いでいるか。

[学者と経営者]

日の丸・君が代を承認するか拒絶するかの問題以前に、それをどの角度から自分が眺めたかが問われなければならない。少なくとも、自分の目先の固定観念で見ることと、自分が快感をおぼえる結論だけは避けねばならない。

学者ということばを、ここで経営者という語に置き換えて考えてみてほしい。どれだけ経営者は物事を全方向から見ているか。画一的な思想にはまっていないか。借りてきた理屈で物事を説明しようとしてはいないか。他人の色眼鏡をとおして物事を眺めようとしていないか。いや、自分の眼鏡でも、場合によっては、レンズの屈折度が視力に合わなくなっているかもしれない。くれぐれもご用心、ご用心。

～ 教える者の心得 ～

教えるために学ぶ者は、その手で学ぶことも教えることも叶う。実践するために学ぶ者は、その手で学ぶことも教えることも、守ることも実践することも叶う。 (ミシュナ「アボット篇」4:5)

[知恵の社会]

21世紀の日本の社会のあるべき姿は、知恵の社会だという。こういう議論は、まことに結構なことだ。だが結構な議論には、反面、たいてい落とし穴がある。

玉虫色に仕上げているだけに、それを受け止める読者や聴衆にとって不都合なことは、一切しるされていない。反対が予想される事柄はすべて除去してある。そのため、平面的な美点だけをならべて、立体的な問題については見て見ぬふりなのである。

たとえば、経済審議会が今回提言した知恵の社会といおうと、堺屋太一氏の知価革命といおうと、どうすればそれを実現できるかということについては、ほとんど言及していない。そこが今回の落とし穴である。

[ひとりよがりの理解]

筆者は長いあいだ、人まえで話すとか、人に物をお教えするという仕事をしてきた。だが、ふりかえって見ると、必ずしも毎回うまく仕上がっているわけではない。

高校時代は弁論部にいた。小理屈をいじくりまわした程度の弁論では、入賞さえおぼつかなかった。確実に1位入賞できるようになったのは、自分の心の恥部をさらけだして、自分のあるべき姿を自己批判するようになってからである。

19歳のころ、トインビーに傾倒して、当時日本語で入手できるトインビーの訳本は主著『歴史の研究』をはじめ、ほとんど全部読破していた。『歴史の研究』上下1623頁は3回以上は読んでいた。自分なりにトインビーの思想をよく分かっているつもりであった。1961年秋、トインビーについて30分ほど発表する機会にめぐまれた。得意満面で話した。

後でその発表の録音テープを聞いて、私は愕然とした。自分で聞いても、何を言おうとしているのか、話しが支離滅裂でよく分からなかったからである。自分では何を話すつもりか事前に準備をしていたし、発表用の資料もまとめていた。しかし、準備していたからといって、分かりやすく話しができるということは、別なのである。自分だけ悦に入っている、いわば、ひとりよがりだったのである。

[知識だけの理解]

人にわかりやすく話す。これが出来るためには、自分で分かっているつもりだけでは不十分である。学んだことをほんとうに咀嚼できていないと、分かりやすい話しはできない。

1967年にイスラエル留学を終えて日本に帰国した。父がキリスト教の伝道をしていた関係で、父の弟子の方々に旧約聖書入門を解説する機会が多かった。だが、いわゆる聖書批判学で得た知識を人々のまえで披露しても、どこかちぐはぐな印象が私自身ぬぐえなかった。彼等が求めているものと、私が知識として知っていることとの間に、なにか壁がある感じがした。

これは、自分で分かっているつもりと、自分で考えて納得していることとの段差から生じていた。

このギャップを埋めるためには、知識としての聖書批判学ではなく、生活に密着した思想としての聖書の読み方を知らなければいけないと思った。それにはどうするか。

オックスフォードで学ぶか、ケンブリッジで学ぶか。それとも、ヘブライ大学に戻るか。さまざまな選択肢があった。古典のテキストを対照する文献学や、言語の解釈に終始する言語学には興味がなかった。

そこで、ニューヨークのアメリカ・ユダヤ神学校のラビ・アブラハム・ヨシュア・ヘシエルのもとで学ぶことにした。タルムードをはじめ、ユダヤ教の古典のなかから、現代へのメッセージを汲み上げているヘシエル教授に学ぶことが、私にとって最適の道だと思えた。

[ラビ・ヘシエルの指導方法]

先生の指導はある意味で苛酷であった。先生はテキストの解説とか、ラビたちの思想の解説などまったくなさらなかった。テキストの内容について学生が知っているはずだとの前提で、いきなりその現代的意味について談話される。予備知識のない学生には、何が何だかさっぱり分からない。

たとえ予備知識があっても、社会のなかで起きている様々の事件や葛藤について問題意識がない者には、なぜ先生がそう考えるのか、先生の思想についてゆけなかった。

先生は古典を読解していたのではなく、古典を思考の軸にして現代を考えておられた。

そのことが分かるようになったのは、先生が1972年12月に亡くなられた後、ヘシエル思想について講座を担当してからである。74～76年ロスアンゼルのユダヤ大学とベバリーヒルズのシナゴークで講座をもってみて、はじめて先生が何をめざしておられたのか実感できた。ヘシエルについて語ることは、社会について語ることであった。社会の問題を知らないで、ただ単純に人物と思想を語るのは愚かであった。

[自分の問題・自分の経験・自分のことば]

以来、私は自分の問題の目で書籍を読むように変わった。著者の主張を知ること大切だが、それ以上に大切なのは、問題を考える自分である。自分がかかえている問題に対して著者は何を助言してくれるか。助言のヒントをそこに発見できるか。これが大切なのである。

どこまで自分の問題を、あるいは自分の時代の問題を、自分のことばで考えることができるか。それは、考えるだけに終始しない。考えて、なおかつ行動するためである。実践するためである。

実践するためには、抽象的な思考は役立たない。具体的で現実的解答でなければならない。どこまで現実との接点をもって思考するか。それが肝心である。

そのためには、現実を観念としてでなく、生活の事実として体験しているかが問われる。経験していない事柄を観念だけでとらえようとする、議論はとたんに抽象的になり難くなる。

[教える者の条件]

そこで思い出すのが、本号のはじめに紹介したミシュナの有名な一節、「教えるために学ぶ者は、その手で学ぶことも教えることも叶う。実践するために学ぶ者は、その手で学ぶことも教えることも、守ることも実践することも叶う」である。

私が駆け出しの教師でいた時は、学んだことを教えるだけであった。だが、なぜそういう理屈なのか。なぜそういう公式を当てはめなければならないのか、について説明できなかった。

おしなべて授業が退屈なのは、教科書を教えているだけであって、なぜそれを取り上げているかを説明しないからである。企業での研修がおおむね退屈なもの、講師が知識の切り売りしかしないからである。

教員社会しか知らない教員、講師業という業務しか知らない講師、コンサルタント業務しか知らないコンサルタント、そうして知識ばかりの教師の話は面白くない。

ソクラテスは弟子アルキビデアスにむかって、教える者の心得は「自分がいちばんよく知っていることを教えるべきである」と語っている。それは自分が経験したこと、自分が習熟していること、自分が納得していることに他ならない。

つまり、自分で経験していないことや、納得していないことを教師は教えるべきではない。そこに、教師たる者の姿勢が問われる。教えるためには、物事を実践することをまず念頭におくべきなのである。実践してみて、物事の法則がわかり、ルールを守る意義も発見する。それが出来てはじめて、他人に教えてもいいのである。それぞれの道の達人を講師に起用することこそ、教育を成功させる秘訣である。

[デマの原理]

私自身を振りかえってみても、自分に問題意識がなければ、結局のところ、著者の主張に自分が押し流されてしまう。あるいは、著者の主張に巻き込まれてしまう。そして、単純に受け売りをはじめてしまう。

いまでこそ、そういう受け売りをしなくなったが、少年期から青年期にかけては、私も受け売りをした。

その一つの失敗例が、はじめに申し上げたトインビーについての発表だったのである。

必ずしも受け売りが悪いわけではない。だが、受け売りは、質問で突っ込まれたとき返答に窮する。だから、自分なりによく咀嚼することが大事なのだ。咀嚼するためには、さまざまな事柄を経験しているか否かが大切になってくるのである。トップに躍り出る栄誉も、どん底で失意に泣く悲哀も、共に必要な経験だ。

1番になったことがない者は自信を知らず、挫折したことがない者は謙虚を知らない。成功したことがない者は努力を知らず、失敗したことがない者は限度を知らない。

そして、むやみに受け売りを重ねていく。それが俗にいう「優等生」の生き方なのである。彼等の議論は結局、みずからの痛みと喜びに支えられたものではない。事実と実証にもとづかない議論である。

それは、引用と憶測と我田引水に終始するから、しばしば、◎◎が分かれば△△が分かる式に安直なステレオタイプに変身する。しかも大衆を魅了するのは、洋の東西を問わず、この手の議論だ。デマの原理は、つねに引用と憶測と我田引水の混合である。皆様、ご用心、ご用心。

民主主義とは、外的抑制を自己抑制で代えるものである。これは達成する以上に維持するのが難しい。 [ルイス・ブランダイス(1856-1941)が1922年、友人に送った手紙より]

[民主主義の凋落]

英国の経済雑誌『The Economist』1999年7/17号に、「民主主義はトラブルにはまっ
ているか」と題する興味深い一文があった。米・英・独・伊・日・加・豪・蘭・澳・スウェー
デン・デンマーク・フィンランド・ノルウェー・ベルギー・スペインなど、民主主義の先進
国では、おしなべて、いずれの国でも、政治不信が広がっているというのである。

同誌によれば、どの国でも、政治機関(議会、行政機関、司法機関、警察、軍隊)に
たいする国民の信頼が低下している。国政選挙レベルでの投票率も低下の一方をた
どっている。政治機関への信頼のみならず、政治家への信頼も総じて低下している。
上図にはないが、直接民主主義の国スイスでの投票率の低下は目に余るものがある。
1950年代の投票率が平均60%で、ほぼ現在の日本の投票率に近い。だが最近2
回の選挙での投票率はかろうじて40%である。

わが国の総選挙での投票率を見ても、1980年の衆議院選挙のときは74.6%であ
ったが、96年の選挙のさいは59.6%に落ちている。参議院選挙は74.5%から4
4.5%へと大幅減少である。投票率の低下をはじめ国民の政治家ならびに政治不信
が日本でも顕著であるという点で、まぎれもなく日本は先進国の仲間入を果たしたの
である。何が政治不信を招いたのか。これは先進国共通の課題である。

[政治不信の原因]

ここで注目すべき事実がある。「政治家は国民の要望に関心を払っているか」という
アンケートに対して1960年代の米国民の3分の2がイエスと答えたが、98年には3
分の2がノーと答えている。

カナダでは68年に「ノー」45%であったが、93年には67%に増加している。イタリ
アでは68年に「ノー」68%であったのが、97年には84%になっている。

議会に対する信頼度も66年米国42%が97年12%に下がっている。スウェーデンでも議会に対する信頼が、86年51%から96年19%と信頼低下している。

この現象を、The Economist 誌は、「民主主義はみずからの成功の犠牲になっているのかもしれない」と評している。つまり、政府が国民に要求する以上に、国民のほう
が政府に対して様々の要求をつきつけ、それが実行されないで国民は失望するという悪循環である。だが、道路などの公共設備の整備にはじまって、環境保護、完全雇用、男女差別撤廃、外国人差別撤廃、道徳指導など、ありとあらゆる問題を政府に押し付けるようになったのは、きわめて最近の現象である。

The Economist 誌は、こうした政治への信頼失墜の一因として、教育水準の高度化とそれに伴う懐疑論者の増加も考えられるし、マスコミが政府の失敗を大きく取り上げることも原因とみている。

[民主主義の問題]

現在の日本は何でも発言できる社会、何でも要求できる社会である。そこに、遅ればせながら始まった日本の民主主義だが、いちおう日本人の間に民主主義が根付いてきたことを見る。この何でも言えるということは、民主主義社会の基本だからである。言論の自由ぬきに民主主義は成立し得ない。

信用できない政治家が増え、無責任な役人がのさばっているかのようにマスコミは伝える。だが、これは今に始まったことでない。昔からあったことだ。だが、昔はそういう事実を簡単に糾弾できなかった。

戦後54年間、われわれは民主主義という言葉に、希望のひびきを感じてきた。

民主主義によって、バラ色の社会を創出できると確信していた。民主主義によって世界も日本も平和になり、民主主義によって生活も保障され、民主主義によって経済の繁栄も約束される。民主主義によって個人の幸福が全て実現される。そう我々は信じてきた。そして、その夢を、今日われわれは既の実現してしまったのである。だから、政治への不信をストレートに表明できるのである。

他方、経済も戦後、格段の飛躍をし、いまや世界一の貿易黒字国になった。日本が不景気だといっても、それでも外貨は日本に流入してくる。これ以上外貨を稼げば、世界中をまた日本が貧困に陥れてしまう。だから、政治に現在以上の経済改善を期待しても無駄だ、と悟ってしまっている。

[民主主義の実体]

そもそも、言論の自由以外、いったい民主主義社会は何を約束していたというのか。

民主主義社会になれば万人が幸福を実現できる、と人々が考えていたとすれば、それは幻想だったのではないか。デモクラシーとはデモス(人民)とクラティア(権力)の合成語である。それは単純に各人の自由と平等と多数決の原理とを承認した政治体制にすぎない。民主主義によって何を実現できるかは、民主主義とはまったく無関係なのである。

民主主義は、政治の素人にすぎない民衆を政治の主人公であるかのように祭り上げるシステムである。だから、そこには、つねに衆愚主義におちいる危険が隣り合せている。ギリシャの昔から、一面で、民主主義は腐敗していた。たとえば、ソクラテスを死刑に追いやったアテネ市会の決定は、ソクラテスのことを快く思わない反対派が民衆を買収した結果であった。

民主主義に過剰に期待することも、民主主義を過剰に信頼することも間違いなのである。

[民主主義の課題]

では、われわれはどのように民主主義に対処したらいいのか。

The Economist 誌によれば、議会・役所・司法機関・警察・軍などへの信頼の低下こそは、民主主義の新生への機会がひらけてきたことを意味するという。なぜならば、政治に対する「批判的市民」が台頭しはじめているからである。その意味では、いまや資本主義ばかりではなく、民主主義も創造的破壊にさらされているのである。

というよりも、民主主義はつねに不完全を背負ってきた制度なのである。1916年ユダヤ人として初めて米国最高裁判所判事に就任したブランドイスは、民主主義について次のように述べている。

「民主主義とは、外的抑制を自己抑制で代えるものである。これは達成する以上に維持するのが難しい」民主主義の難しさは、外部からの権力によって個人を規制しないからである。民衆各自が、個人として責任ある行動を取らねばならない。

他人に依存できない点で、民主主義はつねに自己崩壊の危機にさらされている。

ブランドイスは別の場所でこうも語っている。「良い政府というものを私はあまり信用していない。われわれが必要としているのは、個人の発展である」

政治家個人の倫理や資質の向上はもちろんのこと、つまるところ、われわれ国民一人々々の政治的自覚が変わらないかぎり、現在の政治不信は改善されない。

[リーダーと政治]

ユダヤ人社会というものは、古来、民主主義が根付いていた民族である。聖書時代から、白昼堂々と国王を非難する者、預言者の存在を公認してきた。それくらい言論の自由が保証されていた社会であった。

それだけにまた、政治や権力というものが如何なる実体かを心得ていた。西暦3世紀のパレスチナのユダヤ人指導者、バルカパラはいう。「権力府というものは、何事も只ではしてくれない」

政治家や為政者に頼み事をするとなると、贈り物が必須であることを承知していた。必要とあらば、清き1票程度では済まない世界。それが政治なのである。民主主義と同様である。それを承知の上で、なお清潔な政治をめざさなければならない。そこに、リーダーの真価が問われるのである。

[バルカパラの物語]

ある嵐の日、バルカパラが地中海の港カイザリヤの浜辺に出ていた。すると目の前で一隻の船が難破した。一人だけ板片につかまって助かった。気の毒に思ったバルカパラは、かれを自宅に連れて行き、衣服を与え、食事をさせ、当座の費用にといって5セラ差し出し、男を送り出した。

しばらくし、ユダヤ人の中にローマ軍への謀反を企てる者が現われ、逮捕されてしまった。事件の解決のためにユダヤ人を代表して、バルカパラがローマ総督府へ許しを乞いに行くことになった。総督へのお詫びのしるしとして、金貨500デナリを持参した。

総督の官邸に通されてびっくりした。パレスチナのローマ総督は、あの嵐のなかで助けた男だったからである。総督もびっくりした。「先生、なぜここに来られたのですか」

「かくかく、しかじか、反乱を企てたということでユダヤ人の一部が世間を騒がせています。今後二度とそのようなことをさせませんので、なにとぞ逮捕された者も含めてお許しをいただきたいと、お願いにきました。お詫びのしるしに、金500デナリを持参しましたので、ぜひお納め願いたいと存じます」

「そんなお金などいりません」

「ですが、権力府というものは、何事も只ではしてくれないものだ、心得ているものだから」

「それには及びません。あの嵐のとき、あなたが私を助けて親切にしてくださったばかりか、銀5セラを与えてくださった。今回のことは全てご安心ください。私が保証します。あの銀5セラは黄金500デナリにもまさるものでした」 こう言って、総督は反乱容疑で逮捕された者をバルカパラに引き渡し、無事に帰らせたのであった。

政治への信頼回復の道があるとすれば、民主主義の新生とか批判的市民の登場よりも、案外、リーダーのこうした日常の何気ない行動の積み上げなのではなかろうか。

～ Jubilee思想の本質 ～

汝は安息の年を7度、7年を7回数えよ。……第50年目を聖別して国内の自由を全住民に布告せよ。それは汝らにヨベルとなる。人はおのれの所領地に帰るべし。人はおのれの家族のもとに帰るべし。ヨベルは第50年目に汝らのためにある。汝ら種蒔くべからず。生え残りを刈り取るべからず。うらなりの葡萄を摘むべからず。ヨベルは即ち汝らに神聖なればなり。大地より生ぜし産物を食べるべし。
(旧約聖書「レビ記」25章8～12)

[最貧国への債権放棄700億ドル]

先年のケルン・サミットで重債務国36カ国に対し債務700億ドルを削減することが決定された。その背後には、「Jubilee2000」というキリスト教系団体やNGOなどが中心となって後進国の債務免除要求があったといわれている。

そのさい認定された最貧国36カ国に対する日本の負担は約3500億円前後に上ると見られている。小淵首相は「最貧国に対する日本の債権放棄は容易な決断ではなかった」と述べている。だが、大手銀行15行への公的資金注入7兆4500億円に比べると、その5%にも満たないわずかな額である。

NGOなどの団体がG7に対して最貧国への債務削減要求を掲げたのは、むしろ、こうした日本政府の日本企業に対する特別融資がヒントになったのかもしれない向きがある。圧力をかければ、少なくとも日本は債権放棄する。しかし、ただ債権放棄せよと言っても、根拠を問われる。そこで登場したのが、西暦2000年という節目を取り引き口実にしようという案であった。

[Jubilee]

一般に英語で Jubilee は、50年祝典、金婚式を意味する。この英語の Jubilee(ジュビリー)というのは、ヘブライ語の「ヨベル」の音訳である。ヨベルとは、古代イスラエルにおける50年毎の債務帳消しと土地の所有権回復制度のことである。これは50年目の到来を、羚羊の角で作った角笛(ユバル)を吹き鳴らして告知したことに由来する名称である。

これ以外に、古代イスラエルでは7年毎に「シェミター(放棄)」年といって、一般の債権抹消年の制度もあった。シェミター一年には、農地も休耕し、農耕用の家畜もこの1年間は農耕から解放された。すべての社会秩序をいったん自然状態に戻し、その上で新規再出発させようという狙いであった。

社会全体が農業に依存しており、農業生産物によって社会全体が生活できており、なおかつ1年以上の食糧備蓄がある場合は、休耕年も悪くない。それは土地の再生産力を回復させる。債務抹消された一般債務者は気分一新して生産活動へ再出発し、社会全体の生産力拡大の刺激となる。

社会経済の歪みを7年毎に一新させるだけでなく、50年目には土地所有権も原所有者に差し戻し、各部族・氏族ごとの土地境界線も本来の姿に戻そうという狙いであった。

[Jubilee思想の限界]

だが、じっさいに聖書時代に、50年毎に土地所有権回復が実施されていたかどうか疑わしい。いかに古代ユダヤが神権国家であったとしても、経済債務にとまなう個

人の所有権移転を、神の名において帳消しにすれば社会に混乱を招いたに相違ない。

なぜならば、シェミターでさえも経済の鈍化を招くために、厳格に7年放棄を徹底させることが難しかった。目前に債権抹消の年が迫ってくると、貧乏人が融資を必要としても、金持ちはだれも金を貸さなくなる。そこで、西暦紀元前1世紀に、ユダヤ教の賢哲ヒレルは、「プロズブル」という債権留保を考案した。シェミター年の布告前に債権を法廷に委託すれば、シェミター年終了後に債権回収できるシステムである。つまり、法廷委託という形で債権免除の混乱を回避することにした。

ジュビリー思想は、労働者や債務者を解放するのみならず、土地という根本的な生産手段をも全員に無償回復しようとする点で、きわめて社会主義的かつ革命的ニュアンスが濃い理想主義思想である。

だが、それは、「自然に帰れ」と叫んだルソーのように、出発点に戻りさえすれば、社会は理想状態を回復できるという点で、未来志向の理想主義ではなく、むしろ過去志向の理想主義なのである。

そこに、ジュビリー思想の落とし穴がある。過去の権利回復という理想を追求して成功した理想主義など無いのである。例えば、日本でも中世から近世にかけて徳政令というものが度々発令されている。債務帳消しや所領安堵という徳政令を出すたびに、かえって経済混乱が大きくなった。

過去志向の理想主義は何も社会経済の面ばかりではない。領土をめぐる国際紛争も基本は過去志向から始まっている。セルビアとコソボ、イスラエルとパレスチナ、北方領土をめぐる日本とロシア……。いずれも泥沼と混乱に突入している。

[貧者救済の条件]

貧者を救済するということは、対象が国家であれ個人であれ、はたまた企業であれ、相手が過去志向であるかぎり、救済は成功しない。貧者の生活意識改革を図らないかぎり、債務免除は失敗に終わるのである。

意識改革の第1は贅沢との断絶である。第2は不正蓄財との決別である。個人の場合も、企業の場合も、国家の場合も、贅沢と不正蓄財を退治しないかぎり、債務からの脱却は望めない。

試みに、重債務国の政治の清浄度をチェックしてみる必要がある。ミャンマー、ベトナム、ボリビア、ホンジュラス、コンゴ、ガーナ、ケニア、タンザニア、ザンビア……。これらの国々の政治家はODAを流用して私財を肥やしていないか。

重債務国リストにあがっていないフィリッピンやインドネシアの過去の指導者たちは日本などからのODAを利用しながら私腹を肥やしていった。他の重債務国にそうした逸脱がないかどうか、これは嚴重にチェックしておく必要がある。この悪習を根絶しないかぎり、貧困からの解放は難しい。NGOグループが債務免除と叫んだからといって、安易にそれを承認することには問題がありそうだ。

一方、西暦2000年だから債務免除せよと、突然要求しはじめた NPO 団体「Jubilee2000」の主張は理不尽である。西洋社会は西暦1000年に債務免除をしたのだろうか？あるいは西暦が100年上がる毎に、西洋諸国はヨーロッパ内の貧困層の救済をおこなってきたのだろうか？

これまでのヨーロッパの歴史では、債務超過になると戦争や略奪をしかけ、債権者を抹殺することによって解決してきたのではなかったか？その代表例が、ユダヤ人への言いがかりとユダヤ人追放であった。ユダヤ人の金持ちをゆすればいい。それが伝統的に西欧式債務解消方法だったのである。

[自由とは未来への社会責任である]

現実の社会の営みは未来に向かって進んでいる。未来に向かって建設的に理想を追求していく。そのさい困難があっても、問題は問題でない。自由とは、過去の束縛からの解放である以上に、未来へ向かっての自由の意味である。

上記聖書の「国内の自由を全住民に布告せよ」の「自由」は「ドロール」というヘブライ語である。これはじつに素晴らしい言葉である。ドロールの別名は「つばめ」なのである。ツバメのように、スイスイ自由に低空飛行も宙返りも出来ることが「自由」なのである。これは過去を回顧し、過去に執着している者には実現できない世界である。Jubilee とは、未来へ向かっての自由の宣言なのである。

自由な者は、明日を信じる。明日のことを思い煩わない。だからこそ、ときには一切の苦勞を忘れ、現在の生を感謝し、与えられたリフレッシュの「時」を聖別する。

その休息と息づきの時間の中では、あえて種子も蒔かず、取り残しをあくせくと刈り取らず、うらなりの葡萄を惜しんで摘み取ってしまうようなことはしない。それらを自分

よりもさらに貧しい人々が取るにまかせる。自分にはなお未来のあることを確信し、社会全体の秩序ある発展に寄与することを誓う。

社会全体の未来のために責任をもって自由闊達に行動する第一歩。それが Jubilee の意義であって、債務免除は、そのための環境作りでしかない。

G7など先進国による債務免除決定の結果、また50年待てば、つぎのジュビリーを期待できるとの甘えを助長しないよう、くれぐれも祈りたい。

～ 伸びる人の特徴 ～

ラビ・マッティヤ・ベン・ハラッシュは言う。「挨拶をすべての人に先んじてする者となれ。獅子たちの尾となれ。汝は狐たちの頭となるなかれ」
(ミシュナ「アボット編」 4 : 15)

[伸びる人と伸びない人]

世の中には、伸びて行く人と伸びて行かない人とがいる。どこが違うのか。

筆者はこれまでそういう点についてあまり考えたことがなかった。せいぜい、各自の素質のちがいに起因するのであろうとしか考えていなかった。しかし、よくよく周囲を観察してみると、素質があるのに伸びない者もおる。たいして素質があるようには見えないのに、ある時点からめきめき頭角を現わしはじめる者もいる。どうも素質だけの問題ではなさそうだ。

先日、ある研修機関のトップと話をしていた。いわく、「ダメな奴をどれだけ教えてもダメだ。ダメな奴は相手にしない」と。

効率を追求する研修という一方通行の場では、これも致し方ないのかもしれない。但し、出来る者だけを伸ばせばいいというのでは、あまりにも虫が好い。出来ないからこそ研修をし、教育もするのではないか。筆者はそう思って、率直にこの疑問を彼にぶつけてみた。

すると彼は少々ことばを補った。「ダメな奴というのは、学ぶ気がない奴のことです。学ぶ気がない奴には何を教えても無駄です」

たしかに学習意欲がない者をどれだけ教えても、教える側の徒労に終るのは明らかだ。たいてい企業の社員研修の場合、上から命じられてしぶしぶ研修に参加する。だ

から学ぶ意欲の少ない者が大半である。彼との会話はそこで打ち切った。研修というのは、通常まあ、そんなものであろう。

[教師の課題]

彼との会話の後、筆者には別の疑問が湧いた。なぜ学習意欲のない者に、意欲を湧かせようとししないのか。少なくともこれは教える者の務めではないか。

学習意欲の希薄な者でも、教える者に接することによって興味をもち、みずから学習に身を乗り出してくるようになると変わる場合もあるのではないか。

知識量の点で、教師は生徒よりも優っているかもしれない。しかしながら、教師に知識がたくさんあるからといって、生徒が集まってくるわけではない。知識だけを求めるのなら、図書館へ行けば済む。

教師が教師たるには、生徒から見て、人間的に魅力あるかどうかはまず問われる。生徒たちには、さまざまな価値観があろうから、だれから見ても魅力あるという完全最大公約数というわけにはいかないかもしれない。だが教師には、一定レベル以上の人間としての態度が要求される。

ワンパターンの研修内容をワンパターンに講義して、それでプロだと自負するのは研修屋にすぎない。

どのようにすれば学習意欲のない者に意欲を持たせるようにできるか。この課題にむかって努力することは教師たる者の務めの一部である。

同様に、部下全員が燃えることを目指して牽引する。それがリーダーたる者の任務である。

[反対派の存在意義]

しかしながら、教師やリーダーが示す方向に、全員一致で燃えて邁進するというのも異常である。それは新興宗教かファシズムのような危険性をはらむ。狂気と熱気は紙一重なのである。

リーダーが強ければ強いほどに、当然反発する者も現われる。約3300年前にイスラエルの民60万を率いてエジプト脱出の大偉業をなしとげたモーセに対しては、名門出身のコラなどが猛反発した。

教師がいかに偉大であっても、背く弟子も出てくる。キリストの弟子12人中、ナンバー2のユダが最後に彼を裏切った。いや、キリストといえども、生きて活動していたときはユダヤ人社会の異端児であった。かれの信奉者が多いといっても、彼が刑死するや、たちまち雲散霧消するほど少数であった。

孔子の人生もけっして大成功ではなかった。なるほど彼はまあまあの官僚として地方国家で出世するが、55歳で失脚して以来、晩年は不遇のうちに人生を終わった。彼の偉大さを認めていたのは、弟子たちだけであった。孔子の偉大さが世に広く知られるようになったのは、死後300年以上も経てからである。

つまり、教師やリーダーに周囲の人々全員が追随することは歓迎すべきことではないのだ。彼に反対する人々がいることは健全な現象なのである。

[無関心という問題]

いちばん不健全なのは、反対も賛成もしない無関心派がリーダーのもとにぶらさがっている場合である。かれらは意見を表明して波風を立てたくない。自分の周囲を無風にしておいて、とりあえず大過なく無事に毎日を過ごせればよいと思っている。かれらは余分な努力を払ってまで、仕事に励みたいとは思わない。さりとして、目立った失敗だけはしないようにと、この点では細心である。

企業においても、学校や大学においても、こういう無関心を装う型の集団がお荷物なのである。かれらは既得権益を守ることばかりで、生産性の向上や創造性の推進に熱心でない。そのため、長期間にわたって眺めると、かれらの生産性は給与等の向上に比例しなくなり、企業や社会の、全体の収益性を低下させる。やがて、物質的環境改善へのかれらの欲求と現実との乖離がひらき、心理的不満が増大する。

動機付けという点では、このグループの人々への動機付けがいちばん難しい。何故かといえば、これらの人々は意図的に進歩向上へ非協力的だからである。

無関心というのを、英語では「indifference」という。一般に形容詞で「indifferent」といえば、むしろ冷淡という意味で使われる。無関心は無感動であるが、冷淡は無感動ではない。冷淡は作意的無視である。

意図して冷淡な人々を意図して協力的に変えるのは、じつに容易でない。ここに、各種の風土改革の困難の大半の原因がある。如何にすれば、かれらを積極的で温かな気持ちに通う集団に変えられるのか。

[伸びる人の特徴]

20年にわたって企業の研修や教育の場で筆者が発見したひとつは、挨拶である。率先して挨拶する人、しない人がいる。伸びる人は、おおむね元気よく挨拶する。これは学歴の有無と関係ない。

そう言えば、わが家の近所でまるで挨拶しない人が2、3人いる。

近所だから向こうもこちらの顔を知らないはずはない。しかし、こちらが挨拶をしても、返事がかえってこない。道路ですれちがうとき、会釈しても会釈がかえってこない。そのうち、とうとうこちらも挨拶をしなくなった。

ああいう人は、会社や職場でどのような振る舞いをしているのだろうか。案外、上司におもねるのは得意かもしれない。だが、同僚や部下から信頼を得ているとは、とても思えない。

挨拶は、人と人とのふれあいを円滑にする。挨拶は、人と人とを近づける。人が伸びるのは、人と接し、人から学ぶからであって、本を読んだりビデオで学習するだけで、人の才能が伸びるわけではない。

元気よく挨拶をする人は、積極的に人に近づいてゆく。

そして無意識にというか、本人はあまり意識しないのだろうが、知らず知らずのうちに周囲や先輩からノウハウを吸収し、自分でも実践し、育っていく。

他方、挨拶を自分からしない人、挨拶の声に張りがない人は、どうも閉鎖的で、伸びが悪い。

[ラビ・マッティヤの知恵]

西暦2世紀、強大なローマ帝国の圧政に対する古代ユダヤ最後の反乱、バル・コフバの乱のさい、国民をよくまとめ、戦乱の時代に生き延びる方向を示した指導者のひとり、ラビ・マッティヤである。

彼は「挨拶をすべての人に先んじてする者となれ」と教えた。挨拶は、他人と平和であろうとする者が発する。そこには、戦乱よりも現実を選ぼうとする知恵がある。

彼はさらに続けた、「獅子たちの尾となれ。汝は狐たちの頭となるなかれ」と。

中国や日本では「鶏口となるとも牛後となるなかれ」という。この意味は、小さな村の長であるほうが、大きな軍隊の後につき従う小役人であるよりましだという意味である。たしかに、そのほうが、こじんまりと平穩で、かつ威張っておれるから気楽かもしれない。

ラビ・マッティヤのことばの意味は、上昇志向である。「獅子たち、狐たち」と複数形である点に注目してほしい。狐のような小動物の集団のトップにいて威張っていても、いつ襲われ殺されるかもしれない。それよりは、ライオンたちの群れの尻尾にくっついていくほうが、第一安全である。加えて、ライオンのように一流の人物や実力者たちから直接学んでいけば、やがて自分も一流の見識を身につけることができよう。それが、乱世を生き抜く知恵だと、ラビ・マッティヤは教えたのであった。

[今年のポイント]

以上の事柄から考えるに、今年は、あらためて挨拶運動をもっと積極的に進めたいと思う。さらに、実験ではあるが、挨拶をしっかりと身につけている人々に的をしぼって教育を工夫していかねばと考えている。

教師ひとりの力など、どのみち限界が知れている。それよりも皆がおたがいに元気よく挨拶をし、元気よく切磋琢磨するように仕向けるほうが、ずっと皆の進歩に役立つ。

盲人とたいまつ

ラビ・ヨセは言った。「あるとき、私は真っ暗な夜道を歩いていた。すると、ひとりの盲人が手に松明を持って道を歩いてくるのに遭遇した。私は彼に言った『きみ、なぜ松明を持って歩くのか』と。盲人は『私が手に松明を持っている間はいつでも、人々は私を見て、私を溝や茨から救ってくれるのです』と答えてくれたのです」

(タルムード、メギラ篇 24b)

旧約聖書の申命記に「盲人が暗闇で手探りする如く、あなたは真昼に手探りするようになる」(28:29)という一節がある。これは、もし正しい道を踏み外すならば、神はあなたを失明させ、真昼に手探りで歩かねばならなくさせるという意味である。

だが、ラビ・ヨセはこの前半の句に疑問を感じた。原文が上記の意味を伝えるものであれば、「暗闇で手探りする如く、あなたは真昼に手探りするようになる」で十分だ。「盲人が暗闇に手探りする」という表現は、手探りの様子を強調するつもりであろうが、論理的矛盾に思えた。盲人にとって、いったい昼と夜の違いは何だろうか。どのみち見えないのだから、光と闇に差異はないのではないか。

こういう問題意識を抱いていた時に、たまたま暗夜にひとりの盲人が松明をかざして歩いているのに出会った。盲人の答えは「たいまつを持っているから、人々が私を盲人だと気付いて手引してくれるのだ」であった。彼自身の世界は無明であっても、松明があるおかげで、人々の助けを得、手探りする手間が軽減されるわけである。

このラビ・ヨセの挿話は、私がアブラハム・ヘシェル教授から聞いた話を思い起こさせる。ヘシェル先生によれば、18～19世紀の東欧のユダヤ人の間の、貧しく家財道具もろくになく、なおかつ学問の余裕もない家庭でも、ほとんど例外なくトーラーやタルムードを所蔵していたという。家に聖典が置いてあれば、学者を安息日の賓客に迎えて、僅かでも知恵のことばを聞かしてもらえる。実際、貧乏人が安息日の食事に招けるのは、これまた貧乏な学生だった。それでも、彼等はよろこんで学生を招き、知恵や教養の一端の一端に耳を傾けられる機会があることを感謝したのだった。

いや、みずから学問と知識があると思っている者の知識も学問も、神の目には、所詮、盲人の松明に等しいものと映るであろう。つまるところ、聖典を所蔵し、知識を積み重ねるといのは、神の手引を受けるために決して無用ではないのだ。

ユダヤ教法廷と裁判の仕方

ユダヤ教には全員一致はある。但し...

金銭(で解決できる刑事及び民事)裁判は三人の法官で審理する。(死刑に関わる)人命裁判は、(法官)二十三人で審理する。... 金銭裁判は、無罪であれ有罪であれ

一票差で判決となる。人命裁判は一票差で無罪の判決が下されるが、有罪判決は二票差が必要である。…金銭裁判においては、(法官の前に座る司法研修生も含めて)全員が(被告の)有罪や無罪を論述してよい。人命裁判においては、全員が無罪を論述してよいが、全員が有罪を論述してはならない。(ミシュナ「サンヘドリン篇」4:1)

イザヤ・ベンダサン以来、ユダヤでは全員一致は無効だという風説が日本人のあいだでは広まった。ベンダサンは、主体的に物事を考えようとする日本人のワンパターン性を批判するために、ユダヤ全員一致論をもちだした。

だが、ユダヤには全員一致は無効だという思想はない。物事は一票差以上の多数決で決定する。当然、全員一致があってもかまわないわけである

唯一の例外は、上記のミシュナ規定に見るとおり、死刑相当の罪(神への冒瀆、偶像崇拜、殺人、尊属冒瀆、姦淫、不純性交等)の容疑者の裁判における有罪の論告や票決であった。

審理段階で、被告を無罪だと弁護する意見ならば、判事席につらなる司法研修生も含めて全員が、それぞれの弁護論を論述してよいのだった。しかし、被告を有罪だと糾弾する意見を、司法研修生がのべることは禁じられていた。これを素材にして、ベンダサンは全員一致無効論をでっちあげたのである。

事実は、「全員が有罪を論述してはならない」である。

もし司法研修生が被告を有罪だと考えても、その場合は、審理の間中、黙って先任の法官たちの議論を聞き、最後の票決で黒白いずれかの判断だけを示すようになっていた。研修生に有罪動議の発言を禁じたのは、安易に人の処刑を論じさせないためであった。

非難や糾弾は誰にでもできる。被告の弁護となると、これは容易でない。だからこそ、被告の生命を救うための無罪立証の論述ならば、正式の判事資格のない研修生にも積極的に発言をうながしたのであった。

判事全員が被告の無罪を主張することはかまわない。

善のためには全員一致して発言し、行動する。他人の生命を危うくすることに関しては、慎重に事実を検証し、全員一致に与しない。これはユダヤ教の法思想の基盤の一つだ。

(タルムードの人事論)

本来の大祭司が職務に戻ると、暫定の者は大祭司にも並みの祭司にも望ましくない。(メギラ
篇 9b)

組織における人事管理はつねに問題が多い。理論通りの理想的な人事配置というものは、まず有り得ない。一応、各種の適性検査結果や人事考課資料も参考にはなるが、データは個人の内面の資質や可能性の全てを物語っているわけでない。さまざまな管理手法や心理学的理論を駆使しても、成員各自の文化的特性を画一化し、ユートピア的管理社会を実現することは不可能に近い。最終的には成員の協力を得ながら、現場の経験と、経験から生じる洞察とによって人事配置を決めていくのが、一番安全である。

タルムードの各所に紹介されている人間関係に関する意見は、幾世代にもわたる人間観察の洞察から出たものだ。例えば、上記の裁定は、何らかの理由で職務を離れていた大祭司が復職した場合、彼の代わりに大祭司職に任命されていた者の処遇をどうするかという問題である。大祭司職は王に比肩する最高の地位だ。したがって、かりに暫定的とはいえこの最高の地位に就任した者であるならば、通常はその後も栄誉ある地位を、例えば、祭司職に任じて、優遇すべきだと思われる。

ところが、タルムードはそういう配慮を無用だとする。第1の理由は、大祭司のそばに暫定的に大祭司を勤めた者を配置すると、相互に嫉妬や敵愾心をいだくおそれがある望ましくない。第2に、聖なるものを任用し、これを引き下ろさないという原則に照らせば、神聖な本来の大祭司を用いるべきである。そうすると、神聖さの劣る普通の祭司がそこに併存する意味はなくなる。したがって、臨時に大祭司を勤めた者は、いずれにせよ祭儀の場から全面的に排除されねばならないと、タルムードは考える。

ラビたちがここで問題視しているのは、資格ではない。なぜなら、大祭司は祭司の家系(コーヘン)の者から選ばれるから、無資格者は初めから対象外である。但し、有資格者どうしを天秤にかけるときは、神聖さという人格的・質的条件が選考基準にな

ることは認めている。だが、最も大きな問題は、かりに2人を大祭司、祭司と同じ職場に配置したら、早晚、両者の間に主導権や地位の確保をめぐる、人間的確執が生じるであろうという懸念である。組織を円滑に維持するためには、能力の是非もさることながら、メンバー間の摩擦となり得る人間関係の不安要因を事前に除去することがポイントなのである。

何時からシェマーの祈りを夕方は唱えるのか。 (ベラホット篇1:1)

日本人は世界で最も時間にうるさい民族である。列車は1分を違えずに運行している。5分も遅れると、さっそく遅延のお詫びである。列車が5分や15分遅れたからといって、それによって重大な支障に直面する人が、乗客の間にどれだけいるだろうか。

大企業のトップや大臣のように超多忙の人の車が渋滞に巻き込まれて遅れたりして、誰かが責任を問われたという話は聞いたことがない。どんなに予定が立て混んでいても、どこかに調整可能な余裕はある。それに当人が病気にでもなったら、どんなに過密なスケジュールを立てていても、全てご破算になってしまう。所詮、予定は未定にして決定ではない。予定を守ってくれないのも困るが、分刻みで予定時間にうるさ過ぎるのも考えものだ。要は、各自が余裕ある計画を立てることである。

もっとも、日本人の時間に対するうるささは、公的もしくは対外的な時間の区切りのつけ方に関してであって、私的な時間はルーズである。例えば、会社でうるさいのは出退時間の管理だけである。会議の開始が遅れるのも、つい仲間意識で参加するからだ。定時を過ぎても延々と残業をしているのは、あれが私的時間での作業だからである。

ユダヤ人も時間に神経質である。ただし、ポイントの置き方が日本人とちがう。時間に厳格なのは、おもにシャバット(安息日)の始まりと終了の時刻だけである。安息日には一切の労働が禁止されているから、まず金曜日の日没迄に全ての仕事を終了させなければならない。それは締切まぎわの慌ただしさである。安息日が終了すれば、戒律の束縛を離れて伸び伸びとできるから、こちらは解放への期待がつのる時刻である。これ以外は、概して私的・公的を問わず時間の区切りは大雑把である。

しかし、所定の時間内に何をするか、時間をどう活用するかについては、かれらの方がうるさい。毎日の生活の中には、絶対に実行しなければならない行為がある。そういう行為は、タイムリミットを設けてでも遵守すべきだとユダヤ教では考える。その代表例が、シェマーの祈りである。「聞け(シェマー)、イスラエルよ」に始まる祈りを夕に朝に唱えることは、神への告白であると同時に、神からの語りかけでもある。これは神のまえに自己点検をする実存的な時間である。膨大なタルムードの冒頭を飾るベラホット篇の、そのまた最初の議論が、こういう根源的な行為のための時間についての議論で始まっているあたりに、ユダヤ人の知的創造の原点を見る思いがする。

すべてイスラエルの民の一人のいのちを生かす者は、さながら全世界を生かすものなり。

(サンヘドリン篇 4:5)

いつぞや、スピルバーグ監督の映画作品『シンドラーのリスト』を観に行った。

映画の冒頭の、ユダヤ教礼拝シーンで聞こえてきた、追悼の祈り・カディツシュの悲哀にみちた祷告の調べが、いまでも耳朶にひびく。あの祈りの旋律を聞いていると、物語の舞台・ポーランドのクラコフ市のユダヤ人街が甦ってきそうに思えた。

戦争に名を借りてユダヤ人迫害を展開したナチスの残虐な光景の数々を、あえて白黒映画で撮影している。それは、日本の黒沢監督が『七人の侍』や『用心棒』『生きる』などの名作において駆使した問題提起の手法と同じである。黒沢と同様に、スピルバーグも淡々と事件の展開を描写した。

ただし、所々、やや舌足らずの説明シーンがあり、部分的にストーリーの展開を難解にしていた。

例えば、クラコフのユダヤ人居住区を包囲襲撃した場面だ。あれはユダヤ人が労働も抵抗もしない安息日の情景に始まるが、ユダヤ人以外の観客には、画面だけではそれは分からない。

最後にユダヤ人たちが、シンドラーに贈る指輪を作るために、仲間の口から歯の金冠を抜く場面もちょっと説明不足だ。あのへんは、原作を読んでいても、映画では見落としてしまう。もう少し丁寧にコマ送りをすれば良かった。

ところで、その指輪に刻まれた「一人のいのちを救うことは全世界を救うことだ」という一句は、原文のヘブライ語でどう言うのか。それはタルムードのどこに書いてあるのか。と、いろいろな人から質問される。

出典は、タルムードの中核を構成しているミシュナ・サンヘドリン篇5章4段である。原文は、

「すべて一人のイスラエルの民のいのちを滅ぼす者は、さながら全世界を滅ぼすものなり。またイスラエルの一人のいのちを生かす者は、さながら全世界を生かすものなり」である。

類似の表現としては、「すべてイスラエルの民を援助する者は、さながら神を援助するが如し」という句もある。ここでいう《イスラエルの民》とは、神に選ばれた民という自意識過剰なユダヤ人の意味ではない。社会的弱者の一例としてのユダヤ人の意味である。

すなわち、いつの時代でも、虐げられている者や弱い者に心から支援の手を差し伸べる

ことは、全世界を救い、神を助ける行為なのである。

そこに慈善の原点があるのだ。

もし邪な者を見ても、時が彼に微笑んでいるならば、彼を挑発してはならない。
(メギラ篇 6b)

先年、ヘブロンでユダヤ人の狂信家ゴールドスティンが、礼拝中の大勢のイスラム教徒を機関銃で狙撃する事件が起きたことがあった。あの事件を考えた場合、ゴールドスティンは「悪人＝懲罰さるべし、パレスチナ人＝悪人、ゆえに、パレスチナ人＝懲罰さるべき也」と判断したのであろう。

この判断は前提がそもそも不備であったために、彼は幾重にも過ちを重ねる結果となった。まず、パレスチナ人をすべて悪人であると決め付けるユダヤ教過激派の信条に過ちがあった。確かにパレスチナ人はユダヤ人のヘブロン入植に反対している。だが、それだけでパレスチナ人を悪人とみなす根拠にはならない。それどころか、ユ

ダヤ人の祖先アブラハム、イサク、ヤコブの墓所は、彼等パレスチナ人の手によって維持供養されてきた。もしゴールドスティンが敬虔なユダヤ教徒であるのならば、むしろ、パレスチナ人に感謝の意を表すべきであった。銃口を向けるなど、まさしく埒外の行為ではないか。

第二に、仮に相手が悪人だとしても、こちらがその悪行に立腹し相手に対抗したり、たしなめるつもりでも、相手を怒らせる行為に出てよいかという問題がある。ユダヤ教の律法集タルムードは、むしろこの問題を重視して、色々な角度から議論を展開している。

その場合のユダヤ教の基本的な姿勢は、たとえ相手が悪人といえども、時の運が彼に臨んでいるならば、無用な摩擦を起こさないことだと教えている。そればかりか、悪人と対抗したり、悪人の成功を妬んだりするのは、畢竟、悪人と同じような生活をしたいからに外ならないからだ、善人の心に潜む深層動機の不純を戒めている。

では、ユダヤ教はまったく悪の存在に対して傍観主義なのかといえば、そうではない。トーラー(真理)を堅持するためには、悪に敢然と立ち向かうべきであると宣言する。だが、善人と悪人の力が拮抗している程度だと、悪人に呑み込まれてしまう危険性が高い。だから中途半端な善人に対する現実的アドバイスとして、あえて悪を傍観せよと助言する。

悪を本当に制圧できるのは完全な義人だけであるとユダヤ教は教える。換言すれば、まったく罪を犯したこともない完全な義人以外は、誰も他人の悪を暴き、それを罪に定める資格はないわけである。この思想の一つの表現こそは、姦淫の現場から拉致されてきた女の裁判に関して、「罪なき者から石打ちを始めよ」と教えたキリストの一句である。

そしてキリスト教にせよ、ユダヤ教にせよ、我々小人に対しては、まず悪への参加を慎み、弱者をいたわり、みずからの身を浄化することが世界再建への道だと教えている。

取引と天の助け

取引にさいしての助けは天から来る。トーラーの教えに関しては、そうは言えないが、その研鑽探究の行為に関しては、そうだ。まして学説を立てる事となると、まさしく天からの助けで出来ることだ。(タルムード、メギラ篇 6b)

ユダヤ人は幸運を期待するが、ユダヤ教は幸運を信じない。物事の成功は、個人がどれだけひた向きに努力をしてきたかに負うのであって、僥倖で得られるものではない、というのがユダヤ教の立場である。これは、アダムとイブがエデンの楽園から追放されて以来ずっと続いている現実である。もし人が神に救済を求めるのであれば、その場合、彼の救済を正当なものとするだけの根拠を呈示しなければならない。これが聖書的な人間と神との関係なのである。

そうは言うものの、これはユダヤ教において神の側からの一方的な恩寵によって個人が罪の現実から救われるという宗教的次元を否定するものではない。いや、それどころか、神はつねに人間を救おうとしているとさえユダヤ教は宣言する。

人間の不幸は、それを人が拒絶するところに発生するのだ。悔悟、懺悔、更生を伴わないで神に回帰しても救いが永続しないからである。

ところで、神と人間との関係を超えて、第三の要因を巻き込む世界となると、これは天佑の介在が必要となる。まず事業での成功がそうだ。取引の危険を克服し、なおかつ取引相手にも利を与え、しかも自分も利益を上げるとなると、独力で調整できるものではない。ということは、天佑を引き出せる人格の人でなければ真に事業で成功はできない。だからユダヤ人の商人は、アブラハムやヨブのような人格者を理想におくわけである。

同様に、答がまだ分かっていない道なき世界を歩むさいにも神助は必要だ。例えば、聖書(トーラー)の教えは先生から学べるが、その意味を自分で掘下げるには、神の知恵が必要である。

まして謂わんや、タルムードの法解釈上で新しい解釈や学説を樹立するような作業は、天来の靈感がなければ着想さえ困難なのである。

だが、靈感が与えられる前提として、本人が敬虔かつ謙虚に真理を探究しているか否かが吟味されることは言うまでもない。

トーラーを学ぶ意義

個人のトーラーの名誉は、個人のトーラー研究にまさって重みがある。(メギラ篇 3b)

ユダヤ教は律法の宗教といわれる。それは、宗教法の体系がタルムードという一つの法典にまとめられ整備されているからだ。

そのユダヤ教が重要視するのは、律法を遵守するという行為以上に、律法の意味と精神をどこまで窮めるかなのである。その証拠に、タルムード(学問)も、トーラー(教え)も動詞の未来形が転じた名詞である。ここでは、どこまでも当事者の主体的意欲が問われている。それは同じ動詞の過去形から派生した名詞リムツド(学科)、ホラアー(指導)が、ある種の標準を念頭においているのと対照的だ。

タルムードのメギラ篇は、聖書が朗読される時、人々は神への神聖な儀式を中断してでも、また聖書の研究をも中断して、これを傾聴すべきだと命じる。なぜなら、聖書の朗読を聞くことは、本質的には、神の声を聞くことだからである。

では、聖書の研究と儀式の執行とを比較した場合、どちらが重要かといえば、これは聖書の研究だ。但し、それは儀式を放棄してでも聖書研究せよということではない。問われていることは、行為自体の重みだ。儀式など外部から強制される結果重視の行為は、これを怠っても、命令者に懺悔するとか、次に二倍に実行するなどして償う方法がある。だが

、聖書研究は他人から命令されて出来る行為ではない。学ぼうとする主体的意思がなければ成立し得ない行為であり、結果よりも動機が重視される。

学問というものは、良き動機の人にして初めて達成出来ることなのだ。そして学者としての学識の名誉は、日々のトーラー研究の蓄積の結果としてのみ得られるものである。それゆえ、高名な学者の死にさいしては、祭りの喜びを捨ててでも、その学殖が地上から失われたことへの哀悼を表すべしとタルムード・メギラ篇は命じている。

[タルムード研究] 人間の尊厳

大いなるかな、人類の尊厳！

そは、トーラーが「汝なすべからず」と命ずる掟をも拒絶し能う也。(メギラ篇 3b)

聖書には不可解な記事が少なからずある。例えば、民数記6章7節である。

「潔齋中はすべて死体に近づいてはならない。父母のため、兄弟のため、姉妹のためでも、彼等の死に立ち会って身を穢してはならない。その頭に神の潔齋のしるしがあるからである」

この箇所は、神に願をかけて聖別潔齋中の者(ナジル者)に関する掟を述べている。

それにしても、いかに神に願をかけているからといって、その近親者の弔いに参列することも認めないというのでは、律法はあまりに無慈悲ではないか。

この規定を敷衍すると、終生神に仕えている祭司は、肉親の埋葬にも参加できないことになる。それは、十戒の「汝の父母を敬え」という大命令と矛盾する行為にもなる。

この点でタルムードは、神に誓願し潔齋中の人であっても、その近親者の埋葬ならば立ち会っても穢れないと裁定している。「聖書にいわく、『その姉妹のために』と。即ち、姉妹のためならば穢れないが、死者の埋葬のためならば穢れるのである」。

つまり、死者を「死者」という穢れた個体と考えて関わるのであれば穢れるが、「近親者」という尊厳ある人格として遇することを優先している場合は、死の穢れも及ばないわけだ。

この議論の少し前の箇所でタルムードは、もしある人が突然亡くなって、彼を埋葬する人がいない場合は、聖なる律法の勉強を中断してでも、その人を葬れと命じている。そのさいも、上記の民数記6節が埋葬への協力の許可の根拠になっている。

ということは、ラビたちは、日本語訳聖書のように文脈を読んでいない。

ラビたちの理解に従って民数記のヘブライ語原文を翻訳すると、

「潔齋中はすべて死体に近づいてはならない。(但し)父母のため、兄弟のため、姉妹のためには、彼等の死に立ち会っても身を穢さない。その頭に神の王冠があるからである」

となる。

父母とは、生命を分けあつた者。兄弟とは、建設を共にする者。姉妹とは愛を傾けあつた者の意味である。たとえ他人であっても、その人格や遺徳を偲び、生命や愛や創造の共感を認めることができるならば、その他人はすでにあなたの肉親に等しいのだ。

そして、人格ある者への尊敬や尊厳を優先する人には、聖書に記載されている禁止事項さえも保留される。なぜなら、個人の尊厳を真剣に認めることができるというのは、じつは、神の権威をおのれの頭上に認知する人にして初めて可能なことだからである。

[タルムード研究] トーラーの意義

個人のトーラーの名誉は、個人のトーラー研究にまさって重みがある。

(メギラ篇 3b)

ユダヤ教は律法の宗教といわれる。それは、宗教法の体系がタルムードという一つの法典にまとめられ整備されているからだ。

そのユダヤ教が重要視するのは、律法を遵守するという行為以上に、律法の意味と精神をどこまで窮めるかなのである。その証拠に、タルムード(学問)も、トーラー(教え)も動詞の未来形が転じた名詞である。ここでは、どこまでも当事者の主体的意欲が問われている。それは同じ動詞の過去形から派生した名詞リムツド(学科)、ホラアー(指導)が、ある種の標準を念頭においているのと対照的だ。

タルムード・メギラ篇は、聖書が朗読される時、人々は神への神聖な儀式を中断してでも、また聖書の研究をも中断して、これを傾聴すべきだと命じる。なぜなら、聖書の朗読を聞くことは、本質的には、神の声を聞くことだからである。

では、聖書の研究と儀式の執行とを比較した場合、どちらが重要かといえば、これは聖書の研究だ。但し、それは儀式を放棄してでも聖書研究せよということではない。

問われていることは、行為自体の重みだ。儀式など外部から強制される結果重視の行為は、これを怠っても、命令者に懺悔するとか、次に二倍に実行するなどして償う方法がある。だが

、聖書研究は他人から命令されて出来る行為ではない。学ぼうとする主体的意思がなければ成立し得ない行為であり、結果よりも動機が重視される。

学問というものは、良き動機の人にして初めて達成出来ることなのだ。そして学者としての学識の名誉は、日々のトラー研究の蓄積の結果としてのみ得られるものである。それゆえ、高名な学者の死にさいしては、祭りの喜びを捨てても、その学殖が地上から失われたことへの哀悼を表すべしとタルムード・メギラ篇は命じている。

[タルムード研究] 悪霊払いの呪文

物の怪に襲われたら「屠殺場の山羊は私よりも肥っている」と唱えよ。(メギラ篇 3a)

ユダヤ教は、その日常性においてきわめて合理主義的色彩が濃い。しかしながら、それは社会生活における倫理や契約といった対人行為の面であって、個人の宗教的内面の部分ではつねに神秘主義の深淵に直面している。見えざる神にむかって「汝よ」と呼びかける瞬間から、その神秘界のヴェールがひらき、有限な人間と無限な神との対話がはじまる。

ところで、ユダヤ教は一神教だから、神エホバと人間とだけが霊的交流をすることしか認めないのかといえば、さにあらずだ。そこには神と人間との邂逅を妨害する物の怪や、人間をとりこにしようとする悪霊も出現する。

ユダヤ教の就寝前の祈りでは、悪霊に襲われるのを防ぐために、「神よ、我らの前後よりサタンを除き、汝の翼のかげに我らをかかまいたまえ」と祈る。ふつうのときに悪霊に襲われると、「シエマの祈り(シエマー、イスラエール、アドナーイ・エロヘーヌー、アドナーイ・エーハッド!)」を唱えるのが、もっとも有効だとされている。

悪霊に襲われるのは、穢れた場所や物にふれるからだ。穢れの中にひそむ悪霊がじぶんの解放と浄化をねがって人にとりつくのだと、ユダヤ教では考える。シエマの祈りは人を悪霊から保護するばかりか、悪霊を救済する力もある。

とっさにシエマの祈りを思い出せない時は、「屠殺場の山羊のほうが私よりも肥っている。そちらににとり憑け」と唱えよと、タルムードは命じる。

これは、キリストが狂人から悪霊を追出して豚にとり憑かせた記事を思いだせる。キリスト教とユダヤ教とでは、ずいぶん異なる点も多いが、少なくとも新約聖書は大部分がユダヤ教の風土の中の産物なのだ。

[タルムード研究]

天の声が叫んだ、「わが秘密を人にあらわにしたものはだれか」 (メギラ篇3 a)

日本では「天の声」という言葉をよく使う。とくに特命入札などのさいに「天の声があったから」などと言う。建設業界などで落札業者を指名することを、天の声と業界では呼ぶ。

これほど天を冒瀆することが他にあるか。天の思想は、もともと儒教の考え方だ。こういう用語が平気で使われているのを見ると、日本人が本当に儒教精神を理解しているのかと、疑問に思う。

タルムードでいう「天の声」は、原文では「バット・コール(こだま)」である。こだまは、こちらから音声を発してみないかぎり反応してこない声だ。

つまり、人間と神との対話は、人間のがわに問題意識があるかどうか先決なのだ。神は人間の苦悩にたいしては、直接救いの行動で対応する。苦悩は解消させればよいのだから、神の無言の行動でもいい。だが、人間の疑問にたいしては、こだまで答えをしめす。疑問にはロゴスによる解答が必要だからだ。

ところで、もし人が、じぶんが発見した奥義を大衆に公開すべきかどうか煩悶することに直面するならば、かれは、それを世界のために公開すべきなのだ。なぜならば、

奥義を公開すべきかどうかは、じつはかれの良心の疑問であり、良心の命令にほかならない。

逆説的な解釈をすると、天の声、それは人の良心なのである。

SIGNBOARD

ゆうろう詩集

[\[フロントページへ戻る\]](#)

[手島佑郎]

[サムエル・ウルマンの詩集より /6]

GOALS

by Samuel Ullman

終着地

サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

悲しみの歌は語られざることばにあり、

しかして見えざる涙と聞こえざる嘆きとに、

おそらくは破れし心のこだまにほかならむ。

死は終りなき眠りのなかにて全てを終らすや？

人生は勝負事なるや、われらはその質種(しちぐさ)なるや？

もろもろの天球の奏でる調べは

われらが夜明けに聞く葬送の鐘の音なるや？

いづ方にあるやわれらの終着地？

われら理解できずして人生に來り、

しかしてわれら意志にそむいて出で、

われらその持ち分をはげみ、でき得る最善をつくし、

われらはただの嘆息(ためいき)、ただのすすり泣き、ただの震えにすぎじ。

われら相應の家をはなれ、

より輝ける家に入るべし、

しかしてわれらは聖なる終着地を見い出すなり、

われら無限の御方のもとに到達せしときに。

There is a threnody in words unspoken,

And tears unseen and sighs unheard,

Maybe but echoes of a heart that's broken.

Does death end all in endless sleep?

Is life a game and we the pawn?

And is the symphony of Spheres

A tolling dirge we hear at Dawn?

Where is our goal?

We come to life without our ken,

And we go out against our will,

We act our part, as best we can,

We are a sigh, a sob, a thrill.
We leave a likely house of life,
To enter one with brighter light,
And we shall find our sacred goal
When we have reached the Infinite.

[サムエル・ウルマンの詩集より 15]

A SONG OF PRAISE AND FAITH

by Samuel Ullman

賛美と信仰のうた

サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

おお、幸いなるかな四月よ！ 雨の月よ
この月こそは我に日の光を与えり、---
丸二十年を四倍せし昔に、--- いま我は祈る
かの卯月の雨がわれに花をもたらさんことを
色とりどりの花をわがすべての時間のためにと。
この月よ、入り江に潮待つわが心を強めよ、
疑いに影をなげかけ、土くれの思いにふけるを。
我はこの旅路を信仰をもちて前に進むものぞ、
わが錨は上がりたり。わがもろもろの帆は張られたり。

O Blessed April! Month of showers,

The month that gave me light of day,---
Full four-score years ago, ----- and now I pray
That April rains will bring me flowers
Of many hues for all my hours; -----
Strengthen my heart to hold at bay
Shadowing doubts, and thoughts of clay,
I start my journey with Faith ahead,
My anchor is raised, my sails are spread.

[サムエル・ウルマンの詩集より /4]

A TRIED REMEDY by Samuel Ullman

試験済みの処方

サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

きみよ 朝(あした)に起きるとき、
来る一日を始めるに、
この処方を試ませ きっと幸せ、
かならず お役に立ちますぞ。

When you arise in the morning,

To start the coming day,
Try this recipe for hapiness,
I am sure that it will pay.

まずは始めよ 微笑(ほほえみ)ひとつ、
微笑(えみ)をこぼせ きみの口もと目もとから、
そして捧げよ 元気に おはよう、
これ 君を幸せに、いや賢くもするものぞ。
やさしき一言(ひとこと) 挨拶(かわすことば)に彩(いろ)を添ゆ、
肩だきあえよ この日 楽しくなるものぞ、
ちょっと役立つ行ないが 軽ろやかにする
どこかにひそむ滅入る気分を！
やわらかき言の葉こそ 外見を輝かすものぞ
明快で薔薇色の色あいに。
笑い声こそは 暗き影をうすむる
きみを落胆させんと窺うものありとても。

First of all begin with a smile,
That starts from your mouth and eyes,
Then offer a cheery good morning,
'Twill make you happy and wise.

A kind word will flavor your greeting,
A caress will sweeten the day,
A helpful deed will lighten
The gloom that lurks by the way!
Soft words will brighten the outlook
With a clear and rosy hue,
A laugh will lessen the shadows
That seek to dishearten you.

いざ、とくこの処方を行ないてみよ、
いとも簡単 しかもたやすい、われ言う、
されば 君は 蒔きしものを 豊かに収穫すべし、
されば 必ずやより明るけき一日とならん。

Come, follow this recipe closely,
It's simple and easy, I say,
And you will reap richly your sowing,
And be sure of a brighter day.

さあ 今、試みるべし すこし笑い声をあげ、
握手し そして微笑むべし、

きみは もはや天国をほとんど必要とせじ
もし これをいちど 試してみたらば。

Come now, try a bit of laughter,
A hand shake and smile,
You'll need little more hereafter,
If you try this once in a while.

[サムエル・ウルマンの詩集より /3]

DUST TO DUST by Samuel Ullman

塵より塵へ返る サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

すべてのものは 我らが周囲で死につきて述ぶ。されど
歓楽のさざめきは 虚ろなる心を膨らませ、思慮なき目より飛び出づ。
あたかも 死すべからざるものと創造されし如く
とこしえの住まいを地上に所有せるが如くに---

All things around us preach of death, yet mirth
Swells the vain heart, darts from careless eye,
As if it were created ne'er to die,
And have an everlasting home on earth --

すべてのものは 我らが周囲で死につきて教う。樹々の葉は
森より落葉す。然り、すべての花も死す。

然り、日もまた短く、その陽光は時に時を重ねるのみ。

而して 荒涼たる裸の畑地の上を 猛々しき風の吠ゆるぞ---

All things around us teach of death; the leaves

Drop from the forest; so die all flowers,

So shortens day, its sunlight hours on hours:

And o'er bleak naked fields the wild wind grieves --

すべてのものは 死につきて宣教す。我ら生まれたるは死ぬためなり。

我らは わずかに人生の海原に運ばるる波なり。

時間は我らに供与されし短かき猶予なり、

刻々日々を費やすとも、賢く試すべしと---

All things preach of death; we are born for dying,

We are but waves along life's ocean driven;

Time is to us a brief probation given

To spend each hour and day, in wisely trying --

我らを 有るべきもの に相応しくあらしめよ、

その偉大なる終りを、我ら永遠と呼ぶなり。

To fit us for what is to be,
For that great end, we call Eternity.

[サムエル・ウルマンの詩集より /2]

YOU AND I by Samuel Ullman

汝と我 サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

もしわれ汝を知り 汝われを知らば
もし我らふたり清明(さや)かに会いまみえ
汝の心とわが心との憧るることを
内なる光もて見抜くならば
われ確信す 我らはさほど違(たが)わざることを
我ら友情のうちに手を握るべし
我らの思いは まさしくその時にこそ一致すべし
もしわれ汝を知り 汝われを知らば。

If I knew you and you knew me,

If both of us could clearly see,

And with an inner light divine
The longings of your heart and mine,
I'm sure that we would differ less,
We'd clasp our hands in friendliness,
Our thoughts would surely then agree,
If I knew you and you knew me.

[サムエル・ウルマンの詩集より /1]

VALENTINES ON LIFE'S HIGHWAY **by Samuel Ullman**

人生途上の恋文

サムエル・ウルマン 詩 (てしま・ゆうろう訳)

われ 荊(いばら)なき人生を求めじ
もろもろの悲しみより解き放たるるをも
あるいは常に太陽の照り輝くをも
はたまた常夏の海をも。

I would not ask for a thornless life,

From every sorrow free,

Or for a constant sunshine,

Or for a summer's sea.

なとなれば 大地の緑は

しぼみ かつ朽つるなり

絶え間なき陽光(ひ)のもとにても

はたまた とこしえの昼のもとにても。

For as the verdure of the earth,

Would wither and decay,

Beneath a constant sunshine

Or a perpetual day;

然り 心の深き小部屋もまた

年ふるにつれ

希望のもろもろの若芽をめぶかすを 止むべし

もし涙によりて水を得ざれば。

So the deep chamber of the heart,

Throughout the years,

Would cease to yield the buds of hope,

If watered not by tears,

手のとどく中に横たわれる 数多(あまた)のこと

人生のもろもろの畑を

もし聡明に耕せば

豊かなる刈り取りを 生むものぞ

There's much that lies within the reach,

Of life in every field;

Which if intelligently tilled,

Will a rich harvest yield.

「 青 春 」

サムエル・ウルマン (訳・手島佑郎)

Youth

by Samuel Ullman

青春というのは生のひとときに非ず、

そは心のさまなり。

そは薔薇色の頬、くれないの唇、

しなやかな膝をそなえたることには非ず、

青春とは意志のあるやなきや、

想像力の質、喜怒哀楽のたくましさなり。

そはいのちの深き泉の清冽なるさまなり。

Youth is not a time of life;

It is a state of mind;

It is not a matter of rosy cheeks, red lips and supple knees;

It is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions;

It is the freshness of the deep spring of life.

青春とは怯懦に克ち、

興味に向かう勇気の気性横溢せるの意なり、

安逸を貪ぼる心を越えて冒険する勇気なり。

是れしばしば齡二十の若者よりも

齡六十の人物に存せり。

何人も年を重ねるによりてのみ老けるに非ず、

我等もろもろの理想を見捨つるによりて

老いるなり。

Youth means a temperamental predominance

Of courage over timidity of the appetite,

For adventure over the love of ease.

This often exists in a man of sixty more than a boy of twenty.

Nobody grows old by a number of years.

We grow old by deserting our ideals.

よし歳月は皮膚にしわを刻めども、
熱情を抛棄するは魂魄をたるます。
苦、恐怖、自己不信は心根を挫き、
かつ霊を地の塵に戻すなり。

Years may wrinkle the skin,
But to give up enthusiasm wrinkles the soul.
Worry, fear, self-distrust bows the heart
And turns the spirit back to dust.

たとい齡六十、はたまた十六なれども、
すべからく人の心中には
不思議への魅惑の念あり、
次なるは如何にと
尽きざる幼児のごとき興味の思い、
生きる勝ち目を争う愉悦びの心あり。

Whether sixty or sixteen,
There is in every human being's heart the lure of wonder,
The unfailing child-like appetite of what's next,
And the joy of the game of living.

汝の心のただなかと我が心のただなかにこそ、

無線交信の基地ぞあり。

いついつまでも、美と希望、生气と勇氣、

そして力の音信(おとずれ)を

そが人と無窮なる御方より受くるかぎり、

まさしく汝は青年なり。

In the center of your heart and my heart

There is a wireless station;

So long as it receives messages of beauty,

Hope, cheer, courage and power

From men and from the Infinite,

So long are you young.

ときにアンテナは倒れ、

汝の意気 厭世の雪と悲観の氷に覆わるる時、

たとえ齡二十といえども、

このとき汝は老人となりたるなり。

さはあれど、汝のアンテナの立ちて、

樂觀の電波を受信しつづくるかぎり、

なんじ齡八十にして

なお青年のまま死ぬるの望みあり。

When the aerials are down,

And your spirit is covered
With snows of cynicism and the ice of pessimism,
Then you are grown old, even at twenty,
But as long as your aerials are up,
To catch the waves of optimism,
There is hope you may die young at eighty.

[解説]

サムエル・ウルマンの詩「青春」は、1920年ごろに出版され詩集『八十有余年の峰より』に収録された自選の作品です。

詩の原文の後段で、かれは大胆にも「無線交信の基地 wireless station」「アンテナ aerials」ということばを使っています。

無線は、当時、最新の通信手段で、いわば今日のインターネット的存在でした。

詩人ウルマンはに80歳を超える老人になっても、なおもそういう最新のハイテク技術に関心をしめすほど、精神的に若かったのです。

ところで、アンテナから電波が発せられるかぎり、人は希望をもてるのだというサムエル・ウルマンの発想の背景には、じつは1912年に氷山に激突したタイタニック号遭難のさいに、無線通信のおかげで多くの人命が救助された一件があるのです。

この遭難では1513名もの尊い人命が失われましたが、無線のおかげで700名もの人々が救われる結果ともなりました。

またこの結果、人々は無線の威力におどろき、以後、無線は世界中で急速に普及していきました。

サムエル・ウルマンも無線の威力に感動した一人でした。だからこそ、心の中の無線基地ということばを使って、彼は最後まで希望を捨てないでお互いに励ましあうことの大切さを訴えようとしたのです。

現在日本で流布している『青春の詩』の後半部分は、残念ながら、原文からかなり意訳され乖離した内容になっています。それは、このタイタニック号事件と無線通信による遭難救助活動との関係に気付かないまま、訳したからです。

そこで、皆様のご参考になればと思い、上記の通り、原文の文意に忠実に再現したわたしの訳を紹介しました。 (てしま ゆうろう)

連詩「トーラーの巻」

(トーラー研究会の諸賢、昨年仲秋の夜、藤沢の宿、くげ沼の居酒屋「ながら」にて読みし連詩)

ヴァイオリンとにんにくに酔う夜	ゆう
秋の日の 怒りのぶどう気にかかる	正
小惑星 地球の危機近し	タニ
彼方よりながめれば美し湘南のうみ	KYO
かなたより凝視むれば君俯きぬ	雄
逃げ出して来てみればやっぱり憩	石川
トーラーのせまき門 庭広く	義
新緑の気持はすでにちり落葉	昌邦
青丹よし寧楽も顔まけタイガース	正
鎌倉は都 江ノ島から入る	ゆう

うらみのたき 静かの涙淵となる 雄
ばらの花束 無数の瞼を伏せて 節子
カメレオン 舌をのばし蠅をパク タニ
ガリレオ・ガリレー 君の胸にこそふさわし KYO
香りくるあなたの造るスパゲティ 昌邦
めをとじてみればそこはバンコック 弘子
思い出のチェンマイは夢の中 正
ウドンタニ 工事が終りカメルーン 和夫
剣山 契約の箱が呼ぶ祖谷のそば 正
エルサレム 最後は集う人の和 治夫

1945 年初冬の思い出より

ゆうろう

引揚者を積んだ貨車が停止した、
高粱畑の夕辺 駅舎は無い。

収容所から歩く人の群れ、
雪の夜 坂道を皆無言で下る。

米軍輸送船の船底 外は見えない、

機関音だけが伝わる 裸電球が眩しい。

また雪だ

白と黒とのコントラスト

ニッポンに帰ってきたのだ、今日。

(てしま・ゆうろう)

夏のおわり

ゆうろう

ひぐらし蝉が 朝夕に

カナカナカナと きょうも泣く

夏の終りの短い日

別れが辛いと むせび泣く

山の林をふるわせて

木立をあげて カナカナと

姿もみせず ひとり泣く

ひぐらし蝉が泣くたびに

いまも思うは ふるさとの

遠い山の杉林

都へ行くなと あのときも

ひぐらし蝉が カナカナと

泣いておのれに訴えし

カナカナカナの声 聞けば

心はしたう ふるさを

野をこえ山こえ 帰りなむ

友に会わむと 帰りなむ

ひぐらし 泣くな カナカナと

明日にも 都をたつゆえに

カナカナカナと 泣くなかれ

幸福という川

ゆうろう

ひとは不幸をへて また幸せへ帰ってくる。

ひとにとって 不幸は

幸福という川の流れの所々を伏流にしてしまう石だらけの

中州か川床である。

だから わたくしが不幸という川床にいる時でも

心のそこに隠れている幸福の

記憶や感情が おりおりに湧き出で

わたくしの心を慰める。

不幸は 賽の河原の小石のように 無数である

だが どんなに無数でも それは無限ではない。

そればかりか

不幸の石も 伏流水「幸福」の

水分によって潤されている。

もし水分がぜんぶ蒸発して からからに乾燥したら

シナイ半島やゴビ砂漠の砂のように

岩石は たちまち瓦壊風化してしまう。

地下で 伏流となってでも

流れようとするこの川があるかぎり

わたくしは次の舞台への

希望をうしなうことはない。

「歌3首」 ～ギルボア山のふもとにて～

ゆうろう

娘等はオリーヴ畑に出でゆきて

ボケル・トオヴ(おはようさん)と朝風によぶ

真午時(まひるじ)のキブツ静みて光もゆ

ギルボア山の岩の灼ければ

夕風のほの熱きかなた

むらさきにエズレル(平原)かすみ 一日の暮る

[1966年8月9日に詠む]

「もし……」

原詩:ルディアード・キプリング (訳・手島佑郎)

もし汝に属する全ての人その所有を失い、

それにつきて汝を責むるとき、なんじ泰然自若たり得れば……………

もし全ての人びと汝を疑うとき、汝がみずからを信じ、

かつその疑謗をも呑み入れ得れば……………

もし汝は待つことができ、しかも待つにたゆまざれば、

もしくは嘘にたぶらかさるれども、嘘で対処せず、

はたまた憎まるるとも、憎悪に怯まず、

されど八方美人に振る舞わず、賢明に過ぎた話もせざれば……………

もし汝ゆめ見ることができ、夢を汝の主とせざれば……………

もし汝に考ゆる能力あり、考えを汝の目的とはき違えざれば……………

もしなんじ勝利の女神と災いの女神とに出会い、

これら二人のペテン師どもを同等に取り扱い得れば……………

もし汝の語りし真実をふらちな者ども歪曲し、

笑いぐさの罠に仕掛くるとも、汝これに堪えて聞くことあたわば、

もしくは汝そのためにいのちを捧げしものの潰えるを正視でき、

しかして身を屈め、磨耗せし道具にてこれを築きなおすことあたわば……………

もし汝その賞金のすべてを一山にし、

のるかそるか一回の勝負に賭くことあたわば、

そして負け、さらに再び始めより出発しなおし、

決して一言たりとも汝の損失を洩さざれば……………

もし汝の心臓と神経、腱、すでに疲労困憊せりといえども、

なお汝それらを汝の用に駆り立つることあたわば、

しかも、「耐えよ！」と励ます意志以外に 汝の内皆無なるに、

なおかつ耐え抜きおわし得れば

もしなんじ群衆と話すに、汝の徳を保ち得れば、

はたまた王侯と共に歩むとも、庶民感覚を失わざれば、

もし敵も愛する友も汝を害することなく、

もし全てのひと汝を当てにし、されど誰も過分に期待せざれば……………

もし許すことあたわざる一分を、

あたい六十秒の距離にて汝みたすことのできうれば、

汝のものなり、この世とこの世の一切は。

いな…それにもまさりて…汝は一人前の男子(おのこ)なり、わが子よ！

ルディアード・キプリング(1865～1936)は、1907年にノーベル文学賞を受賞した英国の文豪である。その代表作は、インド滞在の経験を反映させた詩集「兵營の歌」である。だが日本の読者には、冒険小説『ジャングル・ブック』の著者と紹介したほうが分かりやすいかもしれない。

彼の詩「If…」は、文豪の作品というよりも、実業家や冒険家への戒めである。これは、オキシデンタル石油を世界のメジャーに仕立て上げたユダヤ人の実業家アーマンド・ハマーの愛詩であった。日本では、この詩はまだ紹介されていなかったので原詩「If……」から手島佑郎が訳した。

「光のために」

作詩： てしま ゆうろう

いつも思うの 人はなぜ

なぜなぜ 生まれて くるのでしょうか

青くまあるい この星に

星の光りにつつまれて

みんな楽しく 助けあい

平和な世界 つくるため

生まれてくるので ないでしょうか

ず〜とむかし 幼い日

光りが わたしを つつみこみ

「こちらに おいで いとし子よ、

人は光りに つつまれて

みんな光りに つつまれて

生まれてくるのよ どの子も」と

やさしく教えて くれたのよ

人を いじめちゃ いけないの

ひ〜とを 殺しちゃ いけないの

それは 光りに そむくこと

みんな楽しく 助けあい

この世のつとめ 終わったら

天(て〜ん)の星になるのよと

わたしの おばあさんも 言っていた

夜空にひかる 星をみて

あなたも 天に帰るまで

地上の光り たいせつに

人を いじめちゃ いけないの

人を 殺しちゃ いけないの

平和な世界 つくるため

人は生まれて くるのです、人は生まれて くるのです

「まりちゃんと妖精」

詩： てしま ゆうろう

南の島の 水ぎわに

ちいさな妖精 おりました

くるくるお目めの こびとさん

ざぶ～ん ざぶ～んと 波のおと

いつもまりちゃんと あそんだの

しろい砂と あおい海

夕焼け雲が ひかるまで

時をわすれて あそんだの

いまもまぶたに うかびます

南の島の 妖精さん

お耳をすまして 目をとじて

ほ～～ら ざぶ～んと 聞こえるよ

いつもまりちゃんと 遊んだの

しろい雲と あおい空

夕焼けこやけ あおぐたび

また会いたいな 妖精さん、また会いたいな 妖精さん

「わたしは歌う」

詩：てしま ゆうろう

ハレルヤ ハレルヤ 声高く

わたしは歌う いま救われた身の幸

主イエスの出会い サマリヤの井戸で

わき上がる喜びと 愛の感謝

ハレルヤ

ハレルヤ ハレルヤ カこめ

わたしは歌う いま救われた身の幸

主イエスの導き マグダラの里で

清められた心よ 神の愛に

ハレルヤ

ハレルヤ ハレルヤ いのち満ち
わたしは歌う いま救われた身の幸
主イエスのゆるし エルサレムの朝
温かいまなざしと 愛の諭し
ハレルヤ

ハレルヤ ハレルヤ 希望もえ
わたしは歌う いま救われた身の幸
主イエスをめざし 十字架のもとまで
信仰と福音と 聖霊(みたま)の愛
ハレルヤ ハレルヤ

「平和への歌 (シール レ・シャローム)」

昇れよ 太陽 朝を照らせ
われらは祈る 前進を
灯(ともしび)かかげ 平和のために
倒れし友は 呼べど帰らず
だれも戻るな 地獄の闇へ
ああ 二度と歌うまじ 戦(いくさ)の凱歌
しかし歌えよ 平和への

歌と祈りを 声高く

ああ 平和への、平和への歌のみを歌え

届け 太陽 花さく園へ

かえり見るなよ 去る者を

希望を仰ぎ、武器よさらば

いざ歌うべし 愛の、愛の歌を

待つにおよばず 夢にはあらず

ああ 平和への 溢れる叫び 明日をまねく

さらば歌え 平和への

歌と祈りを 声高く

ああ 平和への 平和への歌のみを歌え

イスラエル首相イツハク・ラビンは、1994年11月4日、平和を願うイスラエル市民10万人の前でこの「シール レ・シャローム(平和への歌)」を、モハメッド・バスヨウニ駐イスラエル・エジプト大使、マルワン・ムアシェル駐イスラエル・ヨルダン大使と一緒に歌った直後に、ユダヤ人過激派青年によって暗殺された。この日本語訳の歌詞は原文のヘブライ語から忠実に訳したものである。 訳：手島佑郎

「江の島詣で」

詩：てしま ゆうろう

海鳴り、潮鳴り、浪咆える

ここは江の島 岩屋の岬

霊験(しるし)あらたか 弁天様に

願いかけましょう 開運祈願

出会った二人の、出会った二人の 赤い紐

ああ、結ぶ縁(えにし)は 永遠永久(とことわ)に。

海鳴り、潮鳴り、浪咆える

ここは江の島 岩場の怒濤

波路をてらす 灯台の火に

しるべ乞いましょう 安全祈願

愛する二人の 愛する二人の 浮世舟

ああ、漕ぎ出す宿命(さだめ) 幸せに。

海鳴り、潮鳴り、浪咆える

ここは江の島 岩戸の窮(きわ)み

多幸(しあわせ)いのる 神の社(やしろ)に

誓いたてましょう 夫婦(めおと)祈願

旅立つ二人の 旅立つ二人の 熱い愛

ああ、行く末永く 弥栄(いやさか)に

「雨の湘南」

詩：てしま ゆうろう

雨降る湘南 夜霧に煙る

あなた どうして いるかしら

昨夜(ゆうべ)二時まで 片瀬の汀(なぎさ)

今宵ひとり身 心もだえる

ああ、ああ、女ためいき 春の恋

雨打つ湘南 水面(みなも)は淡い

あいつ どうして いるだろう

昨夜二時まで 七里ヶ浜辺

今朝のわびしさ 潮騒(しおざ)いかえす

ああ、ああ、男つぶやき 夏の夢

雨泣く湘南 夕空重く

あなた どうして いるかしら

昨夜二時まで 稲村ヶ崎
今夜さいごね 二人は他人
ああ、ああ、男と女 秋の海

雨止む湘南 星空冴える
あいつ どうして いるだろう
昨夜二時まで 葉山の岬
明日も逢いたい 瞼に浮かぶ
ああ、ああ、愛の旅路は 冬の波

最近の中東情勢について (2001/March/2)

てしま・ゆうろう

[To the front page.](#)

イスラエルでは、シャロン新首相のもとに閣僚 28 人という超挙国一致内閣が成立し、3 月 4 日発足の見込みである。通常は首相以下閣僚 20 人であるだけに、その異常さがきわだつ。イスラエルの政情の不安定さを象徴している。シャロンとしては、当初、彼の元部下であったバラク現首相を国防相に据えるつもりであったし、バラクも受諾するつもりであったが、労働党内部の批判に遭って、これは御破算。今後イスラエル新政権がどのようにパレスチナ側との和平交渉を進めるか、見通しは全く不明である。

こういう状況下で、先週 2 月 24 日、カイロでエジプトのムバラク大統領とロシアのイワノフ外相、それに米国のパウエル新国務長官とがそれぞれ別個に会談している。三者の当面の関心はイスラエル・パレスチナ問題ではなく、対イラク制裁を今後どう

するかであった。4月2日にはムバラク大統領がワシントンを訪れ、ブッシュ新大統領と会談予定。

ロシアが米国を牽制し、対イラク問題でもアラブ諸国への発言力を今後増すのは明白である。

3月22～23日にはアンマンでアラブ首脳会議が開催される。ここではパレスチナ支援も討議されるが主要議題はイラク問題への対応が主要議題となる見込み。米国への経済的依存度が高いエジプト、ヨルダン。米国への軍事的依存を余儀なくしているサウジアラビア、クウェート。イラクと結び付きを強めるイランやリビア。ひとくちでアラブといっても、さまざまの立場と利害が入り乱れている。サウジやエジプトなど親米諸国が米国との距離をどう保ちつつ、なおかつアラブの団結を計るか。これが焦点である。

そうしたさまざまの利害の絡み合いが、あるいは対立となり、あるいは協調となって世界の歴史を形成するのである。

イスラエル・パレスチナ問題にしても、その論評の仕方によって、受け止め方が違ってくる。たとえば、昨年10月にガザでパレスチナ人少年が銃撃戦の間で殺された事件に関して、昨年10月6日発表の小生の論評の仕方には、いささか殺された少年への哀悼の気持ちが強かった。それを読んで、筆者の30年来の知己であるイスラエルのウリ・エプシュタイン教授(日本音楽研究)が先日わざわざ手紙をくださった。ご参考までにその要旨を紹介しておこう。

「私は昨年11月パレスチナ人の少年がガザで銃撃された事件で深く哀悼の念を禁じ得ない。だが、イスラエルの少年らがクファルダロム村でパレスチナ人によって虐殺されたことや、ラマラでイスラエル兵2人が集団リンチで殺されたことも忘れて頂きたい。たしかにシャロンが神殿の丘に強行突入したことは問題であったが、彼がイスラム教の聖所に指一本触れなかったことも知ってほしい。対照的に、パレスチナの暴徒たちがナブルスにあったユダヤ教の聖地ヨセフの墓をむざんに破壊したことを忘れてほしい。シャロンの行動が紛争のきっかけになったのではなく、それを口実にパレスチナ側が暴力を正当化しているのです。これは彼等の常套手段です」(原文をお読みになりたければ、[Comments from Israel & Jordan](#) へ)

ヘブライ大学の歴史学の泰斗、ヨシュア・アリエリ名誉教授は言われる。「イスラエルとパレスチナとの紛争を例に取ってみても、これはすでに100年続いている。どちらの側にもそれぞれ正義がある。だからこそ、それぞれ歩み寄って正義をそこなうことなく

平和の接点を見つけなければならない。今すぐ解決できないにしても、いずれ解決されるのである。平和は忍耐をもって実現するものです。焦ってはいけない」と。

日本対韓国の竹島問題、日本対ロシアの北方領土問題、これらも解決には時間を要するのである。

特集： イスラエル&パレスチナの紛争とその背景

特別解説：パレスチナ紛争の先行き

号外2 2000/10/13 刑務所包囲

号外1 2000/10/6 シャロンの暴挙と流血事件

ラビン暗殺の背景 ～極右の論理と聖書～

イスラエル独立50年

この記事への読者の反響は「[Guest Book Look in \(のぞき\)](#)」をごらんください。

特別解説：パレスチナ紛争の先行き

今回のパレスチナ紛争は、解決出口のない方向へ発展しようとし始めている。今や、問題は事件の発端が何であったか、誰に責任があるかではない。問題はどのようにして事態收拾の方策を見つけるかである。目下のところ紛争が全面戦争に発展する可能性は低い。むしろ、アラブ各国の政治不安定に発展しかねないことを危惧する。

*** 事件の発端**／ 9月28日にイスラエル野党リクード党首シャロンがイスラム教モスクがある神殿の丘(ここはユダヤ教の神殿跡でもある)を強行視察したことと、それへのイスラム教徒の抵抗の衝突。

*** 事件の背景1**／ これより先、米国キャンプ・デービッドの和平交渉で、イスラエルのバラク首相は、神殿の丘をイスラエル主権下ともパレスチナ主権下ともせず、国際主権下に置くという提案をした。これはイスラエルの従来主張からの大幅譲歩であ

った。アラファト議長は、パレスチナ主権下でなければ同意しないといって、これを拒否した。

*** 事件の背景 2**／ 領土問題での一切の譲歩を認めないシャロンは、バラク首相への反発の見せつけと、アラファト議長へのリクード党の強硬姿勢の示威とのために、神殿の丘視察を強行した。

*** 事件の背景 3**／ 他方、パレスチナ側では、タンジム(tanzim 別働隊)と呼ばれる活動組織が、ユダヤ教の新年にあわせて各地で投石騒乱(インティファイダー)を計画していた。この組織は、PLO(パレスチナ解放機構)の中で最大勢力を誇るファタ派に属している。ファタ派の幹部指導者たちはタンジムの計画に反対したが、制止できなかった。

*** 事件の背景 4**／ タンジムは、10年前のインティファイダー時代にイスラエル軍に投石していた少年たちを中核に形成された任意団体で、失業者が多い。彼等は自治政府とアラファト議長を支持もするが、イスラエル・米国との協調共存に反対している。タンジムはファタ派の下部組織とはいえ、PLO やパレスチナ自治政府の直接支配を拒否している。

*** 事件の影響 1**／ イスラエルのバラク首相が国内世論をまとめるには、挙国一致内閣を組むしか他に方法はない。

*** 事件の影響 2**／ これまではパレスチナ問題に発言しなかったイスラエル国内のイスラエル国民であるアラブ人の中に、今回の事件を契機に自分たちの権利やイスラム教徒としての地位保全を主張し始める者が現われたしている。

*** 事件の影響 3**／ アラブ各国は、目下のところ国民の目を対イスラエル非難、対米非難に向け、パレスチナ支援デモを黙認どころか奨励している。民衆の怒りがイスラエルと米国に向けられている間はアラブ諸国の政府は安全だ。

*** 事件の先行き**／ 米国とイスラエルに対してアラブ指導者たちが積極的な制裁処置を実施しないと分かった時、アラブの民衆は自国の政府に向かって怒りをぶつけるかもしれない。そうなると、現在のアラファト議長のように、アラブの指導者たちは自国の民衆をコントロール出来なくなる可能性が大きい。とりわけ貧富の格差が著しいエジプト、ヨルダンの政情不安定が心配される。特に両国の富裕層は米国との経済的結び付きによる恩恵を受けている。

中東和平崩壊！： ～ パレスチナの刑務所からのイスラムの闘士の釈放 ～

過去7年の平和構築の努力がわずか、木曜日(2000/10/12)の夜の数時間の暴動で崩壊。

木曜日夜、数百人のイスラム原理主義ハマス・グループの支持者たちが、パレスチナ自治政府がヨルダン西岸地区とガザ地区の刑務所を襲い、そこに収監されていた反イスラエルテロ抗争の過激派運動家10数人を解放。彼等は「イスラエルを血の池にせよ」とメガホンで叫んだ。その直後で、刑務所の門が開き、35人のハマスとイスラム聖戦活動家が徒歩で刑務所を脱出した。

暫定和平協定によれば、イスラエルはパレスチナ自治警察と協力し、アラファト体制を支えることになっていた。またパレスチナ自治警察はパレスチナ人テロリストからのイスラエル人への攻撃を守ることも約束されていた。ところが、西岸地区とガザ地区では、パレスチナ自治政府が刑務所の門を開き、イスラエル人への自爆テロを指揮したハマス・リーダーを含む何十ものイスラム活動家を釈放した。しかし、木曜日の夜の暴動と秩序喪失により、93年のオスロ和平協定で構築したものは、ほとんど何も残らないほどに崩壊した。1993年の相互承認以来、イスラエルとパレスチナとの合意はもろく、それでもこれ迄は対立のたびに秩序を回復した。だが、今回はもはや回復の見込みさえない。

イスラエルのエフド・バラク首相は、「ハマス脅威が新しい段階に達した。イスラエル市民は非常事態警戒をせよ」と警告を発した。バラクの政策最高顧問ダニー・ヤトム氏は、「アラファトはイスラエルと米国への約束を反故にした」と述べている。

西岸地区ナブルスのジェニッド刑務所の看守たちは、彼らの判断で過激犯35人の囚人を釈放したのであって、自治政府上層部からの命令ではなかったと語っている。というのは、囚人がいるために刑務所がイスラエルのロケット攻撃目標にされるのを恐れるからだと説明している。

ガザ市では、過激派12人を含む約350人の囚人が釈放されたことについても、同様の説明がなされている。ハマス・リーダーのイスマイル・ハニーエ氏によれば、「パレスチナ自治政府が全ての囚人を保護することができないので、全員を刑務所から釈放した」のであるという。

木曜日朝には、パレスチナ自治警察は重要なもう一つの約束、即ち、パレスチナ自治区内にいるイスラエル市民とイスラエル入植地の保護という任務を放棄した。

道に迷った2人のイスラエルの予備役兵士が西岸の町ラマラの警察を訪ね、そこで保護されていたのだが、そのことを知った数百人ものパレスチナ人が警察署を包囲襲撃し、力づくで2人を警察から引き出し、暴行を加え、死体を通りに投げ捨てた。イスラエル放送によれば、第3の兵士は任務中の車ごと焼殺されたという。この事件に関して、イスラエル当局は、事件に関係した者はたとえ自治政府警察軍の者でも追跡して捕まえると言っている。

西岸のエリコでは、ラマラとガザへのイスラエルによるロケット攻撃に怒ったパレスチナ人が、ユダヤ教シナゴグを焼打ちした。

放火の報復として、イスラエルはエリコのパレスチナの警察学校へミサイル攻撃をかけ、エリコの電力基地を破壊した。また、ガザのパレスチナ警察署、放送局、アラファトの自治政府本部庁舎などへイスラエルからロケット攻撃が行われている。

パレスチナ自治政府はこうしたイスラエル側の報復を、「これはバラクが和平会談を断念したことを意味する」ものだと見ている。アラファトの考えでは、イスラエルが占領地区から撤退することと引き替えに、パレスチナ側はユダヤ人国家の安全にも協力し、相互の信頼を深めるというオスロ合意に対して、当初からバラクは懐疑的である。バラクは90年代半ばにイスラエル軍参謀総長であったが、当時のラビン首相に協力的ではなかった。「バラクは、本当のパートナーであるか？」アラファトは、言った。「彼は、彼が参謀長であったとき、オスロ合意を最初に拒絶したではないか？」パレスチナ側の和平交渉者サエブ・レカット氏は、バラクはパレスチナ人に譲歩させるために武力行使をして脅していると言っている。CNNとの電話インタビューで、レカット氏は「今のバラクは、もはやこれまで私が知っていた、一緒に座っていた、そして和平を結ぼうと思っていた男ではない。私は、彼がもはやパートナーであると思わない」と語っている。

非難合戦の是非はどちらが正しいか。第三者の我々日本人は、当事者双方の言い分を鵜呑みするわけにいかない。だが、事態はかぎりなく深刻化している。

なお、こういう事態を受けて、日本や米国からのイスラエルへの観光客には来年3月まで渡航自粛の通達が発令されている。次々に舞い込む予約キャンセル通知で、イスラエルの旅行業界の打撃は計り知れない。 ■

少年に手をかけてはならない！ 彼に何もしてはならない！

(旧約聖書「創世記」22 : 12)

9月30日午後、ガザの12歳の少年モハメッド・アルドゥラをイスラエル軍が狙撃射殺したニュースが世界を飛びまわっている。その父親ジャマール・アルドゥラも狙撃されて、痛々しく倒れる情景が世界を戦慄させている。パレスチナ各地でのイスラエル軍への抵抗と騒乱。パレスチナ平和への道は、またしても暗雲が覆いかぶさった。

騒乱の発端は、イスラエルの野党リクード党シャロン党首が9月28日にエルサレム旧市街の中にあるイスラムの聖域の中へ、視察を強行したことに発する。

ここには、中央に黄金のドームが輝くオマール・モスク、別名「岩のモスク」と、南にはマホメットが昇天したと伝えられる銀のドームのエルアクサ・モスクとが建っている。

この聖域は、ビザンチン時代にはキリスト教の教会が、その遥か以前の西暦前10世紀から西暦1世紀までは、最初ユダヤ教の神殿が建っていた場所である。

しかし現在は、イスラム教がここを管理しており、キリスト教や観光客には立ち入りを開放しているものの、原則として一切のユダヤ人の立ち入りは認められていない(旅行ガイドを除く)。

そこへシャロンが強行突入したことが騒乱の発端となった。彼の意図は、神殿聖域がイスラエルの支配下にあることをデモンストレートし、目下進行中のパレスチナ和平交渉を妨害し、混乱を引き起こす狙いであったと、イスラエルの消息筋は報道している。

野党党首でしかない彼が、あたかもイスラエル首相であつたかのように振る舞ったこと、しかもパレスチナ人との神殿協定を破っての行為であったこと、この2点は暴挙そのものである。ただでさえ薄氷の上をそろりそろりと進めていた和平交渉が、これで一気に崩壊した。

他方、シャロンの聖域侵入の報告を受けて、パレスチナ側は好機到来とばかりに、騒乱を起こした。その指示がアラファット議長から出ていたのか、反アラファット派独

自の行動であったかは、今のところ不明である。いずれにせよ、パレスチナ側の譲歩がないことが和平交渉の手詰まりの問題だと非難されてきた彼らとしては、ここで騒乱を起こして、世界の関心をパレスチナへの同情へと向けさせようと、あえて賭けに出たのである。

そして、まんまと、その賭けにシャロンもイスラエルも乗せられてしまった。

もっともシャロンの弁明によれば、暴₃はユダヤの新年を狙って、その直前の9月29日にエルサレムの嘆きの壁(神殿の外側だが、ユダヤ人の聖域)への投石で始め、ガザ、ヘブロンなどで呼応するようにと、10日前からパレスチナ側で計画されていた。自分の神殿域視察が直接原因ではないという。

事実、暴動そのものは、嘆きの壁で礼拝するユダヤ教徒へ城壁の上からの投石と、それを阻止しようとするイスラエル警察との小競り合いから始まり、一気にパレスチナ全土へ騒動が拡大した。

そうであるとしても、そうした計画の存在を知りながら、あえて神殿域視察を強行したシャロンの軽率さへの誹りは免れない。

国論が和平賛成派と反対派とまさに二分しているイスラエルの現状では、しかも和平派のバラク首相が少数与党しか掌握していない現状では、シャロンを牽制することさえままならないのである。

筆者の友人で、穏健な意見で知られているユダヤ教の指導者たちさえも、今回のシャロンの行動に関して「ユダヤ人の皮をかぶったあの悪魔野郎」と口をきわめて彼を非難している。イスラエルのユダヤ人良識派の人々は、「今回のシャロンの行動、ならびにその後のイスラエル軍の過剰反応については非を認めざるを得ない。あとは事態鎮静化の努力をアラファットにまつだけである」と慨嘆している。

だが、この事態はイスラエル・パレスチナだけに限ったことではない。世界の平和というものは、ほんのささいな蹉跎で一転転覆するほどに不安定なものなのだ。

事態の早期收拾と再度平和への対話と交渉が再開されることを祈るや切である。

ラビン暗殺の背景

～極右の論理と聖書～(サムエル記下21章) 手島 佑郎

1995年11月4日テルアビブ時間・夜9時40分、イスラエル首相イツハク・ラビンが暗殺された。世界中がまさかと思ったが、同胞ユダヤ人による暗殺であった。事件そのものは極右の学生集団の犯行だと判明した。だが、これはイスラエルが建国以来はらんできた民族国粹主義が表面化したものであって、極右学生だけの問題ではない。振り返ってみると、シオニズムの歴史は、周囲のアラブ人と融和しながら国家再建を図ろうとする近代的ヒューマニズムに支えられたシオニストと、ユダヤ教の宗教的熱心から聖地に帰還したユダヤ人との対立の歴史でもある。

パレスチナの開拓初期に社会主義労働運動を基礎に入植地の社会的インフラを建設してきたシオニストたちは、アラブ人の地主から不毛の土地を分譲してもらい、それを開墾し、灌漑し、次第に農地や市街地に整備していった。ユダヤ人の農場がアラブ人に襲撃される事件も頻発した。だが、農場に近い隣のアラブ人による襲撃ではなかった。開拓者たちは近隣のアラブ農民とは友好的につきあっていたからである。

わけでも、独立戦争の参謀総長をつとめたキブツ・ギノサル出身のイガル・アロン、キブツ・メルハビア出身で後に首相にもなったゴルダ・メイヤー女史などはアラブ人の友人が多かった。ヨルダン国王フセインの伯父にあたるエミール・フセインとゴルダ・メイヤーとの信頼関係、ラビンとフセイン国王との友情などは戦争と国家を超えていた。

ユダヤ教に熱心な宗教家の多数は、おもにエルサレムなど都市のユダヤ人街に居住し、独自のコミュニティーを形成してきた。せいぜい日用品と野菜や穀物などをアラブ人の商人から買う位しか、アラブ人との直接の接触がない。また、ユダヤ教のほうがイスラム教よりも高等であるとの宗教的誇りもあって、彼等のアラブ人に対する態度は概して閉鎖的であった。

シオニストたちは現実の枠のなかでユダヤ国家の再建を考えて行動してきたが、ユダヤ教の宗教家たちの中には、聖書とタルムード等にさかのぼるユダヤ宗教法の権威の下だけでしかユダヤ社会の復興はないものとする者が少なくない。極端な者は、イスラエル共和国の国家主権さえも認めず、メシア到来の日まで仮国家でしかないと言明する一派さえいる。そこに今日のユダヤ教の過激派の萌芽がある。

2人寄れば意見が3つ出るユダヤ人であるから、独立戦争の最中でさえもユダヤ人の左派と右派は深刻に対立した。独立後は社会主義者のシオニスト同士がさらに民主系と共産系とに別れて対立し、小党乱立のあまり、宗教党を抱き込まないでは政権を取ることにさえ困難になってしまった。その結果とは言わないにしても、結局イスラエル国は、通常法律のほかユダヤ法の存在を認めざるをえないダブルスタンダード国家になってしまった。いや、4重スタンダード国家になった。アラブ人の間でイスラム法とキリスト教会法も存在しているからである。

シオニズムの源流が「神の約束の地に帰れ」という聖書の伝統に発するとはいえ、近代国家をめざすシオニストたちと、ユダヤ教の律法の厳格な遵守を要求する頑迷な宗教家たちとの間に、つねに意見の衝突が絶えないで、今日に至っている。

ところで1995年7月12日、ユダヤ教正統派の中でも超保守的なラビといわれる前首席ラビ、アブラハム・シャピラが率いるラビニカル連合がイスラエル国軍兵隊に事実上の反乱を教唆した。「汝ら、イスラエルの地に住むべし」という聖書中の神託を拡大解釈して、「占領地区からの軍隊宿営の撤退は聖書の戒めに反する。よって、兵士は上官からの撤退命令を拒否すべし」という宗教上の決定を布告した。これは、パレスチナ人との和平協定に基づき占領地からの撤退を決定した政府への挑戦状であり、政府・国家といえどもユダヤ教の権威に服従すべきだという要求であった。ラビニカル連合は、占領地入植を推進する国民宗教党や国粋派の支持が厚い。

これに対してラビン首相は「宗教家たちの行為は国家の存続を危うくしようとしている」と激怒した。夕刊『イデオット・アハロノット』は「内戦の危機」という見出しでラビたちの暴挙を伝えた。シャハル警察長官は、検事総長が宗教家たちを取り締まるべきだと言った。しかしベンヤイール検事総長は宗教家たちを糾弾すれば国家が二分されることを危惧し、取り締まりを渋った。ただし、撤退を拒否した兵士は最高3年間の懲役刑に処せられる旨が発表された。翌日実施された世論調査ではイスラエル市民の77%が宗教家たちの決定は行き過ぎだと非難している。

こういう対立の極み、ついに宗教的過激派の青年がラビン首相暗殺の拳に出たわけである。

極右のことを、ヘブライ語では「カナイーム(熱誠者、熱心者)」と呼ぶ。考えてみれば、過激派は左右両派とも熱心な人々の集団だ。しかしカナイームの歴史は極左よりずっと古い。既にイエス・キリストの12弟子の名簿の中に「熱心党のシモン」という人

物の記録がある。当時、ローマの圧政を排除してユダヤ民族の独立をはかろうと画策していた国粋主義者のことを熱心党と呼んでいたのである。

最初のカナイームといえ、古代イスラエルの初代の王サウルであろう。彼は「イスラエルとユダの人々のために熱心で」先住民ギベオン人を殺害した(サムエル記下21章)。

しかしながら、聖書は神のための熱心と、人間的利害から出た熱心とを峻別している。

聖書によれば、古代イスラエル人がエジプト脱出後カナン(現在のパレスチナ)を攻略するにさいして、神は先住民を一人残らず殲滅せよと命令した。だが先住民の一部であるギベオン人は一計を案じてイスラエル人と和平条約を結んでしまう。後日、策謀がばれる。それ以来、彼等は神殿のための役務を課せられる羽目になった。それから約300年も経った時、サウル王がギベオン人を虐殺した。彼は「イスラエルとユダの人々のために」を思う熱心から虐殺を実行したと、自己の行動の正当性を主張した。

だが、神はサウルの行為を正しいものと認めず、かえってその報復を求めたのであった。いったん平和の約束が成立してしまえば、その契約を遂行すること、および平和を遵守している者を守ることが神の意思にかなう行為だったからである。戦争を容認するのは、平和裡に解決がつかない場合だけである。平和裡に決着がつくものは常にそちらが優先される。ましていわんや、平和のための契約を結んだ以上は、その契約を尊重する。これが神の正義なのだ。サウル王が国民のためにを思う熱心から先住民を殺したと弁明しても、それが、そのままイコール・神のためにを思う熱心ではなかったのである。

ラビン首相の暗殺事件の端緒となった占領地撤退協定は、西岸地区の13万5千人、ガザ地区の5千人のそれぞれのユダヤ人の生活に関わる問題だけに、容易に解決できない。それだけに、ラビニカル連合の布告のように「聖書の戒め云々」と高飛車に神託を持ち出すとなお紛糾する。それは、ユダヤ人の領土拡大を望む人間的利害からの熱心ではあるけれども、ユダヤ人とパレスチナ人との平和を志向する解決とはおよそ逆行する。

ということは、いかに「前ユダヤ教首長」というこの世的には宗教界最高の地位の人物の判断であろうとも、あれは、聖書の精神および神の意図とほど遠い愚挙以外の

何物でもない。また、そういう誤った教えに盲従してしまう点に、宗教のもつ固有の「熱心」の恐ろしさがある。神や聖典を権威の引き合いに出す前に、宗教や歴史の古典に謙虚に学ぶことがまず必要なのである。

イスラエル独立50年を迎えたが

手島佑郎

~~~~~  
~~~~~

汝ら、彼処(神が選びし地)にては、我らが今日ここに為すごとく、各々その目に善しと見るところを為すべからず。… 汝の神エホバの善しと見、正しと見たもうことを為さば、汝と汝の後の子孫に永くさいわいあるべし。(申命記12章8～28節)

~~~~~  
~~~~~

50年前の1948年5月14日、ユダヤ人の国イスラエルが独立した。そして今、イスラエルが建国50年を迎えるのを前にして、わたしの心にはさまざまの思いが浮かび上がる。

イスラエル国が誕生したということはいったい何なのか。その意味や意義をどう理解したらよいか。イスラエル国の存在の目的は何か。今後イスラエルはどのような発展を辿るのか。

私がイスラエルに留学したとき、まだあの国は独立15年しかたっていなかった。あの当時、イスラエルの建国の意義を考え直してみるユダヤ人など誰もいなかった。ユダヤ人の国家がほぼ2000年ぶりに誕生した。ただそれだけで十分意義を感じていた。

シオニズムの父、テオドール・ヘルツルの予言『古くて新しい国』が実現しつつあることを、みんな身近に感じていた。ベングリオンやゴルダ・メイヤーなどシオニスト・リーダーたちの社会主義の理想に燃えた建国精神に従っていけば、ユダヤ人が協力一致する理想社会が実現できると確信していた。周辺のアラブ諸国との戦争や紛争も、いずれ全面的に解決できるものと楽観視していた。

50年を経て、当初のビジョンがずいぶん実現してきた。緑の木陰豊かな街並み。高速自動車道路や整備された通信網。充実した医療設備やハイテクを駆使したインフラ。全面和平には遠いが、周辺のアラブ諸国とも少しずつ友好関係を築いて、平和へ数

歩ずつ近づいている。それに、建国時にわずか87万しかいなかったユダヤ人人口が、現在は576万人と6.6倍に増加している。

しかし50年を経てみて、イスラエルは建国当初の理想と逆の方向へも走っているのではないかという懸念も持つ。ユダヤ人が協力一致する理想社会どころか、骨肉相争う社会へと変貌しはじめている。ユダヤ人によるユダヤ人首相ラビンの暗殺がその最大の象徴である。

顧みれば、ユダヤ人の歴史上でも流血の惨事は幾度も繰り返された。最初、3300年前に預言者モーセと実力者コハテとが対立して以来、前12世紀頃のベニヤミン族と他の11部族との対立。前10世紀以来の南のユダ族と北11部族との対立。前7世紀頃のユダ王国内部の親エジプト派と親バビロニア派の対立。西暦1世紀の親ローマ派と民族国粋派との対立…など。歴史のおりおりにユダヤ人内部では熾烈な対立抗争が繰り返された。

18世紀後半に東欧のユダヤ教内部でハシディズム運動がはじまった時も、守旧派と新興ハシディズム派とのあいだで、流血寸前にいたるほどの罵詈雑言合戦がくりひろげられた。だが、ラビン暗殺事件のようなユダヤ人同士の政治テロとなると、2000年ぶりのことだ。

もとより歴史の悠久な流れから見ると、そんな人間同士の対立はほんの一瞬の出来事だ。歴史が新しい局面に入ろうとする曲がり角では、対立はつねに当然な過程だ。対立抗争なしに歴史が新しいページへ移行することは有りえない。だから、ユダヤ人同士の対立が激化したことは、歴史が新しい次元へ発展することの予兆と解釈してもいいのかもしれない。

だが、それにしても歴史には余人に理解できないことが起きる。例えば、ラビン暗殺事件のことだが、暗殺者イガル・アミールの犯行の直接動機は、恋人の歓心をひきだすためであった。

イエーメン系ユダヤ人のイガルは、欧州系ユダヤ人女性マルガリート・ハルシェフに恋をしていた。二人とも思想的には極右であったが、イエーメン系男子が欧州系女子と結婚することは、平等社会のイスラエルでもまず考えられないことであった。平等とか権利とか云々するまえに、両者の文化が違いすぎるのである。但し、その逆のケースは、いくらでもある。

そこで、イガルは何とか自分をマルガリートに認めてもらおうと思って、ついにラビン暗殺を実行したのである。暗殺者イガルは無期懲役。マルガリートはイガルの陰謀を当局に報告しなかった罪で懲役5年の判決を受けて服役中である。以上はラビン暗殺事件の経緯である。ここまでは、客観的事実の報告として、わたくしは冷静にニュース記事を読む。

ところで、この女性、マルガリートは、じつはわたくしのユダヤ教研究における兄弟子P教授の孫娘であった。Pは若くして文学の才能を発揮し、正統派ユダヤ教のラビの資格をもち、それでいて中道派のアメリカ・ユダヤ神学校で博士号を取得した。エンサイクロペディア・イスラエルの主任編纂委員をするほどの博識であり、聖書への深い造詣をもつ人物であった。

Pは人格温厚、政治的にも彼の言動はつねに中道であった。それなのに、なぜ彼の娘が極右過激派メンバーになったのか。Pが他界して10年、わたくしには今回の事件の裏の経緯を知る手段はない。

唯一わたくしに言えることは、歴史には不可解な部分がつねに存在するという事実である。常人の常識では計り知れない動きがつねに起きている。それは何故か。

なぜ不可解の部分が発生するのか。私が思うに、その答は、人がそれぞれ自分では正しいと思うことを行っているからである。マルガリートもイガルも、かれらの考えでは正しいと思われることを実行したまでである。だが、その行為は万人の賛同を得るものではなかった。

ここに人間社会の難しさがあつて、各自がいかにも正しいと考えていても、各自の判断基準がまちまちである以上は、万人が共通して正しいと承認できる行動には至らない。

ましてや、現在のイスラエルのように、得票数わずか1%の僅差でナタニヤフが首相に選ばれている状況だと、和平論と強硬論とに国論は二分され、正義がふたつある有様だ。こうなると、なおのこと何が起きてもおかしくない状態になる。

もっとも、国をあげて単一意見というのも問題だ。それでは、ファッショ政治である。結論が出るまでの過程では、様々の意見が百出するほうがいい。しかし、最終的にどいう行動をすればいいかを定めるための、ある種の判断基準は万人に共有されていることが望まれる。

聖書はそれを神の目から見て正しいことを為せと命じている。とりわけ神が約束した地(イスラエル)においては、神の視点から物事を見直して事の当否を判断せよ、なのである。

だが、ここでまた難しい問題が生じる。各自が「○○をすることは神の目から見て正しい」と勝手に思い込む。大抵それは自分にとって都合のよいことを、神の利益に置き換えている。ヨブの告白ではないが、神の意思を本当には分かっていないのに、分かったつもりになる。そして、これは神の意思に叶うことだと信じこみ、今度はその行動には歯止めが効かなくなる。人間の傲慢は、人間が謙虚さを失い、神にとって代わることから発生する。

神の目から見た善と正義と理想とは何か。これを各自の理性と良心のもとに探究する実験国がイスラエルという国の誕生意義なのかもしれない。ただし、これはユダヤ人でない我々にも課せられた人類共通の課題でもあるのだ。

最近の中東情勢について (2001/March/2)

てしま・ゆうろう

[To the front page.](#)

イスラエルでは、シャロン新首相のもとに閣僚 28 人という超挙国一致内閣が成立し、3 月 4 日発足の見込みである。通常は首相以下閣僚 20 人であるだけに、その異常さがきわだつ。イスラエルの政情の不安定さを象徴している。シャロンとしては、当初、彼の元部下であったバラク現首相を国防相に据えるつもりであったし、バラクも受諾するつもりであったが、労働党内部の批判に遭って、これは御破算。今後イスラエル新政権がどのようにパレスチナ側との和平交渉を進めるか、見通しは全く不明である。

こういう状況下で、先週 2 月 24 日、カイロでエジプトのムバラク大統領とロシアのイワノフ外相、それに米国のパウエル新国務長官とがそれぞれ別個に会談している。三者の当面の関心はイスラエル・パレスチナ問題ではなく、対イラク制裁を今後どう

するかであった。4月2日にはムバラク大統領がワシントンを訪れ、ブッシュ新大統領と会談予定。

ロシアが米国を牽制し、対イラク問題でもアラブ諸国への発言力を今後増すのは明白である。

3月22～23日にはアンマンでアラブ首脳会議が開催される。ここではパレスチナ支援も討議されるが主要議題はイラク問題への対応が主要議題となる見込み。米国への経済的依存度が高いエジプト、ヨルダン。米国への軍事的依存を余儀なくしているサウジアラビア、クウェート。イラクと結び付きを強めるイランやリビア。ひとくちでアラブといっても、さまざまの立場と利害が入り乱れている。サウジやエジプトなど親米諸国が米国との距離をどう保ちつつ、なおかつアラブの団結を計るか。これが焦点である。

そうしたさまざまの利害の絡み合いが、あるいは対立となり、あるいは協調となって世界の歴史を形成するのである。

イスラエル・パレスチナ問題にしても、その論評の仕方によって、受け止め方が違ってくる。たとえば、昨年10月にガザでパレスチナ人少年が銃撃戦の間で殺された事件に関して、昨年10月6日発表の小生の論評の仕方には、いささか殺された少年への哀悼の気持ちが強かった。それを読んで、筆者の30年来の知己であるイスラエルのウリ・エプシュタイン教授(日本音楽研究)が先日わざわざ手紙をくださった。ご参考までにその要旨を紹介しておこう。

「私は昨年11月パレスチナ人の少年がガザで銃撃された事件で深く哀悼の念を禁じ得ない。だが、イスラエルの少年らがクファルダロム村でパレスチナ人によって虐殺されたことや、ラマラでイスラエル兵2人が集団リンチで殺されたことも忘れて頂きたい。たしかにシャロンが神殿の丘に強行突入したことは問題であったが、彼がイスラム教の聖所に指一本触れなかったことも知ってほしい。対照的に、パレスチナの暴徒たちがナブルスにあったユダヤ教の聖地ヨセフの墓をむざんに破壊したことを忘れてほしい。シャロンの行動が紛争のきっかけになったのではなく、それを口実にパレスチナ側が暴力を正当化しているのです。これは彼等の常套手段です」(原文をお読みになりたければ、[Comments from Israel & Jordan](#) へ)

ヘブライ大学の歴史学の泰斗、ヨシュア・アリエリ名誉教授は言われる。「イスラエルとパレスチナとの紛争を例に取ってみても、これはすでに100年続いている。どちらの側にもそれぞれ正義がある。だからこそ、それぞれ歩み寄って正義をそこなうことなく

平和の接点を見つけなければならない。今すぐ解決できないにしても、いずれ解決されるのである。平和は忍耐をもって実現するものです。焦ってはいけない」と。

日本対韓国の竹島問題、日本対ロシアの北方領土問題、これらも解決には時間を要するのである。

特集： イスラエル&パレスチナの紛争とその背景

特別解説：パレスチナ紛争の先行き

号外2 2000/10/13 刑務所包囲

号外1 2000/10/6 シャロンの暴挙と流血事件

ラビン暗殺の背景 ～極右の論理と聖書～

イスラエル独立50年

この記事への読者の反響は「[Guest Book Look in \(のぞき\)](#)」をごらんください。

特別解説：パレスチナ紛争の先行き

今回のパレスチナ紛争は、解決出口のない方向へ発展しようとし始めている。今や、問題は事件の発端が何であったか、誰に責任があるかではない。問題はどのようにして事態收拾の方策を見つけるかである。目下のところ紛争が全面戦争に発展する可能性は低い。むしろ、アラブ各国の政治不安定に発展しかねないことを危惧する。

*** 事件の発端**／ 9月28日にイスラエル野党リクード党首シャロンがイスラム教モスクがある神殿の丘(ここはユダヤ教の神殿跡でもある)を強行視察したことと、それへのイスラム教徒の抵抗の衝突。

*** 事件の背景1**／ これより先、米国キャンプ・デービッドの和平交渉で、イスラエルのバラク首相は、神殿の丘をイスラエル主権下ともパレスチナ主権下ともせず、国際主権下に置くという提案をした。これはイスラエルの従来の主張からの大幅譲歩であ

った。アラファト議長は、パレスチナ主権下でなければ同意しないといって、これを拒否した。

*** 事件の背景 2**／ 領土問題での一切の譲歩を認めないシャロンは、バラク首相への反発の見せつけと、アラファト議長へのリクード党の強硬姿勢の示威とのために、神殿の丘視察を強行した。

*** 事件の背景 3**／ 他方、パレスチナ側では、タンジム(tanzim 別働隊)と呼ばれる活動組織が、ユダヤ教の新年にあわせて各地で投石騒乱(インティファイダー)を計画していた。この組織は、PLO(パレスチナ解放機構)の中で最大勢力を誇るファタ派に属している。ファタ派の幹部指導者たちはタンジムの計画に反対したが、制止できなかった。

*** 事件の背景 4**／ タンジムは、10年前のインティファイダー時代にイスラエル軍に投石していた少年たちを中核に形成された任意団体で、失業者が多い。彼等は自治政府とアラファト議長を支持もするが、イスラエル・米国との協調共存に反対している。タンジムはファタ派の下部組織とはいえ、PLO やパレスチナ自治政府の直接支配を拒否している。

*** 事件の影響 1**／ イスラエルのバラク首相が国内世論をまとめるには、挙国一致内閣を組むしか他に方法はない。

*** 事件の影響 2**／ これまではパレスチナ問題に発言しなかったイスラエル国内のイスラエル国民であるアラブ人の中に、今回の事件を契機に自分たちの権利やイスラム教徒としての地位保全を主張し始める者が現われたしている。

*** 事件の影響 3**／ アラブ各国は、目下のところ国民の目を対イスラエル非難、対米非難に向け、パレスチナ支援デモを黙認どころか奨励している。民衆の怒りがイスラエルと米国に向けられている間はアラブ諸国の政府は安全だ。

*** 事件の先行き**／ 米国とイスラエルに対してアラブ指導者たちが積極的な制裁処置を実施しないと分かった時、アラブの民衆は自国の政府に向かって怒りをぶつけるかもしれない。そうなると、現在のアラファト議長のように、アラブの指導者たちは自国の民衆をコントロール出来なくなる可能性が大きい。とりわけ貧富の格差が著しいエジプト、ヨルダンの政情不安定が心配される。特に両国の富裕層は米国との経済的結び付きによる恩恵を受けている。

中東和平崩壊！： ～ パレスチナの刑務所からのイスラムの闘士の釈放 ～

過去7年の平和構築の努力がわずか、木曜日(2000/10/12)の夜の数時間の暴動で崩壊。

木曜日夜、数百人のイスラム原理主義ハマス・グループの支持者たちが、パレスチナ自治政府がヨルダン西岸地区とガザ地区の刑務所を襲い、そこに収監されていた反イスラエルテロ抗争の過激派運動家10数人を解放。彼等は「イスラエルを血の池にせよ」とメガホンで叫んだ。その直後で、刑務所の門が開き、35人のハマスとイスラム聖戦活動家が徒歩で刑務所を脱出した。

暫定和平協定によれば、イスラエルはパレスチナ自治警察と協力し、アラファト体制を支えることになっていた。またパレスチナ自治警察はパレスチナ人テロリストからのイスラエル人への攻撃を守ることも約束されていた。ところが、西岸地区とガザ地区では、パレスチナ自治政府が刑務所の門を開き、イスラエル人への自爆テロを指揮したハマス・リーダーを含む何十ものイスラム活動家を釈放した。しかし、木曜日の夜の暴動と秩序喪失により、93年のオスロ和平協定で構築したものは、ほとんど何も残らないほどに崩壊した。1993年の相互承認以来、イスラエルとパレスチナとの合意はもろく、それでもこれ迄は対立のたびに秩序を回復した。だが、今回はもはや回復の見込みさえない。

イスラエルのエフド・バラク首相は、「ハマス脅威が新しい段階に達した。イスラエル市民は非常事態警戒をせよ」と警告を発した。バラクの政策最高顧問ダニー・ヤトム氏は、「アラファトはイスラエルと米国への約束を反故にした」と述べている。

西岸地区ナブルスのジェニッド刑務所の看守たちは、彼らの判断で過激犯35人の囚人を釈放したのであって、自治政府上層部からの命令ではなかったと語っている。というのは、囚人がいるために刑務所がイスラエルのロケット攻撃目標にされるのを恐れるからだと説明している。

ガザ市では、過激派12人を含む約350人の囚人が釈放されたことについても、同様の説明がなされている。ハマス・リーダーのイスマイル・ハニーエ氏によれば、「パレスチナ自治政府が全ての囚人を保護することができないので、全員を刑務所から釈放した」のであるという。

木曜日朝には、パレスチナ自治警察は重要なもう一つの約束、即ち、パレスチナ自治区内にいるイスラエル市民とイスラエル入植地の保護という任務を放棄した。

道に迷った2人のイスラエルの予備役兵士が西岸の町ラマラの警察を訪ね、そこで保護されていたのだが、そのことを知った数百人ものパレスチナ人が警察署を包囲襲撃し、力づくで2人を警察から引き出し、暴行を加え、死体を通りに投げ捨てた。イスラエル放送によれば、第3の兵士は任務中の車ごと焼殺されたという。この事件に関して、イスラエル当局は、事件に関係した者はたとえ自治政府警察軍の者でも追跡して捕まえると言っている。

西岸のエリコでは、ラマラとガザへのイスラエルによるロケット攻撃に怒ったパレスチナ人が、ユダヤ教シナゴグを焼打ちした。

放火の報復として、イスラエルはエリコのパレスチナの警察学校へミサイル攻撃をかけ、エリコの電力基地を破壊した。また、ガザのパレスチナ警察署、放送局、アラファトの自治政府本部庁舎などへイスラエルからロケット攻撃が行われている。

パレスチナ自治政府はこうしたイスラエル側の報復を、「これはバラクが和平会談を断念したことを意味する」ものだと見ている。アラファトの考えでは、イスラエルが占領地区から撤退することと引き替えに、パレスチナ側はユダヤ人国家の安全にも協力し、相互の信頼を深めるというオスロ合意に対して、当初からバラクは懐疑的である。バラクは90年代半ばにイスラエル軍参謀総長であったが、当時のラビン首相に協力的ではなかった。「バラクは、本当のパートナーであるか？」アラファトは、言った。「彼は、彼が参謀長であったとき、オスロ合意を最初に拒絶したではないか？」パレスチナ側の和平交渉者サエブ・レカット氏は、バラクはパレスチナ人に譲歩させるために武力行使をして脅していると言っている。CNNとの電話インタビューで、レカット氏は「今のバラクは、もはやこれまで私が知っていた、一緒に座っていた、そして和平を結ぼうと思っていた男ではない。私は、彼がもはやパートナーであると思わない」と語っている。

非難合戦の是非はどちらが正しいか。第三者の我々日本人は、当事者双方の言い分を鵜呑みするわけにいかない。だが、事態はかぎりなく深刻化している。

なお、こういう事態を受けて、日本や米国からのイスラエルへの観光客には来年3月まで渡航自粛の通達が発令されている。次々に舞い込む予約キャンセル通知で、イスラエルの旅行業界の打撃は計り知れない。 ■

～ イスラエル野党党首シャロンの暴挙と流血事件 ～

少年に手をかけてはならない！ 彼に何もしてはならない！
(旧約聖書「創世記」22：12)

9月30日午後、ガザの12歳の少年モハメッド・アルドゥラをイスラエル軍が狙撃射殺したニュースが世界を飛びまわっている。その父親ジャマール・アルドゥラも狙撃されて、痛々しく倒れる情景が世界を戦慄させている。パレスチナ各地でのイスラエル軍への抵抗と騒乱。パレスチナ平和への道は、またしても暗雲が覆いかぶさった。

騒乱の発端は、イスラエルの野党リクード党シャロン党首が9月28日にエルサレム旧市街の中にあるイスラムの聖域の中へ、視察を強行したことに発する。

ここには、中央に黄金のドームが輝くオマール・モスク、別名「岩のモスク」と、南にはマホメットが昇天したと伝えられる銀のドームのエルアクサ・モスクとが建っている。

この聖域は、ビザンチン時代にはキリスト教の教会が、その遥か以前の西暦前10世紀から西暦1世紀までは、最初ユダヤ教の神殿が建っていた場所である。

しかし現在は、イスラム教がここを管理しており、キリスト教や観光客には立ち入りを開放しているものの、原則として一切のユダヤ人の立ち入りは認められていない（旅行ガイドを除く）。

そこへシャロンが強行突入したことが騒乱の発端となった。彼の意図は、神殿聖域がイスラエルの支配下にあることをデモンストレートし、目下進行中のパレスチナ和平交渉を妨害し、混乱を引き起こす狙いであったと、イスラエルの消息筋は報道している。

野党党首でしかない彼が、あたかもイスラエル首相であつたかのように振る舞ったこと、しかもパレスチナ人との神殿協定を破っての行為であったこと、この2点は暴挙そのものである。ただでさえ薄氷の上をそろりそろりと進めていた和平交渉が、これで一気に崩壊した。

他方、シャロンの聖域侵入の報告を受けて、パレスチナ側は好機到来とばかりに、騒乱を起こした。その指示がアラファット議長から出ていたのか、反アラファット派独自の行動であったかは、今のところ不明である。いずれにせよ、パレスチナ側の譲歩がないことが和平交渉の手詰まりの問題だと非難されてきた彼らとしては、ここで騒乱を起こして、世界の関心をパレスチナへの同情へと向けさせようと、あえて賭けに出たのである。

そして、まんまと、その賭けにシャロンもイスラエルも乗せられてしまった。

もっともシャロンの弁明によれば、暴乱はユダヤの新年を狙って、その直前の9月29日にエルサレムの嘆きの壁(神殿の外側だが、ユダヤ人の聖域)への投石で始め、ガザ、ヘブロンなどで呼応するようにと、10日前からパレスチナ側で計画されていた。自分の神殿域視察が直接原因ではないという。

事実、暴動そのものは、嘆きの壁で礼拝するユダヤ教徒へ城壁の上からの投石と、それを阻止しようとするイスラエル警察との小競り合いから始まり、一気にパレスチナ全土へ騒動が拡大した。

そうであるとしても、そうした計画の存在を知りながら、あえて神殿域視察を強行したシャロンの軽率さへの誹りは免れない。

国論が和平賛成派と反対派とまさに二分しているイスラエルの現状では、しかも和平派のバラク首相が少数与党しか掌握していない現状では、シャロンを牽制することさえままならないのである。

筆者の友人で、穏健な意見で知られているユダヤ教の指導者たちさえも、今回のシャロンの行動に関して「ユダヤ人の皮をかぶったあの悪魔野郎」と口をきわめて彼を非難している。イスラエルのユダヤ人良識派の人々は、「今回のシャロンの行動、ならびにその後のイスラエル軍の過剰反応については非を認めざるを得ない。あとは事態鎮静化の努力をアラファットにまつだけである」と慨嘆している。

だが、この事態はイスラエル・パレスチナだけに限ったことではない。世界の平和というものは、ほんのささいな蹉跎で一転転覆するほどに不安定なものなのだ。

事態の早期收拾と再度平和への対話と交渉が再開されることを祈るや切である。

ラビン暗殺の背景

～極右の論理と聖書～(サムエル記下21章) 手島 佑郎

1995年11月4日テルアビブ時間・夜9時40分、イスラエル首相イツハク・ラビンが暗殺された。世界中がまさかと思ったが、同胞ユダヤ人による暗殺であった。事件そのものは極右の学生集団の犯行だと判明した。だが、これはイスラエルが建国以来はらんできた民族国粹主義が表面化したものであって、極右学生だけの問題ではない。振り返ってみると、シオニズムの歴史は、周囲のアラブ人と融和しながら国家再建を図ろうとする近代的ヒューマニズムに支えられたシオニストと、ユダヤ教の宗教的熱心から聖地に帰還したユダヤ人との対立の歴史でもある。

パレスチナの開拓初期に社会主義労働運動を基礎に入植地の社会的インフラを建設してきたシオニストたちは、アラブ人の地主から不毛の土地を分譲してもらい、それを開墾し、灌漑し、次第に農地や市街地に整備していった。ユダヤ人の農場がアラブ人に襲撃される事件も頻発した。だが、農場に近い隣のアラブ人による襲撃ではなかった。開拓者たちは近隣のアラブ農民とは友好的につきあっていたからである。

わけでも、独立戦争の参謀総長をつとめたキブツ・ギノサル出身のイガル・アロン、キブツ・メルハビア出身で後に首相にもなったゴルダ・メイヤー女史などはアラブ人の友人が多かった。ヨルダン国王フセインの伯父にあたるエミール・フセインとゴルダ・メイヤーとの信頼関係、ラビンとフセイン国王との友情などは戦争と国家を超えていた。

ユダヤ教に熱心な宗教家の多数は、おもにエルサレムなど都市のユダヤ人街に居住し、独自のコミュニティーを形成してきた。せいぜい日用品と野菜や穀物などをアラブ人の商人から買う位しか、アラブ人との直接の接触がない。また、ユダヤ教のほうがイスラム教よりも高等であるとの宗教的誇りもあって、彼等のアラブ人に対する態度は概して閉鎖的であった。

シオニストたちは現実の枠のなかでユダヤ国家の再建を考えて行動してきたが、ユダヤ教の宗教家たちの中には、聖書とタルムード等にさかのぼるユダヤ宗教法の権威の下だけでしかユダヤ社会の復興はないものとする者が少なくない。極端な者は、イスラエル共和国の国家主権さえも認めず、メシア到来の日まで仮国家でしかないと言明する一派さえいる。そこに今日のユダヤ教の過激派の萌芽がある。

2人寄れば意見が3つ出るユダヤ人であるから、独立戦争の最中でさえもユダヤ人の左派と右派は深刻に対立した。独立後は社会主義者のシオニスト同士がさらに民主系と共産系とに別れて対立し、小党乱立のあまり、宗教党を抱き込まないでは政権を取ることさえ困難になってしまった。その結果とは言わないにしても、結局イスラエル国は、通常法律のほかユダヤ法の存在を認めざるをえないダブルスタンダード国家になってしまった。いや、4重スタンダード国家になった。アラブ人の間でイスラム法とキリスト教会法も存在しているからである。

シオニズムの源流が「神の約束の地に帰れ」という聖書の伝統に発するとはいえ、近代国家をめざすシオニストたちと、ユダヤ教の律法の厳格な遵守を要求する頑迷な宗教家たちとの間に、つねに意見の衝突が絶えないで、今日に至っている。

ところで1995年7月12日、ユダヤ教正統派の中でも超保守的なラビといわれる前首席ラビ、アブラハム・シャピラが率いるラビニカル連合がイスラエル国軍兵隊に事実上の反乱を教唆した。「汝ら、イスラエルの地に住むべし」という聖書中の神託を拡大解釈して、「占領地区からの軍隊宿営の撤退は聖書の戒めに反する。よって、兵士は上官からの撤退命令を拒否すべし」という宗教上の決定を布告した。これは、パレスチナ人との和平協定に基づき占領地からの撤退を決定した政府への挑戦状であり、政府・国家といえどもユダヤ教の権威に服従すべきだという要求であった。ラビニカル連合は、占領地入植を推進する国民宗教党や国粋派の支持が厚い。

これに対してラビン首相は「宗教家たちの行為は国家の存続を危うくしようとしている」と激怒した。夕刊『イデオット・アハロノット』は「内戦の危機」という見出しでラビたちの暴挙を伝えた。シャハル警察長官は、検事総長が宗教家たちを取り締まるべきだと言った。しかしベンヤイール検事総長は宗教家たちを糾弾すれば国家が二分されることを危惧し、取り締まりを渋った。ただし、撤退を拒否した兵士は最高3年間の懲役刑に処せられる旨が発表された。翌日実施された世論調査ではイスラエル市民の77%が宗教家たちの決定は行き過ぎだと非難している。

こういう対立の極み、ついに宗教的過激派の青年がラビン首相暗殺の拳に出たわけである。

極右のことを、ヘブライ語では「カナイーム(熱誠者、熱心者)」と呼ぶ。考えてみれば、過激派は左右両派とも熱心な人々の集団だ。しかしカナイームの歴史は極左よりずっと古い。既にイエス・キリストの12弟子の名簿の中に「熱心党のシモン」という人

物の記録がある。当時、ローマの圧政を排除してユダヤ民族の独立をはかろうと画策していた国粋主義者のことを熱心党と呼んでいたのである。

最初のカナイームといえ、古代イスラエルの初代の王サウルであろう。彼は「イスラエルとユダの人々のために熱心で」先住民ギベオン人を殺害した(サムエル記下21章)。

しかしながら、聖書は神のための熱心と、人間的利害から出た熱心とを峻別している。

聖書によれば、古代イスラエル人がエジプト脱出後カナン(現在のパレスチナ)を攻略するにさいして、神は先住民を一人残らず殲滅せよと命令した。だが先住民の一部であるギベオン人は一計を案じてイスラエル人と和平条約を結んでしまう。後日、策謀がばれる。それ以来、彼等は神殿のための役務を課せられる羽目になった。それから約300年も経った時、サウル王がギベオン人を虐殺した。彼は「イスラエルとユダの人々のために」を思う熱心から虐殺を実行したと、自己の行動の正当性を主張した。

だが、神はサウルの行為を正しいものと認めず、かえってその報復を求めたのであった。いったん平和の約束が成立してしまえば、その契約を遂行すること、および平和を遵守している者を守ることが神の意思にかなう行為だったからである。戦争を容認するのは、平和裡に解決が見つからない場合だけである。平和裡に決着がつくものは常にそちらが優先される。ましていわんや、平和のための契約を結んだ以上は、その契約を尊重する。これが神の正義なのだ。サウル王が国民のためにを思う熱心から先住民を殺したと弁明しても、それが、そのままイコール・神のためにを思う熱心ではなかったのである。

ラビン首相の暗殺事件の端緒となった占領地撤退協定は、西岸地区の13万5千人、ガザ地区の5千人のそれぞれのユダヤ人の生活に関わる問題だけに、容易に解決できない。それだけに、ラビニカル連合の布告のように「聖書の戒め云々」と高飛車に神託を持ち出すとなお紛糾する。それは、ユダヤ人の領土拡大を望む人間的利害からの熱心ではあるけれども、ユダヤ人とパレスチナ人との平和を志向する解決とはおよそ逆行する。

ということは、いかに「前ユダヤ教首長」というこの世的には宗教界最高の地位の人物の判断であろうとも、あれは、聖書の精神および神の意図とほど遠い愚挙以外の

何物でもない。また、そういう誤った教えに盲従してしまう点に、宗教のもつ固有の「熱心」の恐ろしさがある。神や聖典を権威の引き合いに出す前に、宗教や歴史の古典に謙虚に学ぶことがまず必要なのである。

イスラエル独立50年を迎えたが

手島佑郎

~~~~~  
~~~~~

汝ら、彼処(神が選びし地)にては、我らが今日ここに為すごとく、各々その目に善しと見るところを為すべからず。… 汝の神エホバの善しと見、正しと見たもうことを為さば、汝と汝の後の子孫に永くさいわいあるべし。(申命記12章8～28節)

~~~~~  
~~~~~

50年前の1948年5月14日、ユダヤ人の国イスラエルが独立した。そして今、イスラエルが建国50年を迎えるのを前にして、わたしの心にはさまざまの思いが浮かび上がる。

イスラエル国が誕生したということはいったい何なのか。その意味や意義をどう理解したらよいか。イスラエル国の存在の目的は何か。今後イスラエルはどのような発展を辿るのか。

私がイスラエルに留学したとき、まだあの国は独立15年しかたっていなかった。あの当時、イスラエルの建国の意義を考え直してみるユダヤ人など誰もいなかった。ユダヤ人の国家がほぼ2000年ぶりに誕生した。ただそれだけで十分意義を感じていた。

シオニズムの父、テオドール・ヘルツルの予言『古くて新しい国』が実現しつつあることを、みんな身近に感じていた。ベングリオンやゴルダ・メイヤーなどシオニスト・リーダーたちの社会主義の理想に燃えた建国精神に従っていけば、ユダヤ人が協力一致する理想社会が実現できると確信していた。周辺のアラブ諸国との戦争や紛争も、いずれ全面的に解決できるものと楽観視していた。

50年を経て、当初のビジョンがずいぶん実現してきた。緑の木陰豊かな街並み。高速自動車道路や整備された通信網。充実した医療設備やハイテクを駆使したインフラ。全面和平には遠いが、周辺のアラブ諸国とも少しずつ友好関係を築いて、平和へ数

歩ずつ近づいている。それに、建国時にわずか87万しかいなかったユダヤ人人口が、現在は576万人と6.6倍に増加している。

しかし50年を経てみて、イスラエルは建国当初の理想と逆の方向へも走っているのではないかという懸念も持つ。ユダヤ人が協力一致する理想社会どころか、骨肉相争う社会へと変貌しはじめている。ユダヤ人によるユダヤ人首相ラビンの暗殺がその最大の象徴である。

顧みれば、ユダヤ人の歴史上でも流血の惨事は幾度も繰り返された。最初、3300年前に預言者モーセと実力者コハテとが対立して以来、前12世紀頃のベニヤミン族と他の11部族との対立。前10世紀以来の南のユダ族と北11部族との対立。前7世紀頃のユダ王国内部の親エジプト派と親バビロニア派の対立。西暦1世紀の親ローマ派と民族国粋派との対立…など。歴史のおりおりにユダヤ人内部では熾烈な対立抗争が繰り返された。

18世紀後半に東欧のユダヤ教内部でハシディズム運動がはじまった時も、守旧派と新興ハシディズム派とのあいだで、流血寸前にいたるほどの罵詈雑言合戦がくりひろげられた。だが、ラビン暗殺事件のようなユダヤ人同士の政治テロとなると、2000年ぶりのことだ。

もとより歴史の悠久な流れから見ると、そんな人間同士の対立はほんの一瞬の出来事だ。歴史が新しい局面に入ろうとする曲がり角では、対立はつねに当然な過程だ。対立抗争なしに歴史が新しいページへ移行することは有りえない。だから、ユダヤ人同士の対立が激化したことは、歴史が新しい次元へ発展することの予兆と解釈してもいいのかもしれない。

だが、それにしても歴史には余人に理解できないことが起きる。例えば、ラビン暗殺事件のことだが、暗殺者イガル・アミールの犯行の直接動機は、恋人の歓心をひきだすためであった。

イエーメン系ユダヤ人のイガルは、欧州系ユダヤ人女性マルガリート・ハルシェフに恋をしていた。二人とも思想的には極右であったが、イエーメン系男子が欧州系女子と結婚することは、平等社会のイスラエルでもまず考えられないことであった。平等とか権利とか云々するまえに、両者の文化が違いすぎるのである。但し、その逆のケースは、いくらでもある。

そこで、イガルは何とか自分をマルガリートに認めてもらおうと思って、ついにラビン暗殺を実行したのである。暗殺者イガルは無期懲役。マルガリートはイガルの陰謀を当局に報告しなかった罪で懲役5年の判決を受けて服役中である。以上はラビン暗殺事件の経緯である。ここまでは、客観的事実の報告として、わたくしは冷静にニュース記事を読む。

ところで、この女性、マルガリートは、じつはわたくしのユダヤ教研究における兄弟子P教授の孫娘であった。Pは若くして文学の才能を発揮し、正統派ユダヤ教のラビの資格をもち、それでいて中道派のアメリカ・ユダヤ神学校で博士号を取得した。エンサイクロペディア・イスラエルの主任編纂委員をするほどの博識であり、聖書への深い造詣をもつ人物であった。

Pは人格温厚、政治的にも彼の言動はつねに中道であった。それなのに、なぜ彼の娘が極右過激派メンバーになったのか。Pが他界して10年、わたくしには今回の事件の裏の経緯を知る手段はない。

唯一わたくしに言えることは、歴史には不可解な部分がつねに存在するという事実である。常人の常識では計り知れない動きがつねに起きている。それは何故か。

なぜ不可解の部分が発生するのか。私が思うに、その答は、人がそれぞれ自分では正しいと思うことを行っているからである。マルガリートもイガルも、かれらの考えでは正しいと思われることを実行したまでである。だが、その行為は万人の賛同を得るものではなかった。

ここに人間社会の難しさがあつて、各自がいかにも正しいと考えていても、各自の判断基準がまちまちである以上は、万人が共通して正しいと承認できる行動には至らない。

ましてや、現在のイスラエルのように、得票数わずか1%の僅差でナタニヤフが首相に選ばれている状況だと、和平論と強硬論とに国論は二分され、正義がふたつある有様だ。こうなると、なおのこと何が起きてもおかしくない状態になる。

もっとも、国をあげて単一意見というのも問題だ。それでは、ファッショ政治である。結論が出るまでの過程では、様々の意見が百出するほうがいい。しかし、最終的にどいう行動をすればいいかを定めるための、ある種の判断基準は万人に共有されていることが望まれる。

聖書はそれを神の目から見て正しいことを為せと命じている。とりわけ神が約束した地(イスラエル)においては、神の視点から物事を見直して事の当否を判断せよ、なのである。

だが、ここでまた難しい問題が生じる。各自が「○○をすることは神の目から見て正しい」と勝手に思い込む。大抵それは自分にとって都合のよいことを、神の利益に置き換えている。ヨブの告白ではないが、神の意思を本当には分かっていないのに、分かったつもりになる。そして、これは神の意思に叶うことだと信じこみ、今度はその行動には歯止めが効かなくなる。人間の傲慢は、人間が謙虚さを失い、神にとって代わることから発生する。

神の目から見た善と正義と理想とは何か。これを各自の理性と良心のもとに探究する実験国がイスラエルという国の誕生意義なのかもしれない。ただし、これはユダヤ人でない我々にも課せられた人類共通の課題でもあるのだ。

西洋美術史～中世

1. キリスト教美術の始まり

中世の美術を語る上で、切り離せないのが、「キリスト教」の存在です。

AD 1・キリスト教は、ユダヤ教を母体とする新興宗教として生まれ、ローマ治世下で弾圧されていた庶民の間で広まっていきます。しかし、313年にコンスタンティヌス帝によって公認されるまでは、危険な思想として弾圧されていました。

その時代のキリスト教信者達は、祈りを捧げるために、地下に集会所を作りました。現在は、「カタコンベ」と呼ばれている場所です。

カタコンベの中にある「石棺の上」や「天井」に、ごく初期のキリスト教美術とも言える壁画が残っています。

それらの特徴は、一見、キリスト教とは無関係のテーマにキリ

ストの教えを象徴させている所にあります。これは、集会所がローマ兵に搜索された時、キリスト教信者が祈りを捧げる場であることがわからないようにするためでした。

2. ラベンナの聖堂とモザイク

313年にキリスト教が公認されると、布教の目的で聖堂が建てられるようになります。そして、文字の読めない人々でもキリストの教えを理解できるように、聖堂の内部はキリストの教えの絵解きで飾られました。

この、4C～6C位までを「初期キリスト教美術」と呼び、現在はイタリアのラベンナでこの時代のモザイクを見ることが出来ます。

ラベンナは、402年に西ローマ帝国の首都になり、立派な聖堂が建ちました。このころに建てられた他の聖堂は、その後8Cに起きた「聖像破壊運動」で破壊されてしまい、ほとんど残っていないのですが、ラベンナの聖堂はこのときの破壊を逃れました。おかげで、今日ラベンナは、「初期キリスト教美術」が見られる貴重な街になっています。

初期キリスト教美術は、古代から中世へ移り変わる過程の美術といえます。古代ローマ美術で試みられた「仮想空間」の技術に、神の世界（非現実）を表現するための技術が重ねられていく様子が3段階に分けて見られます。

1. ラベンナ前期

金地背景・硬直した表情・フリーズ状の構図など、中世的な様式化の傾向は見られますが、まだ自然主義的技法が色濃く残っています。

この時期の作品は、ガッラ・プラチディアで見ることが出来ます。

2. ラベンナ中期

前期と、後期の中間の性格を持っています。

サンタポリナーレ・ヌオーボ聖堂で見られます。

3. ラベンナ後期

中世的な様式化の傾向が強くなり始めます。

技法的には、装飾性が強く、モチーフの記号化が進みます。(たとえば、「植物模様→永遠」・「光輪つきの羊→キリスト」など。) 表現方法は、より非自然主義的になり、空間表現も、「層空間」(階層に基づく空間)を表すようになります。

サン・ヴィターレ聖堂で見ることが出来ます。

3. 初期中世(9C~11C)の写本

6Cに確立された「キリスト教美術」の流れは、8Cに起きた「聖像破壊運動(イコノクラスム)」によって中断されます。

キリスト教の母体である「ユダヤ教」では、もともと「偶像崇拜」を禁止していました。しかし、文字の読めない人々にキリスト教を理解してもらうためには、どうしても、視覚に訴える必要がありました。つまり、「初期キリスト教美術」は布教のために生まれたのです。

8Cにはいと、レオ3世はキリスト教の原点に戻り「偶像崇拜」を禁止しました。

そしてレオ3世が無くなったあとも、その影響は色濃く残り、11Cのオットー朝の時代まで大がかりな作品は作られず、唯一認められた「聖書の写本」に芸術家の仕事を見ることが出来るくらいです。

その写本も、年代によって特徴が見られます。

8C、「聖像破壊運動」の渦中では、人物像はほとんどなく、キリストや福音書記者たちもシンボルで描かれています。

9C、カロリング朝時代に入ると、西ローマで「カロリング朝ルネッサンス」が起こり、古代の美術に戻ろうという機運が生まれました。西ローマは、比較的「聖像破壊運動」の影響が少なかったこともあり、この時代の写本にはキリスト像も描かれ

ています。

11Cのオットー朝時代には、キリスト教の物語絵も復活しました。技法的には、中世的な表現と、古代の三次元的表現が混在しています。

このような「聖像破壊運動」の影響を振り払い、大芸術を復活させたきっかけは、「巡礼」でした。

4. 盛期中世（12C～13C）

千年期にあたる11Cに入ると、キリスト教信者の間で、「キリストの再臨」への期待が高まり、「最後の審判」でキリストに選ばれるために、「聖地への巡礼」が盛んに行われるようになります。

ヨーロッパ大陸に住む信者達の聖地は、「サンティアゴ・デ・コンポステラ」という、「ヤコブ」が亡くなった土地でした。

人が集まれば、大きな教会が必要になり、荘厳さを示すために、大がかりなモザイクや彫刻も作られるようになります。そして、聖地に行く道筋にある「聖遺物」をまつた教会も「巡礼地」として信者が集まるようになり、

こうして、中世キリスト教美術の大芸術は復活しました。

盛期中世は、教会の建築法によって、「ロマネスク」と「ゴシック」に分けられます。

5. 盛期中世の建築様式

中世に造られた教会は、規模を大きくし垂直性を強調することで、より神の世界（天上）に近づこうという目的で建てられました。

この時代の教会は、ビザンチン教会で見られたローマ神殿風の長方形の身廊に、袖廊をつけたラテン十字型をした「バジリカ方式」を基本構造としています。

そして、アーチ状の柱（トンネルヴォルト）を採用することで、ビザンチンでは重くて支えきれなかった石の天井を可能にしました。（それ以前の木の天井では、荘厳さで劣るし、何よりも火災の危険が大きかったのです。）

フランスでは、1150年位を境にロマネスク様式とゴシック様式とにわけて考えられますが、これは、建築方法の改革による構造的な進歩がみられたからで、上述した教会建築が目指していた基本が変わったわけではありません。

ロマネスクとゴシックの違いは、「リブヴォルト」と「バットレス」の二つの技術の開発によるところが大きいです。

「リブヴォルト」とは、ロマネスク様式の「トンネルヴォルト」の進化系で、天井を支えるのに必要な骨組み以外には軽い石を使って、天井を軽くする方法です。

「バットレス」とは、天井の重量を脇に逃がす「支え」の事です。この二つの技術を使えば、天井を支える壁の厚さを薄くできるので窓を広く取れるようになり、さらにより高さのある教会建築が可能になったのです。

そのため、ロマネスクとゴシック様式の教会を比較すると、ロマネスク教会は窓が少なく、内部は暗いです。ただ、壁が多いので、壁画やモザイクといった装飾で華やかに飾られています。ゴシック教会は、天井が高く、窓が多くて明るいです。装飾できる壁面が少なくなったために、信者への布教の絵画は、窓ガラスに描かれるようになり、ステンドグラスが生まれます。また、外観はバットレスがあるためかなり装飾的に見えます。いずれにしても、これらの変化は短期間に起きたので、地方によっては両方式が混在している教会も沢山見られます。

6. 教会を装飾する美術

今日、教会を装飾する美術というと彫刻と壁画を思い浮かべますが、キリスト教美術に丸彫り彫刻が見られるようになるのは、ロマネスク・ゴシック期に入ってからです。

それ以前は、「偶像崇拜の禁止」の教えの影響が強く、彫刻の分

野では、絵画的要素の強い平面的な「レリーフ」が見られるだけでした。

そのレリーフが、ロマネスク、ゴシックと時代が進むにつれ壁から独立した存在になっていき、丸彫り彫刻により近い人体表現を持つようになっていきます。

また、柱像が、ほとんど柱と同一化されていたものから人間らしさを感じさせるようになっていく様は、ギリシア彫刻のアルカイックからクラシックに移行していく様子とよく似ています。

壁画は、ビザンチンモザイクに比べて素朴でシンプルなものが多く、ロマネスクの教会に多く見られます。

ゴシックの教会では、窓を大きく取っていて壁が少ないため、それまで壁に描かれていた「教え」等の壁画を窓に描く必要が生じ、あの美しいステンドグラスが生まれました。

7. 中期ビザンチンの美術

東ヨーロッパでも、1000年以降「修道院ブーム」が起こり教会建築が盛んになります。しかし、1453年に異教徒のオスマントルコに征服された関係で、残存している当時の教会は少なく、保存状態も良くありません。

中世ビザンチンの教会の様子が現在一番良くわかるのは、ベネチアにある「サン・マルコ聖堂」です。

当時ベネチアは、海上貿易でビザンチンと交流が深く、この教会も、ビザンチンの職人を呼び寄せて、ビザンチン風に作られました。

その後も、何度も火災などにより修復が行われていますが、ビザンチンの教会美術の様式を色濃く残して現在に至っています。

1. 建築様式

教会の身廊と袖廊の長さが等しい「ギリシア十字」で、

内陣と外陣を仕切る壁があり、そこにイコンが描かれます。(イコノスタシス)

また、交差部などにクーポラというドーム状の丸天井を乗せるのが特徴です。

後陣とクーポラが最も重要な空間とされ、西ヨーロッパの教会で見られた外陣→内陣の縦の軸に加えて、床→クーポラの高さの軸が内部に存在します。

2. 図像プログラム

ビザンチンの教会内部には明確な序列があります。そして、その序列に従って、壁画装飾の内容がきめられているのが特徴です。

- I. アプス (内陣)・クーポラ
 - II. 上壁部 (クーポラの周辺部)
 - III. 下壁部・ナルテクス (前庭)
- (I が最も重要)

3. 教会内部の壁画

ビザンチンでは、偶像崇拜禁止の運動が西ローマよりも徹底していたので、丸彫りの彫刻は作られませんでした。

そこで聖なる世界を地上に演出するのに利用されたのは、「壁画」(金銭的余裕があればモザイク)でした。上述したように、その壁画ははっきりした図像プログラムに従って描かれました。

0. アプス
半円蓋空間に「玉座の聖母子像」
1. クーポラ
「パントクラール」(中心にキリストの半身像、まわりに天使と旧約聖書の預言者達)：キリストの宇宙観を表現
2. 上壁部
キリスト幼年期の図像

3. 下壁部・ナルテクス

キリスト、マリア、教会の守護聖人などの単身像

ベネチアのサン・マルコ教会のように、クーポラがいくつかある場合は、それぞれのクーポラに新約聖書の物語が描かれていたようです。サン・マルコ教会の例を挙げると、「精霊降臨」、「キリストの昇天」などです。

みちくんとティーブレ

イクヘ

オリエントの興亡

東地中海の岸辺に

シリア、パレスチナにはセム語族系諸民族が歴史の跡を刻んだ。ヘブライは紀元前 15 世紀、パレスチナ（カナーン）に定住し始めた。紀元前 12 世紀の“出エジプト”、10 世紀の“ソロモンの栄華”など、民族の伝承と歴史は「旧約聖書」にその記憶をとどめている。北部のイスラエル王国は紀元前 8 世紀、アッシリア人の軍靴に踏みにじられたが、イェルサレムを都とする南部のユダ王国は、新バビロニア、ペルシアの攻勢に耐えて、民族の歴史を後代に残した。

ヘブライ人の勢力圏の北の地中海岸に、フェニキア人はシドン、ティルスなどの都市国家を経営した。地中海貿易に進出し、カルタゴを始め多くの植民市を作った。ジブラルタル海峡を抜けて北大西洋へ、インド洋へも航海したといわれる。ローマ人はかれらをポエニと呼んだ。カルタゴとローマの戦い“ポエニ戦争”の呼称の起こりである。

いまから 1 万年ほども前、“肥沃な三日月地帯”に、ナイル川の流域に人々と動物が集まって、農業と牧畜の生活が始まった。高台を築いて神殿とし、パピルス草の繊維を固めた紙に“死者の書”を書いた。シュメール人は“ギルガメッシュ叙事詩”を歌い、バビロニア人は法律を作り、ヒッタイト人が鉄の技術をもたらし、エジプト人が太陽神一神教を創始した後に、アッシリアの軍団がオリエントを制圧した。その帝国の崩壊の後、イラン高

原からペルシア人がやってきた。

文明の形成

いまから2万年ほど前、現生人類の祖であるクロマニヨン人や周口店上洞人は、打製石器や骨角器を使って狩猟採集経済を営んでいた。スペインのアルタミラやフランスのラスコー洞穴で発見された岩絵にその生活が描かれている。地質学の暦では第4氷河期で、やがて後氷期に入る。考古学の暦では旧石器時代の末期であり、やがて中・新石器時代へ移行する。新石器時代への移行は、よく研磨した石器（磨製石器）の出現と、農耕・牧畜の開始、定住生活と氏族制社会の形成によって特徴づけられる。イラク北部のジャルモ遺跡は、およそ6500年前のものとして推定されているが、麦類を耕作し、羊・山羊・豚などを飼育していた跡を示している。

農耕・牧畜の生活形態は西アジアに始まり、東西に伝播したと、文明の発生を一元論的に説明したがる学者はいまでもいる。西方は地中海とヨーロッパ内陸にひろがり、東方へは二波にわかれ、一つはインダス川に達して紀元前3000年紀（前3000～前2001）にインダス文明を成立させた。もう一つの波は中央アジアを経て黄河流域に達した。中国最古の彩陶文明がそこに成立したというのである。その真偽はともかく（インダス文明についてはこの説は否定されている）、西アジアが農耕と牧畜の発生に適した条件を備えていたことは確かである。

西アジアには、新石器時代に栽培されたエンメル小麦という品種の小麦の野生種がいまなお自生している。だから、栽培品種の小麦や大麦の祖種が野生していた可能性が高いのである。また、後氷期に入ると、西アジア一帯は乾燥してきた。アフリカ西海岸からイラン高原までしだいに荒地がひろがり、人間と動物は川の流域やオアシスに集住した。そこに人間と動物の共存関係が生まれたのである。この考え方は、ほぼ妥当なものとして、多くの学者によって認められている。

メソポタミアの夕映え

旧約聖書のノアの洪水伝説は、紀元前3000年ごろ、メソポタミアに文明を開花させたシュメール人の叙事詩「ギルガメシュ」にその祖型をもつという。シュメール人の社会はティグリス・ユーフラテス両河の河口域に展開した。ラガシュ、ウルク、ウルといった都市国家群の集合である。両大河の押し流す土砂が流路を変え、河口を埋める。洪水は自然の営みであり、治水灌漑と農耕、粘土板に楔型文字の商取引文書、干し煉瓦で築きあげる神殿（ジグurat）の文化がそこに生まれた。

シュメールの北にセム語族系統のアッカド人がいた。これが紀元前2400年ごろサルゴン王の下に開いたのがシュメール＝アッカド王朝である。この統一王朝が150年ほど続き、その後分裂の時代を経て紀元前2100年ごろウル第3王朝が立つ。シュメール文明の黄金期である。これもしかして紀元前2000年ごろ、メソポタミアの覇権をバビロニア王国に譲り渡

す。シリア方面から移住したセム語族系のアムル人が、すこし上流のバビロンを都としておこした王朝である。古バビロニア王国とか、バビロン第1王朝とか呼ばれるが、とりわけ第6代目の王ハンムラビは名高い。今世紀初頭、ペルシアの古都スサで、法律の文章が刻まれた。高さ2m余りの黒色玄武岩の円柱が出土した。これが「ハンムラビ法典」の原本であって、民法、刑法、訴訟法などに分類できる、かなり体系的な法律集成である。ハンムラビ王の治世年代については、古来論争があったが、いまでは紀元前18世紀と、研究者の見解は一致している。「ハンムラビ法典」は、紀元前18世紀のメソポタミア社会の現実を映している。

3. 鉄器文明へ

紀元前16世紀後半、古バビロニア王国はヒッタイト人（バビロニア人はハッチと呼んでいた）に滅ぼされた。これはインド＝ヨーロッパ語族に属し、すでに紀元前17世紀に小アジアに入り、ハットゥサに都して国家を建てていた。今世紀初頭、現在トルコのボガズキョイ村のハットゥサ遺跡から、多量の粘土板が出土した。ボガズキョイ文書といい、この解読が進められて、ヒッタイト社会の様子や、ヒッタイトとエジプトとの交渉など、紀元前2000年紀のオリエントの国際関係がかなり明らかになった。ヒッタイトはそれ以上バビロニアに関心を示さず、代わってイラン系のカッシュ人がバビロンに入ってカッシート王朝を立てた。

ヒッタイト国家は、征服者である少数のヒッタイト人が、戦士のタイプの貴族として、多数の原住民を支配する形をとっていて、これはギリシア人やゲルマン人など、他のインド＝ヨーロッパ語族の民族に共通する性格であり、メソポタミア社会には異質のものであったと思われる。紀元前14世紀には鉄の技術を完成した。シリア海岸の覇権をめぐる、ヒッタイトはエジプトとしばしば交戦したが、その際、ヒッタイト戦士の鉄剣がエジプト人の青銅の矛を無造作に切り裂いたというイメージは、古来好んで語られてきたところである。

4. 世界帝国へ

メソポタミア南部にウル第3王朝、バビロン第1王朝が栄え、小アジア半島からシリアにかけてヒッタイトが覇権を確立する。この悠久の時の流れに漂って、メソポタミア北部のティグリス川中流に、セム系を主力とする混成民族集団アッシリア人は、アッシュール、ニネヴェなどの都市国家を着実に経営していた。紀元前12世紀、かれらは動いた。この世紀の始めにヒッタイト王国が瓦解した原因の一つには、アッシリア人に王国の東南部を侵されたこともあったのである。

これが最初の兆候であった。アッシリアは四方に進出を開始し、紀元前8世紀、サルゴン王の代、メソポタミア、アルメニア、シリア、パレスチナを支配する帝国を築いた。紀元前7世紀には一時エジプトを支配したが、そのエジプトが“アッシリアのくびき”から

逃れようと独立戦争を起こしたのが切っ掛けで、紀元前 612 年、帝国は崩壊し、エジプト、リディア、メディア、新バビロニア 4 国が併立する形勢となった。

この 4 国併立状態を克服したのがペルシア人である。これもヒッタイトと同様、インド＝ヨーロッパ語族の民族で、イラン高原に定着していたが、メディア王国成立後、アケメネス家のキロスの指導の下に、スーサに拠って独立し、ペルシア王国を興した。第 3 代ダレイオス（ダリウス）1 世は、東はインダス川、西は小アジア半島の西岸、南はナイル川にいたる大帝國を建設した。アッシリア王国の遺制を活かしたサトラップ（地方行政区の長官）の制、“王の目・王の耳”（地方派遣監察官）の制、道路の整備、駅馬の制など、中央集権体制の整備がダレイオスの仕事として指摘されるが、ペルセポリスの都の壮麗、なんといってもこれこそがペルシアの大王ダレイオスの後世への最大の贈り物であった。

5. ナイルの賜

シリアのレバノン山地におけるヒッタイトとエジプトの角逐は、紀元前 13 世紀前半、エジプト新王国第 19 王朝のラメス 2 世の代のことであった。ハム語族系農耕民族エジプト人がナイル川流域に築いた王国の王朝の系譜は、紀元前 2700 年ごろの第 1 王朝以降、すでに 18 の王朝を数えた。

その間 1500 年、ナイル川は毎年上流のヌミディア地方に雨季の気配を感じるや増水し、地味豊かな土壌を運んできた。エジプト人は移動を知らぬ移動農耕民であった。ただし、このばあい、移動するのはナイル川の作る農耕の環境の方であった。ナイルの住人たちは季節に鋤返される大地の作物であった。エジプト人の心性が死と死後の世界に強い関心を示したのは、このような生活環境とのかかわりにおいてであったろうか。死者の神オシリスの神話はナイル川の枯死と再生の物語である。

ピラミッド建造で知られる第 4 王朝の繁栄をピークに、ナイル川下流のメンフィスに拠った古王国が、王朝の交替の一つのサイクルを完了したあと、紀元前 21 世紀なかごろ、第 11 王朝が上流のテーベに拠って興隆した。ちょうどメソポタミアにウル第 3 王朝が成立したころである。これに始まる王朝のシリーズを中王国と呼ぶ。第 12 王朝の繁栄ののち、紀元前 17 世紀初頭、セム語族系遊牧民族ヒクソスが侵入し、ナイル川三角州を占領して王朝を開いた。第 15 王朝である。この異民族の王朝は 2 代 100 年間続いたが、その間馬と戦車の技術をヒクソス人から学んだエジプト人は、テーベに拠って反攻に成功する。第 17 王朝であり、その成果を受け継いだ第 18 王朝以降、エジプト史は新王国の段階に入る。

第 18 王朝はほぼ 200 年間も続いた大王朝であって（前 1570～前 1345）、トトメス 3 世（前 1502～前 1448）の外征、アメノフィス 4 世、改名してイクナートン（前 1377～前 1358）の宗教改革で知られる。アメノフィスはテーベの南に新都を造営し、アケト＝アトンと命名した。現在のテル＝エル＝アマルナである。テーベの守護神アモンを主神とする自然崇拜多神教を停止し、太陽神アトンを唯一神とする一神教をおこした宗教改革は、彫刻をはじめ造形美術に清新の気を吹き込んだ。様式美を強調する従来の芸術に写実的手法を加えた

アマルナ芸術と呼ばれる流派がそれである。これは、しかし、王の死後、アトーン神教の廃棄とアモン多神教の復活、テーベへの再遷都という情勢の推移のうちに、芸術における指導的流派としての地位を失った。

新王国の繁栄は、第 20 王朝のラムセス 3 世（前 1301～前 1234）の代を最後として終わる。第 18、19 王朝の時代には東方の諸勢力と覇を競ったエジプト王国も、以後、一地方政権として単調な起き伏しを重ねるうちに、やがてアッシリア、ペルシアのオリエント統一の策動に呑み込まれる。

福音書とユダヤ教



福音書とユダヤ教

サミュエル・サンドメル [著] 平野和子・河合一充 [訳]

本体 ¥2,718 + 消費税

ISBN4-89586-129-5

[\[一覧へ戻る\]](#)

ユダヤ人が聖書学の成果を踏まえて、キリスト教の聖典をユダヤ人に紹介したユニークな本。

[\[出版案内へ\]](#)

目次

[\[ためし読み\]](#)

- 第一部 聖書を読むまえに
 - 1章 新約聖書の成り立ち
 - 2章 歴史家の取り組み方
 - 3章 ユダヤ教の背景
 - 4章 ユダヤ教からキリスト教へ
- 第二部 パウロとパウロの手紙
 - 5章 パウロ主義の背景
 - 6章 パウロ
 - 7章 キリストについてのパウロの見方
 - 8章 教会とモーセの律法
 - 9章 パウロの手紙
 - 10章 パウロのキリスト教とギリシア宗教
- 第三部 共観福音書とイエス
 - 11章 福音書の成立まで
 - 12章 マルコによる福音書
 - 13章 マルコによる福音書を超えて
 - 14章 マタイによる福音書
 - 15章 ルカによる福音書
 - 16章 歴史上のイエス
- 第四部 そのほかの書
 - 17章 公同書簡、牧会書簡、ヨハネの手紙
 - 18章 ヤコブの手紙
 - 19章 ペテロの第一の手紙
 - 20章 ヘブル人への手紙
 - 21章 ヨハネの手紙
 - 22章 ヨハネの黙示録
 - 23章 使徒行伝
 - 24章 ヨハネによる福音書
 - 25章 牧会書簡
 - 26章 ユダの手紙、ペテロの第二の手紙
- 第五部 新約聖書の意義 182
 - 27章 新約聖書信仰の真髄
 - 28章 エピローグ

[\[一覧へ戻る\]](#)

[\[先頭に戻る\]](#)

訳者あとがき（抄）

近年、キリスト教のルーツとしてのユダヤ教への関心が高まり、ユダヤ的背景のもとで福音書の世界を再検討することが始まっていると言われる。

その一方で、ユダヤ教はキリスト教をどのように見ているかは、両宗教の関係が論じられるとき、ごく自然に興味を引く問題である。本書は、ユダヤ人が新約聖書をどのように見ているかの格好な資料の一つである。

本書はSamuel Sandmel(1911-1979)によるA Jewish Understanding of the New Testament(1956年初版)の翻訳である。

著者サミュエル・サンドメルはアメリカ・オハイオ州出身の改革派ユダヤ教のラビで、聖書学者。改革派ユダヤ教の神学校ヘブリュー・ユニオン・カレッジを卒業し、イエール大学で博士号を修得後、1952年からずっと母校ヘブリュー・ユニオン・カレッジで聖書とヘレニズム文学の教授を務めた。

サンドメル教授の関心は一貫してユダヤ教と新約聖書の関係であった。本書を皮切りに、次々と新約聖書関係のテーマの著作を世に出し、国際的にもこの分野の権威として評価を受けてきた。

本書が書かれた動機は、著者の序文にもあるように、ユダヤ系アメリカ市民として隣人のキリスト教徒の聖典を理解しようとしたところから出発して、同胞のユダヤ人に新約聖書を紹介するためであった。

本書の序文が詳しいのであらためて繰り返す必要はないが、本書は一般教養を有するレイマン(素人)向きに書かれた、どちらかといえば学問的色彩の強い書である。

キリスト教という信仰を推奨したり、あるいは逆に誹謗したりするためのものではない。

本書の初版が1956年であり、今から40年前の著作である。今日までの新約聖書学の進展が反映されていないのは、読者に不満が残るかもしれない。ただし、今世紀の50年代にすでに、ユダヤ人にとって伝統的に禁忌であったテーマに取り組んだ点を評価したい。

著者が改革派ユダヤ教のラビであるからこそ、キリスト教とユダヤ教の対話への突破口を開くことができたであろうと思う。

また、アメリカという宗教的寛容の土壌に生きるユダヤ教徒だから、オープンな心で新約聖書を読むことができたのかもしれない。今日、この分野に少なくないユダヤ人研究家が参加している現状を見るにつけ、一人の先駆者の最初の著作を日本に紹介することは意義があろうかと考える。

本書は、ユダヤ人がユダヤ人の立場から見た新約聖書の概観であるので日本の非キリスト者の読者には、本書はキリスト教の聖典の入門書として役立つかもしれない。

キリスト者には、自分の宗教の聖典について、異なった視点で、しかもユダヤ教的観点から振り返ってみる機会を提供するだろう。

ここで注意したいのは、本書はあくまでも学問的アプローチで新約聖書を客観的に展望しようとしていることである。

はたしてその目的が成功したかどうかの評価は、読む人の立場で異なるだろう。キリスト教各派が様々な神学的見解を抱くこの分野に関して、一冊の単行本にまとめることの困難と限界は著者がよく認識しているところである。

第二章に新約聖書への取り組み方を述べているが、著者の立場はアメリカのリベラルなプロテスタント神学の傾向をおびているようである。

「これから述べることは、こうした自由な学問の主流派の結論を良心的に描き出そうとするものである。したがって、本書でのアプローチは熱心な訓戒者のそれでも、擁護者のそれでもなく、反対者のそれでもない。むしろ厳正かつ正直な学問的な伝統を反映させ、真実を自由に探究してみたいと思っている。

こうしたリベラルなプロテスタントの伝統では、新約聖書をその時代の背景の中で、その原初の意味を追いながら、できるだけ正確に描き出すことを目的としている。この手法はまさに新約聖書を理解したいというユダヤ人にとって適切な方法である」(43頁)。

なお、本書で著者が新約聖書学の独自の研究結果を発表しているわけではない。以上のような前提を考慮すれば、いろいろの立場の読者も本書を読みつつ有益な知識を得られるものと信じる。

さて、キリスト教とユダヤ教との間には、この二千年間、迫害と対立という不幸な歴史があった。西欧の文化圏の渦中に暮らしながら、ユダヤ人がキリスト教についての知識を持つこと、特に新約聖書を読むことは長い間タブーであった。ユダヤ人がキリスト教について率直な見解を公表する例はまれであった。

一方、キリスト教の側もユダヤ教に対する、ステレオタイプの先入観と偏見に染まっていた。ところが、20世紀の後半、両者の対立の厚い壁が破られつつあり、和解と相互理解への道が少しずつ開かれていることはあまり知られていない。それについて少しふれてみたいと思う。

二つの宗教の関係に変化が現れたのは、第二次世界大戦以後のことである。この時期を前後して両者に影響を与えた大事件が起こった。それは反ユダヤ主義の頂点とも言うべき、ナチス・ドイツのホロコーストとユダヤ人国家、イスラエルの建国である。

まず、戦後に西洋キリスト教諸国にホロコーストを許したことへの罪意識が残ったが、キリスト教の反省はユダヤ教への対立から和解へ導くきっか

けになった。

また、積極的にはドイツとのレジスタンスの戦いで、ユダヤ人とキリスト者の共闘が宗教の壁を乗り越えさせる一助となったという。その辺の事情を聖書学者アンドレ・シュラキの『ユダヤ思想』(119頁)から引用すると、「フランス文化世界のなかでのキリスト教徒とユダヤ教徒の出会いは、1940年から1945年にわたるレジスタンスの戦いを通じて聖別された。

血の洗礼(一緒に戦ったこと)が、ユダヤ教徒とキリスト教徒の友情の礎石をゆるぎないものにした。……ユダヤ教に関してキリスト教側の教えてきたことを、歴史的に再検討するうごきが生じた。

セーリスベルグで開催されたユダヤ・キリスト教会議(1947年)によってさだめられた十項目は、第二ヴァチカン公会議ではっきりと認められた。

1964年11月20日、金曜日、公会議の席上、反対九十九票に対する賛成1657票で、『ユダヤ教徒と非キリスト教者についての資料』が承認されたが、それは教会のユダヤ的起源を思い起こさせ、キリスト教徒とユダヤ教徒に共通な世襲財産の豊かさを強調し、両者が互いに知り合い尊敬し合うことを勧め励ますかたわら、ユダヤ教徒に対するこれまでの憎しみ、迫害、偏見(キリストを磔刑にしたことに対する非難をも含めて)を咎め、嘆かわしいものとみなし、あまつさえきびしく断罪するものである」

つまり、キリスト教の立場から(第二ヴァチカン公会議の宣言はカトリックのもので、必ずしも全教会の意思とは言えないが)、従来のユダヤ人にイエスの死の責任を追わせたことを撤回し、キリスト教のユダヤ起源を確認したのである。これは歴史的転換であると言えよう。

『福音書とユダヤ教』(1988年SCM Press, 邦訳ミルトス刊行)では、ユダヤ教とキリスト教の対話の実例として、お互いに相手の聖典の研究を共同で試みている。その本の序に、イエスの精神形成の跡を尋ねる旅として、キリスト教の信条の本質概念はユダヤ教の土壌で成長したこと、その土壌から根を抜かれると理解が出来なくなること、とのプロテスタント・キリスト教の理解が載せられている。両宗教の和解は新しい潮流として注目されて

よい。

他方、イスラエル建国によりユダヤ人が離散の状況から二千年ぶりに自分の国をもったことは、宗教文化史的にも多大の意義をもつ。キリスト教文明の国における仮住まいから独立し、正統的ユダヤ教による民族結束の束縛から自由を得た結果、イスラエルにおいて従来のタブーを破る学問研究が始まった。(正統派はキリスト教文献にふれることをタブー視している)。

ユダヤ人学者による新約聖書研究もその一つで、ヘブライ大学のサフライ教授、フルツサル教授はじめ優れた聖書学、歴史学の研究者が登場している。

もちろん、ユダヤ教徒にとって新約聖書の研究は、第二神殿期ユダヤ教に関する情報を得ることが出発点であるが、原始キリスト教のユダヤ的背景を知る上でイスラエル学派が貴重な成果を挙げていることを、ついでに強調しておきたい。

近年、ユダヤ教徒とキリスト教徒の共同研究の組織「エルサレム学派」は、故R. Lindsey博士の指導下にユニークな共観福音書研究を進めている。

パレスチナ問題 Q&A

テロ根絶を求める国際世論の高まりのなか、注目されるパレスチナ問題。その原因、パレスチナとイスラエルの対立の歴史、和平交渉の経過などを考えました。(小泉大介記者)

原因はなに

Q パレスチナ問題の原因は？

A 半世紀以上にわたり解決をみないパレスチナ問題で、そもそも、二十世紀の初めにオスマントルコがパレスチナなど中東地域を支配していた時期までの事情はかなり異なっていました。

パレスチナには多数のアラブ人とともにユダヤ人も長年住んでいましたが、両者の対立の歴史は伝わっていません。イスラム、キリスト、ユダヤの各教徒が平和的に共存していました。

問題の直接の原因となったのは、中東での覇権を目指したイギリスの態度です。イギリスは第一次世界大戦でオスマントルコとたたかい、戦争を有利に進めるため、中東にたいし「三枚舌」外交を展開しました。

フランスとの間で、戦後の中東を両国で分割する密約を結ぶ一方で、アラブ側にパレスチナを含むアラブ国家の独立を認め、ユダヤ人にたいしてもパレスチナでの「民族的郷土」の建設を支援する約束をしました。イギリスの「分割支配」政策が、アラブ人とユダヤ人双方に亀裂を生む原因をつくり出したのです。

一方、世界中に離散していたユダヤ人は十九世紀末以降、特にヨーロッパでの反ユダヤ主義の高まりの下で、自分たちの国の建設を目指し、パレスチナへの移住を開始しました。シオニズム運動です(エルサレムの別名をシオンという)。

この移住に拍車をかけたのが、一九三〇年代以降のナチスによるユダヤ人迫害でした。ヨーロッパで六百万人のユダヤ人が虐殺されたホロコーストの悲劇が、パレスチナ問題のもう一つの背景となったのです。

対立の経過は

Q パレスチナとイスラエルはどのように対立してきたのか？

A 第二次世界大戦後、パレスチナのユダヤ人は約六十万人に達しました。パレスチナ人とユダヤ人の衝突と、国際連盟委任統治として同地域を支配していたイギリス人にたいするテロの頻発により、イギリスは一九四七年二月、問題解決を国連の手にゆだねました。

同年十一月の国連総会は、パレスチナ分割決議を採択しました。パレスチナをユダヤ人国家とパレスチナ人国家に分割し、エルサレムは国際管理のもとに置くというものでした。決議は、人口で三分の一、土地所有面積6%弱のユダヤ人に57%の地域を割り当てる不公正な面があった一方、二つの民族の自決権に基づく二つの国家建設を打ち出した点で積極的意義ももっていました。

しかし翌四八年五月、ユダヤ人は当事者間の合意がないまま、国連決議を根拠にイスラエルの建国を一方的に宣言。分割決議に反対のアラブ諸国はイスラエルに攻め込みました(第一次中東戦争)。

戦争の結果、イスラエルは国連決議でパレスチナ領とされた部分の半分を占領。七十万人も百万人近くともいわれるパレスチナ難民が発生し、その後の対立の大きな原因となりました。東エルサレムを含むヨルダン川西岸はヨルダンが、ガザ地区はエジプトが占領しました。

以後計三回の中東戦争がたたかわれ、特に、六七年の第三次中東戦争は、イスラエルによる明らかな侵略戦争で、紛争のさらなる激化をもたらしました。イスラエルは東エルサレムを含むヨルダン川西岸とガザ地区を占領し、全パレスチナを支配。新たなパレスチナ難民が発生します。さらに、シリア領ゴラン高原とエジプト領シナイ半島も占領しました。

この戦争の後、国連安保理は「最近の紛争で占領された領土からのイスラエル軍の撤退」を要求する決議二四二を採択します。しかし、イスラエルはこれを履行せず、現在もシナイ半島と南レバノンを除いて基本的に占領状態を続け、三百五十万人ともいわれるパレスチナ人が難民となったままです。パレスチナ側も当時、決議二四二がパレスチナ人の民族自決権に言及していないとして、同決議の受け入れを拒否しました。

パレスチナ側では、六四年にパレスチナ解放機構(PLO)が創設されます。それまでパレスチナ人の代弁者はアラブ諸国で、PLOはパレスチナ人自身の初の政治組織となりました。

PLOが結成当時採択した「パレスチナ国民憲章」の第一七条は「パレスチナの分割とイスラエルの創設は、そもそも当初から非合法」であったとし、イスラエル抹殺の立場を鮮明にしていました。

以後、この立場からの武力闘争に加え、PLO一部戦闘員による無差別テロが繰り返され、パレスチナ問題解決を妨げる最大の障害の一つとなります。

イスラエル側は八二年にレバノンを侵攻し、首都ベイルートに本部を置いていたPLOを追放。その際、イスラエルが後押しするレバノン民兵がパレスチナ難民キャンプを襲撃、二千人とも三千人ともいわれるパレスチナ人を虐殺し、国際社会の強い非難を浴びました。

和平交渉は

Q 和平交渉が始まったけれど…

A パレスチナをめぐる問題は八〇年代後半に転機を迎えます。

八七年、ガザ地区とヨルダン川西岸のパレスチナ住民が、投石による抵抗運動に立ち上がります。インティファダと呼ばれたこの抵抗運動はマスコミでも広く報道され、世界がパレスチナの実情に関心を払うようになります。

この状況下、八八年十一月のパレスチナ民族評議会は国連総会の分割決議に基づくパレスチナ国家独立を宣言します。同年十二月、アラファトPLO議長は記者会見で、国連安保理決議二四二の受け入れ、イスラエルの生存権の承認、あらゆる形態のテロ行為の放棄を表明しました。二国家の共存路線への転換でした。

九一年の湾岸戦争を契機に同年、スペインのマドリードで中東和平を議題にした初めての国際会議が開催されました。九三年には、ノルウェーの仲介で労働党のラビン首相率いるイスラエル政府とPLOが直接交渉を開始。同年九月、パレスチナ暫定自治合意(いわゆるオスロ合意)が結ばれました。

これは、イスラエルとPLOがはじめて相互を承認して結ばれたもので、その内容は、国連安保理決議二四二に基づき、イスラエル軍が占領地から段階的に撤退し、パレスチナが暫定自治を進めること、同時にパレスチナの最終的地位交渉を行い、難民の帰還問題やエルサレムの帰属、さらに入植地問題などを解決し、歴史的和解を達成するというものでした。

合意は、国家建設を含むパレスチナ人の民族自決権実現を保障しませんでした。世界中は、調印式でラビン首相とアラファト議長が交わした握手を見守りました。

しかしその後の交渉は、イスラエルに巨額の軍事援助を行う米国が仲介の主導権を握ったことに加え、イスラエル政府による入植地の拡大政策がとられたことなどで難航。オスロ合意を認めないパレスチナ過激派による無差別テロが事態をいっそう困難にしました。

昨年七月には、米国でパレスチナとイスラエル両首脳による最終地位に関する集中協議が行われました。東エルサレムのパレスチナ人居住区のパレスチナ主権や、ガザ地区のほぼすべてと西岸の80～90%からのイスラエル軍撤退に基づくパレスチナ国家樹立が話し合われたとされますが、結論は出ず、オスロ合意で決められた最終地位交渉の期限が切れました。

現在の衝突は

Q 現在の衝突をどうみたらいいのか？

A 昨年九月末、リクードのシャロン党首（現首相）がイスラム教聖地があるエルサレムのハラムアッシャリーフ（神殿の丘）を訪問したことに端を発して始まったイスラエルとパレスチナの衝突は、この一年余パレスチナ人六百九十九人、イスラエル人百七十九人の犠牲者を出しています（十月二十二日現在）。

双方の銃撃戦に加え、パレスチナ過激派のテロと、イスラエル軍によるミサイルまで使ったテロ容疑者殺害へと事態はエスカレート。最近では、イスラエル軍によるパレスチナ解放人民戦線（PFLP）議長殺害と、PFLPによるイスラエル観光相暗殺、さらにイスラエル軍によるパレスチナ自治区侵攻という暴力の連鎖が生まれています。

今年五月、この紛争の国際調査委員会が、双方に即時暴力停止と交渉再開を求める報告を発表しました。

そこでは、「一部のイスラエル人は、引き続き占領下で生活するパレスチナ人が、日々耐えなければならない屈辱を十分理解していないように見える」「一部のパレスチナ人は、テロ行為が、共存の可能性へのイスラエル人の信念をどれほど傷つけているかを理解していないように見える」と指摘しました。

停戦の実現はもちろん、パレスチナとイスラエルの双方が相手への抹殺論の放棄と相互の生存権承認による平和的共存の方向に立ち戻るとともに、イスラエル軍の占領地からの撤退とパレスチナの民族自決権を実現するための交渉再開が、猶予を許さない課題となっています。